

り熊本に潜み餅店某家に事へ吉兵衛と稱す長ずるに及て一日船に乘り江戸に赴く途に颶風に遇ひ船客皆溺る吉兵衛獨り幸に岩上に漂着し是より葛藤を攀ちて山岳に登り辛うじて一屋を認め入て宿を乞ふ是れ山賊赤川大膳の家なり大膳夜吉兵衛を腹に刺さんと欲す吉兵衛之を知り端坐二寶を持して待つ眼光炯然たり大膳大に驚き因て其の人となりを問ひて具に其の謀を知り驚き且發して其の計に與せんことを乞ふ且其の族藤井左京を介し其の計を行はんと謀る大膳の族に信天忠と云ふ者あり美濃谷に住す性酷烈にして才氣あり乃ち共に愛に赴く天忠乃其弟子天一の容吉兵衛に肖たるを以て天一を殺し吉兵衛をして天一に擬せしめ宣言すちく天一は元將軍の胤なり從來我が弟子となすと雖も今や江戸に出て將軍に謁し世子となさんとすと村人あつり金銀を騙取す天忠の友に山内伊賀亮と云ふ者あり懇誠人に超ゆ乃共謀を合せ先大阪に出て、徳川の世子となるの後重官を興へんと云ひ金數萬を得たり其より京都を経て江戸に到る大阪京都の城代諸司代取て其の伴を知る者なし翌日先年松平長七郎民間より出て、世子に定まるを以て未だ天一の全く將裔に非ざるを斷ずる能はざればなり江戸に出づるに及び老中松平伊豆守等先づ天一の素性を驗するに皆其の證あり之を將軍に問はず將軍亦實に其事ありと云ふ乃天一の言疑ふ可からずとなし將に將軍吉宗に謁せしめんとす獨り町奉行大岡忠相天一の相貌を視て其似難殺伐の相決して將軍の裔に非ざると言ふ伊豆守等雖もかす忠相乃ち水戸綱條に請ひ遂に再び天一の素性を驗す果して眞の天一に非ざらず天一の井の子に非ず原田の子玉之助なるを知る乃ち享保十三年天一等を忠相の邸に召し之を捕へ八月送て鼻首に處す其官告文左の如し

或は曰く改行時に年三十一品川常樂院に在て豪奢を極む(赤川大膳傳參看)郡代伊奈左衛門之を捕へ糺して瀛人を集め竊かに御落胤と稱するを知る大目附鈴木飛騨守等之を糺すに今年より卅一年を測るに吉宗將軍年十六の時を紀す其の淫行のあるべからざるを知る仍て改行を以て流言を爲し黨與を集むる者となし死罪の上獄門に處すと(實事詳に瀬田問答、柳營日記、享保世説等を引て云ふ所)

本聞き崇信を創寺して之に居らしむ間又人事の煩を逃れて閑靜無涯の境に入り庵を建つ是れ即ち大洞院なり實性無慾唯々神旨を力むるを以て是れなりと承平中遊く年七十五(洞上聯燈錄)

を度せんとなを乞ひ又奏して大乗の戒壇を建つ弘仁十三年二月勅して傳教法師の號を賜ふ六月四日中道院に於て右脇に臥して逝す年五十六、澄の室中極めて人を得たるの稱あり義眞、圓澄、光定、圓仁等の如き皆法門の領袖とす又名公鉅卿の道を開くもの多し貞觀八年勅諭して傳教大師と云ふ平生の著述甚だ富む皆世に傳ふる又書を能く自畫の圖像あり台帳に收む(元亨釋書、東國高僧傳、鑒定便覽、續本朝書史、青蓮院門跡傳)

り心參詣十餘年遊に徳島津州の大洞古寺に栖はれり聲譽藉甚就て學ぶもの日に益々多し元祿辛未の年加州天徳寺に居る乙亥長州大寧寺の明山和尚席を退き心をして其の處を補せしむ成升て能州總持に蒞む翌年秋退老す十月大寧寺に歸る寶永五年戊子九月庚申示す十月十三日偈を書して逝す年六十一(洞上聯燈錄)

善を轉じ人となる即ち汝が身は是れなり未嘗未だ聞かざるを以ての故に誦する能はず又性味多きは蓋し蛇の餘習のみ今より志を堅うせば能く通じて必ず出處を得んと既にして解めて感喜無量、後果して誦經滯るなし嘉祥にして寂す(元亨釋書、東國高僧傳)

テンイ

テンイテンキ

テンターテンキ

テンターテンチ

復せんと欲す元祿己巳の年江州大雲寺に往く翌年事に因て退院し攝州の荒陵に居り...

テンチ

其の甥赤川大膳藤井左京と吉兵衛(後に天)を携へて来り助ふ大膳曰く吉兵衛將軍の自筆と其寶刀とを編て...

テンツテンボ

事を以て予皇子再拜疾と稱して固辭し僧たらんと請ふ辭意懇至乃之を許す皇子冠を剃り十九日吉野に入る...

テンツ

天子寺屋屋、テンノウジヤ、傳之方、堀田正元の女なり...

テンチ

テンボウ、天保、マガハテンボウ、天満宮、スガハラミチザネ、天民、オホクボシツツ...

テンチ

天子と稱す天智帝の同母弟なり生れて岐嶺壯なるに及びて維按神武、天文遣甲に遇す天智帝不豫なる時...

テンツ

報すべし悪尺直に近江に至り高市大津の二皇子を召し我に伊勢に會せよと已にして高城王鎧を與へず...

テンツ

天姥、マツヤマテンボ、天浦、ヨシカハテンボ、天姥、マツヤマテンボ...

テンチ

天智天皇、舒明帝の嫡子にして皇孫皇子と稱す一名中大兄、舒明帝の嫡子にして皇孫皇子...

テンチ

天子と稱す天智帝の同母弟なり生れて岐嶺壯なるに及びて維按神武、天文遣甲に遇す天智帝不豫なる時...

テンツ

天子と稱す天智帝の同母弟なり生れて岐嶺壯なるに及びて維按神武、天文遣甲に遇す天智帝不豫なる時...

テンツ

天子と稱す天智帝の同母弟なり生れて岐嶺壯なるに及びて維按神武、天文遣甲に遇す天智帝不豫なる時...

お藤野に屯せしむ田中足麻呂倉屋道守を近江の將... 山部王、藤我果安、巨勢人兵數萬に將として將に不...

權内匠又は飛騨山人と云へり日本橋物産町の處に狂歌... 指南所の看板を掲げ社中を小橋側と名く門人頗る多し...

デンヨウ 傳翁「イタミヤウツ」 天應大現國... デンウダイゲンコウシ 出目友閑... デンイウカン ミツヤス...

出目二世にして俗稱二郎左衛門越前に住す(假面譚)... デメ ノリミツ 出目則滿 面打なり越前...

創り形を毀ら風流自から命じ自稱して無用の人と曰ふ... 靜軒始め田口某に從ひて學び後山本義隆に寄食して...

テラサハ イウサイ 寺澤友齋 江戸の... テラサハ カタカ 寺澤政高 廣高の... テラサハ カタカ...

テモノーテラカ

テラカーテラサ

テラサ

テモノ

テモノーテラカ

テモノーテラカ

テラサ

七十一、法名休甫宗可、廣高每日寅の刻に起き卯に途

テラシマ ヒロタカ 寺澤廣高一 名は正成尾張の人なり姓は紀氏、中納言長谷雄の子、大頭

テラシマ マサアキ 寺島昌昭 勤王家なり字は子大、刀山と號す通稱忠三郎、州藩の士なり

テラシマ

テラシマ

テラト

テラト

兵隊を分て三隊と爲し各々之に長たり又甲子の學通武

テラシマ ムネノリ 寺島宗則 鹿兒島藩和泉郷の一階臣にして小字を陶藏と稱す天保三年五

テラシマ リヤウワン 寺島良安 浪花

テラシマ

テラシマ

テラシマ テイタラウ 寺島貞太郎 海軍機關少監なり静岡縣駿東郡揚村の人海軍兵學校に入

テラシマ マサシゲ 寺田正重 通稱勘右衛門起倒流術の祖なり福野流を寺田平左衛門に受け流

テラシマ ヤスヨシ 寺田錫頼 陸軍歩兵大佐なり金澤藩士にして明治三年陸軍幼年學校に入り又

テラシマ リンセン 寺田臨川(寺田自ら修して寺とす) 安藝侯の文學なり名は華、字は士豹一

テラシマ ウシノスケ 寺島牛之助 佐々成政の臣なり勇敏にして廉、功あり成政の末孫城を

テラシマ カンシン 寺西関心 初の名は彌助其祖交備中守守徳川家康に關ヶ原に從ひ一方

テラシマ タラウ 寺戸太郎 陸軍歩兵中尉なり島根縣出身にして明治三十七年八月日露戰役に從

テラト

テラニ

自ら任ず後六法組の俠客正木源右衛門古書屋傳兵衛... テラニシ ナホシ 寺西直 陸軍歩兵中尉... テラニシ ナホシ 寺西直 陸軍歩兵中尉...

テラム

を辭して日本郵船會社に入り浦羅支店長として對露貿易に鋭意... テラム サンセン 寺村山川 俳諧師... テラム サンセン 寺村山川 俳諧師...

テラキ

行を止む子必ず以て遺徳とせん然れども子は賢人なり... テラキ エキアツ 寺井行篤 陸軍砲兵大尉... テラキ エキアツ 寺井行篤 陸軍砲兵大尉...

テラカ

テラカズ 輝一 安藝の刀匠にして半三郎と稱す... テラカド 照門 藤原姓丹波大膳と稱し後守に改む... テラカネ 輝包 輝津の刀匠之進照包を看よ...

テラシ

テラシ 照重 武蔵下原の刀匠にして周重の子天正年間の人なり... テラシ ヒロ 輝廣 武蔵下原の刀匠にして寛文年間の人なり... テラシ ヒロ 輝廣 武蔵下原の刀匠にして寛文年間の人なり...

テラヒ

テラヒロ 輝廣 武蔵下原の刀匠にして寛文年間の人なり... テラヒロ 輝廣 武蔵下原の刀匠にして寛文年間の人なり... テラヒロ 輝廣 武蔵下原の刀匠にして寛文年間の人なり...

テルミ

テルミ子 照道 出羽の刀匠にして亦武蔵江戸に住す...

テルヨシ

テルヨシ 照吉 相模新刀の刀匠にして駿河の刀匠と同人なるべし...

ト之部

トイチ セキコウ 十市石谷 商家なり豊後府高田の土名は實字は子元...

トウウ

トウウ 洞雲 カノドウウン 洞雲クハヤマシナガ...

トウエ

トウエフ 桐葉 江戸の俳人なり氏は田島通稱五助...

トウカ

トウカイエン 東海陳人「カウラウセキ」...

トウカトウキ

トウカウ 等 耕 書 人 なり 書 法 を 雪 舟 に 學 び 又 周 文 の 風 を 慕 び 人 物 花 鳥 を 能 く 筆 意 大 に 風 致 あり

トウキ

トウキウ 等 詞 詩 人 なり 本 姓 は 井 戸 平 助 名 氏 弘 隆 幕 府 の 士 に して 西 丸 庵 徒 と なる 九 如 は

トウク トウク

トウクワウ 等 詞 詩 人 なり 法 を 雪 舟 に 取 り て 能 く 景 物 記 述 を 善 く 筆 意 大 に 風 致 あり

トウカトウキ

トウカウ 等 耕 書 人 なり 書 法 を 雪 舟 に 學 び 又 周 文 の 風 を 慕 び 人 物 花 鳥 を 能 く 筆 意 大 に 風 致 あり

トウキ

トウキウ 等 詞 詩 人 なり 本 姓 は 井 戸 平 助 名 氏 弘 隆 幕 府 の 士 に して 西 丸 庵 徒 と なる 九 如 は

トウク トウク

トウクワウ 等 詞 詩 人 なり 法 を 雪 舟 に 取 り て 能 く 景 物 記 述 を 善 く 筆 意 大 に 風 致 あり

トウダウ

トウダウ

トウダウ

トウダウ カウカイ 藤堂高芥 字は剛... 郡小字は光蔵別號は景山藤堂侯の族にして邑七千石を...

トウダウ タカハラ 藤堂高治 近江の人... 高治の父は高治の父は高治の父は高治の父は高治の父は...

トウダウ タカカネ 藤堂高兼 近江の人... 高兼の父は高兼の父は高兼の父は高兼の父は高兼の父は...

トウダウ タカノリ 藤堂高刑 本姓は... 高刑の父は高刑の父は高刑の父は高刑の父は高刑の父は...

トウダウ タカモト 藤堂高基 藤堂侯... 高基の父は高基の父は高基の父は高基の父は高基の父は...

トウダウ タカヨシ 藤堂高吉 宮内少... 高吉の父は高吉の父は高吉の父は高吉の父は高吉の父は...

トウタウ マサタカ 藤堂正高 内匠助
トウタウ ミツノブ 藤堂光誠 天溪と
トウタウ ミツヒロ 藤堂光寛 字は寛亮

トウタウ ヨシカツ 藤堂良勝 新七郎
トウタウ コシ 東澤居士 書家なり佛像及
トウ タネユキ 東胤行 歌人重胤の子

トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子

トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子

トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子

トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子
トウ ユキ 東胤行 歌人重胤の子

トウテ

トウテ

トウト

丹今の急務なりと著述および校訂する所の書凡そ三十餘部性温厚旨明断人に對する禮讓甚だ謹む安政四年七月十三日病を以て歿す年八十(東條傳)

に山を登るに自ら巨石を谷に擲じて踏をして平らかならしめ五十石を立て、毎丁の境界と爲す登る者之を利

東洋生れて器用あり平安に出て書を好む海峽に學ぶ極

トウハ

トウフ

トウモ

トウバ 東坡 唐人なり雪舟に學びて水墨の畫を善くし能く十牛の圖を畫けり(鑒定便覽、木朝畫史、扶桑畫人傳)

山城の漢學者なり曉曉に住す(諸家著述目錄)トウフクモンキ 東福門院「ミナモトカズコ」

諸利に歷任し五たび建長寺に據る凡海峽を接引する、三十年なり(龍門夜話)トウモウ 東蒙「タテマツトウモウ」

トウキョー

トウキョー 等譽「ゲツシウ」 東慶隆 盛敷の子にして...

トウリ

トウリ 天明の頃より此の書風村に行はれて...

トウキ

トウキ 里に住す傳へ云ふ狂僧なりと(俳林小傳)...

トウキ

トウキ 門督「チハラサホ」 洞院左衛門...

トカシ

トカシ トカシ「マサチカ」 富樫政親 富樫安高の...

トカノ

トカノ トカノ「サトヤス」 戸川達安 宇喜多秀家...

撃して首級百級を獲るは備兵隊と戦ふの始めとす他日... 達安兵を分ちて抄掠せしむ隙隙を狙ひ金鼓を鳴らし...

るに達びて達安福島正則池田輝政等と西上し頼る軍功... 福島正則は福島氏に属して石田三成と關原に戦ひ...

備前に往き喜田興家に頼る既にして入道夫妻死す終... 備前に往き喜田興家に頼る既にして入道夫妻死す終...

トカハ

トカハ

トカハ

し制髮入道して友林と號し兒島常山に幽居し文筆茶事... 聯歌を以て友となし邑二萬五千石を食ひ兵二千を領し...

を諸藩に賦す熊本多平をして其の役を督しむ各藩争... ひて先づ工に就く熊本石材未だ達せず侯將に罪を獲...

勝なりと云ふ夫より陸軍士官学校に入り卒業後果進し... 歩兵第四聯隊附として出征中三十七年八月二十六日吉...

トカハトカハ

トキトキ

トキ

大日本人名辭書

トカハ ヤスキヨ 戸川安清 字は興、蓬... 庵と號す初雄三郎後ち播磨守と稱す筑前守安の庶長子...

トキ カネイ 土岐霞亭 京都の儒者なり... 名は欲尹、字は聖耕、元信と稱し又白休と號す書を以て...

トキ サダサ 土岐定政 美濃の人なり... 父を定明と曰ふ(遠史に或は定朝に作る)兵部大輔と...

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナホ 時直 備中古刀の鍛工なり武は云ふ
トキナホウチ 土岐直氏 頼朝の子、頼朝の弟なり伊豫守宮内少輔と爲る足利義隆の吉野を犯すや直氏兄頼朝と之に従ふ直氏細川清氏と別れ將として龍泉城を攻む將城陥るを以て敢て進らず相持するに數月直氏部下戸藏尚守を以て吾れ龍泉を望むに上り鳥鷹多し是必ず龍泉城なりと乃急に橋を架けて進せ赴く細川清氏赤松義實相繼ぎ至り直氏と橋を破て入る守兵果して既に通れて僅に龍泉百人許りを留む暇はなして潰散す乃ち城を火て還る後髮を削て信慶と號す(大日本史)

トキナトキナ

トキナトキナ

トキナトキナ

トキナ

トキナトキナ

トキナトキナ

トキハートキマ

天曆中權博士に任ぜられ尾張権介を兼ね(皇國名醫傳)
トキハラ タダノブ 時原忠信 醫者なり

トキハノ ツボネ 常磐井局(一世)ツボネ
トキハノ ツボネ 常磐井局(二世)ツボネ
トキハノ ツボネ 常磐井局(三世)ツボネ

トキミートキヤ

トキミツ 時光 備前長船の刀匠にして應永年
トキミツ 時光 備前長船の刀匠にして延徳明

トキモト 時基 古刀の鍛工にして備前長船に
トキモト 時基 古刀の鍛工にして備前長船に

トキヤートキユ

トキヤ マキウヂウ 時山鑛造 陸軍
トキヤ マキウヂウ 時山鑛造 陸軍

トキユキ 時行 宗氏播磨の刀匠にして元應年
トキユキ 時行 宗氏播磨の刀匠にして元應年

考、本朝統治考

トキ ヨリアキ 土岐頼明 頼明の子、頼
トキ ヨリアキ 土岐頼明 頼明の子、頼

トキ ヨリカネ 土岐頼兼 十郎と稱す美
トキ ヨリカネ 土岐頼兼 十郎と稱す美

トキ ヨリトシ

トキ ヨリトシ 土岐頼稔 土岐頼隆の子
トキ ヨリトシ 土岐頼稔 土岐頼隆の子

トキ ヨリタメ 土岐頼爲 初字は二郎、
トキ ヨリタメ 土岐頼爲 初字は二郎、

トキ ヨリトホ

トキ ヨリトホ 土岐頼遠 其の先は源頼
トキ ヨリトホ 土岐頼遠 其の先は源頼

トキ ヨリトホ 土岐頼遠 其の先は源頼
トキ ヨリトホ 土岐頼遠 其の先は源頼

トキニ

トキニ

トキニ

トキヨ

折り幅を断ちて具に侵辱を極む直義之を開き大に怒りて曰く必ず此曹を捕刑に處して將來を懲らしめんと

トキヨ

頼真の子、頼遠の兄なり、頼直と爲り左衛門尉に任ぜらるる父に俱に足利尊氏に從ひ東寺に據り兵に將して出

トキヨ

頼遠の兄頼清の子なり、土岐氏に世々桔梗花を以て呼ばるる門族強盛毎れに軍軍すれば結ひて一隊と爲り呼

トキヨ

頼遠の兄頼清の子なり、土岐氏に世々桔梗花を以て呼ばるる門族強盛毎れに軍軍すれば結ひて一隊と爲り呼

トキヨ

都を復す足利義隆東近江に走る頼康美濃尾張等の兵を率て之に會す軍勢大に振ふ遂に義隆に從ひて京都に入

トキヨ

頼康の弟なり、大將軍義隆に命じて長兄頼直の後と爲る美濃池田郡に居る因て池田と稱す刑部少輔美濃守と爲

トキヨ

頼康の弟なり、大將軍義隆に命じて長兄頼直の後と爲る美濃池田郡に居る因て池田と稱す刑部少輔美濃守と爲

トキヨ

男なり美濃の人、和字は二郎、左京大夫美濃守と稱す初め西村勘九郎と謀り兄頼純を逐ひて美濃軍手城に居る

トキヨ

男なり美濃の人、和字は二郎、左京大夫美濃守と稱す初め西村勘九郎と謀り兄頼純を逐ひて美濃軍手城に居る

トキヨ

男なり美濃の人、和字は二郎、左京大夫美濃守と稱す初め西村勘九郎と謀り兄頼純を逐ひて美濃軍手城に居る

トキヨ

秀之を開き入か遣はして和解す佐々木定頼、朝倉義景等亦た來りて交和せしむ秀龍は危懼し太田村山の邸に歸り尋て秀龍入道して道三と號し猶ほ國柄を執り

トキヨ

國史實錄に云ふ天文十七年八月頼義の子頼充と京都に入り將軍義隆に謁して開居す頼充家を繼ぎ道三

トキヨ

國史實錄に云ふ天文十七年八月頼義の子頼充と京都に入り將軍義隆に謁して開居す頼充家を繼ぎ道三

トキヨ

水人物花卉鳥獸を巧みに又た和歌を能くす其の書讀俱に世に傳はるる子某未だ其の名を詳にせず字は太郎

トキヨ

水人物花卉鳥獸を巧みに又た和歌を能くす其の書讀俱に世に傳はるる子某未だ其の名を詳にせず字は太郎

トキヨ

水人物花卉鳥獸を巧みに又た和歌を能くす其の書讀俱に世に傳はるる子某未だ其の名を詳にせず字は太郎

トキヨ

佐なり宮城縣原郡高清水町の入幼年學校を経て士官學校に入り明治二十七年兼平歩兵少尉に任ぜられ

トキヨ

佐なり宮城縣原郡高清水町の入幼年學校を経て士官學校に入り明治二十七年兼平歩兵少尉に任ぜられ

トキヨ

佐なり宮城縣原郡高清水町の入幼年學校を経て士官學校に入り明治二十七年兼平歩兵少尉に任ぜられ

父子上野の舊色を保つこと能はず... 藤澤山字賀神祇記に云く左京助有親阿彌と稱す... 獨阿彌松壽丸と稱す親氏の子奉親亦朝野し後髪を蓄へ...

今の名に改む文政十一年二月正二位に叙し權大納言に任ぜられ天保八年右大將を兼ね嘉永六年十一月職を罷り退き...

請ふ京畿畿然たり家定命を紀伊以下の列藩に下して之に備へしむ月管經紀伊海を経て去る十二月西四の使布栞延航して浦賀に抵り通商を請ふ家定前井政憲川...

トクカ

トクカ

トクカ

京都は固より之を除き以て宸慮を安んずんと欲す... 皇に奏す天皇尙忠及び前の關白鷹司政通に由り之を天皇に光成聰長を以て傳へしむ...

神奈川に入り米喰又た小柴に入る永井尚志井上清直堀利經岩瀬源等命を奉じ往きて之を按ず...

字を長福丸と稱す享保元年八月四日居を第二部に徙す九年十一月十五日立て世子となる十年四月九日元服を加ふ...

トクカ

トクカ

トクカ

書辭名人本日大

字を定む二年正月三日... 伊直孝加冠す保科正之理髮す内大臣藤原光平勅を奉じ...

トクガハ イヘナリ 徳川家光 徳川十代... 伊は八代將軍吉宗の四男にして始て第一一橋に賜ふ...

トクガハ イヘミツ 徳川家光 徳川三... 代の將軍なり秀忠の二子、母は贈従一位崇徳夫人慶...

トクカ

トクカ

トクカ

書辭名人本日大

定信は聰明を以て信明は忠直を以て並に家齊を輔翼し... 倉原充實民庶股肱徳川氏の盛衰此に至りて極れり...

トクガハ イヘナリ 徳川家治 徳川十... 代の將軍なり家重の第一子にして母は贈従一位至心院...

トクガハ イヘミツ 徳川家光 徳川三... 代の將軍なり秀忠の二子、母は贈従一位崇徳夫人慶...

トクカ

トクカ

トクカ

トクカ

トクカ

トクカ

せす家光に至ては即ち強敵より已に運に暫り天下を輔けて統御の任に居れば自ら祖考と異なるものあり...

圖成る之を日光山の寶庫に納む頃にして侍臣中根正盛請ひて曰く聖州は神龍起の國にして未だ神廟あら...

には小堀政一等に就て茶禮を受け又書を狩野探幽に學ぶ其の蘊く所筆力盛強探幽も及ぼざる所あり...

トクカ

トクカ

トクカ

外に置くと願くは將家京都を奉戴して公武の一和を表し以て物議を鎮壓せんことを因て其の臣永井兼隆が...

慶勝を以て之が總督となし日を刻して發せしむ而して家茂將に大舉親ら之に繼がんとす毛利氏之を開き...

りて幼字を竹千代と命ず是の時に方りて廣忠安河守を以て治を岡崎城になす...

養卒百餘人之從ひて往く今川義元家康を宮崎に置き... 三月夫人山口氏信康を生む是の時方りて義元西上の...

トクカ

トクカ

トクカ

れ當に兵を分て之を授くべし家康曰く某小國を領して... 其の織田氏に屬する者は放て來り降らず家康乃ち兵...

んと家康遂に之に従ふ十一月信長其將佐久間信盛平手... 三形原に陣し火を濱松城外に縱つ家康之を怒り出...

せず而して今川氏の和親乃ち破れ今川氏と各處に對抗... 三月夫人山口氏信康を生む是の時方りて義元西上の...

トクカ

トクカ

トクカ

れ當に兵を分て之を授くべし家康曰く某小國を領して... 其の織田氏に屬する者は放て來り降らず家康乃ち兵...

んと家康遂に之に従ふ十一月信長其將佐久間信盛平手... 三形原に陣し火を濱松城外に縱つ家康之を怒り出...

と時方に昏なり或ひと門を闕せんことを請ふ家康曰く... 州の主將を以て遂に是に至る豈に天に非らずやと甲斐...

長可、堀秀政、瀧川一益、稻葉通朝、蒲生氏郷等皆秀吉... 獨り小牧の事を記せざるかと諸將相顧みて腹懐す秀吉...

獨り小牧の事を記せざるかと諸將相顧みて腹懐す秀吉... 然るに内に入る諸將交々家康に謂て曰く曰く聞く所...

トクカ

トクカ

トクカ

終に大に之を破り秀政を走らす秀政自ら回撃す是時に... 當りて家康信雄を携へて勝川に至り途に捷開を得て長...

て曰く義如何と問ふのみ勝敗の数に至りては則ち願公... 自ら之を計らんと乃ち三氏を遣歸す秀吉復た土方雄久...

て曰く某此れに在り殿下未だ此の言を出す可らず殿下... 獨り小牧の事を記せざるかと諸將相顧みて腹懐す秀吉...

トクカ

トクカ

トクカ

の婿なり諸老奉行人をして三家私婚し秀吉の遺令に背くを謀む三家分疏服せず諸老奉行遂に連署して來り諸...

トクカ

トクカ

トクカ

日家康北に還る三成等悔恨して又た家康を伏見の第に...

康之を兩用し乃ち兵を徴す兵來るもの三千八百九日...

なし當に其勢を衰へて之を遂すべしと諸將相目し...

トクカ

トクカ

トクカ

な色村に股け殺せ遺し株額を涉り中村一榮の陣...

大捷後三四日にして悉く亂人を驅逐し十九日家康草津...

る者に類す上棟牌も亦式の如くならず... 妾を以て皆な會する居ること三日諸將を召して大阪の...

トクカ

トクカ

トクカ

復た意に介する。英く城内の客兵皆な釋して問はずと... 因て三事を約して、白く周池を填む曰く大和に徒る曰く...

に忘るゝ能はず荷も母子皆な出てんか秀頼を高野に置... 遊君に給するに萬石を以てせん治長入て告ぐ答て曰く...

五萬兵勢前日に什倍すと家康笑て曰く多々益々敗るべ... し必ずしも之を禁ぜずと終に令を諸侯に下す皆な前役...

トクカ

トクカ

トクカ

し本多康俊本多康紀藤藤井桐石川藤田等と其の右に在... り本多正信土井利勝酒井忠世本多國勝田長政加藤藤...

に忘るゝ能はず荷も母子皆な出てんか秀頼を高野に置... 遊君に給するに萬石を以てせん治長入て告ぐ答て曰く...

は、則ち侯伯其の器に當る者代りて天下の柄を執るべし天下は一人の天下に非ず吾何をか恨みんやと乃ち遺物を分賜し...

浚ひて之を府庫に盈て目して能臣と曰ふ是君の爲に怨を蓄ふるのみ且つ才能を恃む者必ず舊法を以て迂拙と爲し...

なり八年十二月今の名に改む時に年甫て四歳九年二月從二位に叙し權大納言に任ぜらるる享和十三年右近衛大將を兼ね...

トクカ

トクカ

トクカ

んとすと尋て四體皆な去る是に是て家慶教を下して殿を解き成を罷め臨安宅をして入朝夷夷の事を奏せしむ...

城を陥れ進みて東邊を衝へて悉く之を平ぐ又だ尾州を侵略し科野を取りて之を功臣信定に與ふ天文二年清康廣瀨城主...

トクガハ キレイ 徳川義禮 舊名古屋藩主なりもと高松藩主松平頼職の次男なり明治九年五月...

トクカ

トクカ

トクカ

月十二日元服し從四位下に叙し右馬頭に任ぜらるる館林殿と云ふ十月七日正三位に陞り右近衛權中將に任ぜらるる寛文元年十二月廿八日參議に任ぜらるる延寶八年五月家綱疾む因て列相參政と稱す家綱區々決する能はず遂に策を決し細吉を迎へて世嗣となす其の從二位に叙し權大納言に任ぜらるる八月廿三日征夷大將軍に拜し内大臣に任ぜらるる右近衛大將右馬寮御監兼正二位に叙し淳和學府院の別當源氏長者となり牛車を禮し隨身兵仗を賜はる天和元年二月十一日細吉親ら越後の歐賊を斷じ奮斷其の當を得元祿二十四年三月二十二日柳澤保明の邸に臨み物を賜ふ其の家人に及ぶ後數々其の邸に臨み其の者一年に七回廻遊日に渾し八年三月朔細吉親ら周易を讀み毎月數次諸侯群臣をも講見を得る者甚だ多し之を聽く五歳にして乃ち擧り頭年に經書を讀す數次寺僧社人に至るまで請ふ所に因て之を聽く許す八年九月細吉奏して大小判、鉞、鈔、銀、改鑄す其の元字を以て其の輕重分量皆な廢長の舊制の如し但小判重き四錢八分世之を元字金銀と曰ふ十一月十一日養狗の制を立て又た殺生を禁ず民庶養狗の制を犯し刑を請ふ者一歲に十人に止まらず且つ刑は其の身に止まらず亦た數ども得ず養狗と云ふ者あり人々の屬の乏しき多く是れ過去殺生の致す所故に能く生か愛せば則ち嗣得べし將軍の誕誕偶々成に次す宜く狗を愛すべしと綱吉之を然りとす故に是の事あり綱吉又馬を愛す馬の鬣毛を燒き及び死馬を野外に棄るを禁ず犯す者は罪死に抵る民大に疾苦す綱吉甚だ申樂を好み申樂の人は卑賤より侍御となる者百餘人洋々たる其の聲中市に盈溢し家人の子弟も競ひて習學し以て仕進を求む九年六月始て二餘金を鑄る額に桐葉を作る寶永二年三月五日右大臣に遷る三年六月綱吉奏して元字銀を改鑄し文寶の字を省用して古銀貨に區別す所謂寶字銀是れなり初め綱吉柳澤保明を登庸し連年國政を專任し之を甲斐に封じ秩を増し位階を加へ予ふるに族稱及諱字を以てして松平吉保と改めしむ綱吉之を寵す數々其の邸に臨み遊戯戲笑す故に吉保權中外を傾く數々其の妻子を召見し

トクカ

トクカ

トクカ

て金器器玩を賜ひ族及び諱字を其の子に賜ふ吉保無間侍し其の其の子が胤にあらざるを稱す綱吉亦た敢て詰らざる因て視るここの如く時人曰く公の吉保を寵するは北郭を築かむと誓し度のある者なり綱吉願司に命じて其郭を築かむと誓し度のある者なり吉保願不軌の心あり深く詰る己と心を同する者なり交り親屬婚嫁列侯にあらざる者は秩を増し引て羽翼となす陰謀已に迫る是冬綱吉麻痺を病み六年正月九日疾癒二十日薨かに正統に薨す年六十二日八日寬永寺に葬る初月十六日少とき桂昌院本莊氏正一位大將大臣に陞る綱吉公に給する公語りて云く予國家を治めんといふ風夜心を勞せし惟學なきを恨み予子孫あらば將に必ず書を讀ましめんとす君之思へんと故に綱吉教を受け統承承に及ぶ益々勤む綱吉初め藩邸にあり出でて路に當る會々一夫肩に杖を荷ひて自ら路を横きり頼み綱吉に還り命を下して曰く余の齒落たるを識らば之を疾苦せむ可からず設令之を犯すとも雖も鄙夫の如き者に當るざるを綱吉學を好み近侍をして書を讀ましめしめ居居必す經書を讀み若しくは經義を座前に講べしむ或は朝親に教授するを樂となす是に於て摺紳大夫皆争ひて學を請ひ諸侯博士を召す群下有も田談代に卓起す綱吉華を喜び予施を好み日に群下に賜ふ寡からず之を久くして内膳既乏す有司之を憂ふ老中或は之を諷む綱吉曰く予統を承て他に樂みなし唯々群臣に賜ふは善が樂なり而して其の言を進むる者甚だ多記を好む僧道風氣に應じて遠近絶ゆるなし又修造を好し佛舎を造り神廟を修めて遠近絶ゆるなし又修造を好み數々土木を興し諸侯をして工役に供せしめ動もすれば數萬金を費す又鬼神を好み最も神祇を畏懼し廟堂に事ある毎に居處自ら安んずる能はずして使の報を待つ報書至り禮成り故なしと言へば則ち喜びて憂を解く如し風雨若しくは他故ありて禮を爲す克はずと聞けば則ち懼る又た遊宴を好み數々僧院及び群侯家人の家に應む又た年少を受す侍御面觀を以て進む者數十人或は侯

擊し大に之を破る是に於て威名益々響ひ西參の諸城主皆な來りて款を送る(或は云く親忠信光の讓を受け安詳に居て安祥三郎と稱す)六年七月髮を削りて四忠と號し九年八月十日卒す時に年六十三法名は大龍西忠、松安院と號す男子九人あり曰く親長(又た長則と名く)と(兼元、長親、親房、超譽、親光、長家、長忠、兼清と名く)親忠人と爲り懐況にして其の臨みて治をなすや賦欲を省き孤寡を恤れみ賞罰を明にし法制を修む是を以て國人皆な争て用をなすを樂むと云ふ
トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 水戸第四世の藩主なり頼重の二男中納言に任す
トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 甲府侯の祖なり家光の第三子母は順性院藤枝氏正保元年五月生る小字は長松慶安四年四月美濃近江信濃河内斐上野等の田十五萬石を以て封邑となす承應二年八月元服す將軍家綱諱字を賜ひ從四位下に叙し左馬頭に任す十月正三位に陞り左近衛權中將に任す寛文元年閏八月封甲斐の田十萬石を加へ甲府に治す十二月參議に陞り中將故の如し初め酒食に耽り酔に乘じて近侍を斬る等の事あり後人の諷を用ひて文武に志す四代將軍家綱子なし幕議或は綱重を迎へんと云ふものあり大老酒井忠清權を專にし之を斥く後豐登を甲府に建てんと欲し金十萬兩を幕府に借らんといふ將軍家綱の説を聞て又之を許さず延寶六年九月十四日薨す或は云く自殺と年卅五法名圓安永安永知、清揚院と號す權中納言を贈る寶永六年大政大臣正一位征夷大將軍を贈る綱重再自藤原永平の女を娶る是を隆崇夫人となす重く綱吉また自藤原中納言源後景の女を娶る是を紅玉夫人となす並に綱吉し諸姫長昌院田中氏綱吉清武を生む綱吉嗣立し權中納言正三位に累遷す寶永元年十二月入りて將軍綱吉の嗣となり後正統を嗣ぐ之れを家宣となす次は則ち清武(野史)
トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重
トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重
トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重 トクガハ ツナシゲ 徳川綱重

心術狂亂し自から士臣を刺殺す九年十一月忠長を刺し之を上野高崎に置き城主安藤重長に附す十一月六日終に自殺す年二十七高崎大信寺に葬ら法名晴徹雲峯嚴院と號す(野史)
トクガハ チカウヂ 徳川親氏 有親の子なり小字は二郎三郎一に世良田を氏とす初め父と俱に藤澤寺に入り遊行僧の徒弟となりて徳阿彌と號す其の俱に諸國を巡歴するや論議窮出でて雲州に至り髪を蓄へて坂井邑に寓居す其の郡人皆な親氏の凡人に非ざるを識りて敬重せざるはなし而して郡吏五郎左衛門は豪富にして女あり男なし因りて嘉吉五年冬親氏を迎へて女婿となす一子を擧げて後其の婦卒す親氏更に居を松平邑に徙す邑長松平信重と云ふ者亦た嗣なし親氏の常人に非らざるを見て鍾愛して措かず女を以て之に妻はし命じて其の職を繼がしむはれ實に承永元年の事なり是を松平氏の始めとなす親氏資性慈仁の心篤く且つ備に難難を嘗むるを以て頗る緩急の機を知り或は瀧邊を剪り或は道路を修むる等務めて衆望に從ひしな以て岩津、竹谷、形原、大給、御油、深溝、野見、岡崎等皆な歸附して名聲大に張る親氏自ら太左衛門と稱し并郷を以て其の子廣親に譲り應仁元年二月二十日卒す(或は承永二年四月二十日又應永元年又承永九年等に作る)時に年四十三法名を俊山徳翁と曰ひ芳樹院と號す二子あり廣親泰親と曰ふ(藤澤山宇神懸起に云く有親親氏泰親父子三人遊行上人に從ひて髮を削る而して有親止りて藤澤に居り二人上人に從ひて遊歴し大和波向雲寺に止まる應永三年稱名寺に居りて聯歡會に列するや松平太郎左衛門及び酒井雅樂助も亦來會し長阿彌及び松壽の凡人に非らざるを以て上人に請ひて養子となし長阿彌を還俗せしめて雅樂助と稱し親氏と名けて酒井家の嗣となし松壽丸を太郎左衛門の養子となし亦た太郎左衛門と稱し泰親と名くと○續阿彌に云く長阿彌を示すの德阿彌州坂井村に入り土塵擧げて以て郷に居る親氏の武略近境に聞ゆるを以て土塵擧げて以て主となす○其氏記典に云く有親親氏の徳川邑に潛匿するや敵あり問を伺ふ生田軍人と云ふもの來りて之れを告げ贈るに承樂錢一貫文を以てす父子之れを收めて微服潛行し美濃山中に奔りて林元正の家を寄寓し後

トクカ

トクカ

トクカ

ち上野視戸村に居り賊の爲めに追はれて僧となり有親長阿彌と稱し親氏徳阿彌と稱す後ち大濱に寓して有親に殺し親氏坂井郷に徙る郷中に永源庵と呼べるものありて智忍忠通等數人を此に備す親氏頗る厭に妙なり衆其の風致に感じ相勸めて還俗せしむ松平の郡主實茂信重太郎左衛門と稱する者も聞き迎へ入れて女婿となし其産を擧げて悉く讓與す是に於て徳阿彌髪を蓄へて亦た太郎左衛門と稱し親氏と名くと○土屋忠兵衛覺書に云く承永元年親氏の松平郷に入るや在原信重と云ふもの長女を以て之れに配し婿となす○御系圖略に云く在原信重と云ふもの親氏に妻すに女を以てし族を改めて松平氏と號す○三松傳に云く親氏父有親の時宗の參州坂井郷に到り還俗して子廣親を産み後松平郷に遷り郷主在原信重の女婿となる○一二水可記に云く政義親氏、有親皆民間に潛居す親氏生れながら聰敏にして才あり其の名著る足利氏の嫌疑を憚りて遊行僧の徒弟となり徳阿彌と號す○土屋忠兵衛覺書に又云く親氏新田福壽寺に入りて喝食をなし寺僧に從ひて修し親氏參州坂井に抵りて始めて髮を削り徳阿彌と號し傘工となす(野史)
トクガハ チカウヂ 徳川親氏 政義の長子なり初字は太郎修理亮と稱す一に世良田を氏とす應永年間足利持氏執事上杉輝秀と隙あり輝秀遂に亂を作し持氏を逐ふ親氏亦た族を將ひ往きて之れに應ず將軍持命を東國に下して師を發し持氏を援けて輝秀を伐つ輝秀潰れて誅せらるる其の黨を收む親氏子有親親氏速捕甚だ急なり依りて共に携へて難を逃り藤澤清光寺に投じて擡り僧となり相訣れて逃る正長二年十月二十日卒す法名は用金、亭仙院と稱す親氏初て徳川氏に復す子あり有親と曰ふ(野史)
トクガハ チカウヂ 徳川親忠 信光の子なり小字は竹千代、二郎三郎と稱す一に世良田を氏とす左左亮又た修理亮に任ぜられ岩津に治す明應二年十月寺部の城主鈴木日向守、伊保の城主三宅加賀守、母の城主中條出雲守、八草の城主那須宗右衛門、上野の城主岡部孫二郎等相謀り兵三千を合して將に岩津を攻めんとすと聞き親忠自ら兵一千を率て之を伊田に要

位に至る者あり苟も姿貌ある者は種族を問はず職を召し入れて愛用す山城加茂の嗣は王城の大社なり毎歲四年兩次に之を祭る天皇使を遣して奉幣享獻し其禮甚だ大なり朝廷衰微してより大祭廢れて三百餘年猶吉命じて之を復す博士視司其の禮を考へ元祿十七年始て事を行ふ又た王城の西に寺あり大進寺と號し六孫王經基を祀る祀廢るま久し元祿中住持南谷柳澤吉保に因て上書以問す乃ち命じて新に其の廟を修め其の區域を廣くし之が祭田を置きて近侍を撰び御膳衆と稱する者あり且夕左右に侍り故事を談し徳を饒ふ其の説く所は他なし和漢聖賢の語なり公子あり信長と曰ふ天和三閏五月天子女は權中納言綱吉に適す(野史)
トクガハ ナガチカ 徳川長親 親忠の子なり親忠九男を生む長親は其の三男越えて嗣となり安祥に居り職人と稱す出雲守に除せられ四邊河を守護なり永正三年氏親其の將北條長時と大兵を率て來り攻む八月岩津を攻む長親五百騎に將として赴き敵を其の驛に謂て曰く衆寡敵せざるを如何せんか衆前みて死を決せんといふ長親曰く汝等世々我家に死す面して我れ未だ厚く報ふ能はず今亦た我が爲めに死を決す吾を深く愧づる所なりと因て大桶を以て酒を貯へ杯數十を注ぐ自から一杯を飲み餘酒を桶中に遺きて曰く事急なり各人に賜するに暇あらざるや就て之を飲めと衆感奮夜矢矧河を渡り駿河の軍を襲ふ宇都宮忠茂曰く我必ず捷ふんと果して之に捷ち軍を西岸に收む氏親長氏親れ走り戸田憲光田原を以て降る長親忠茂に問ひて曰く何を以て捷を知る曰く長氏龍を負ひて土を侮る士に闘志なし是を以て之を知る長親五男を生む曰く信忠、親盛、信定、利長、義春、長親老ゆ信忠嗣ぐ(大日本史)
トクガハ ナリナキ 徳川齊昭 字は子信景山又た譜圖と號す幼にして敬三郎と稱し後紀教と名づく後更に齊昭と改む寛政十二年三月十二日江戸藥川に生る治紀(所謂武公)の第三子外山氏の庶出なり年四歳舉止成人の如し治紀に謂ひて曰く見乳母の侍養を須ひず士人を以て之に代へんと乃ち近臣二人を以て之に傳らしむ是の歳始めて孝經を讀む明年始めて和歌を作る九歳の時鳥銃刀槍の術を學ぶ幾くもなくし

其遺典を得たり長ずるに及びて日に鳥銃千發を以て... 課業とす近臣と歩を競ふ公一日に二十餘里を歩し...

トクカ

トクカ

トクカ

習す弘化元年幕府其の類に兵備を修むるを見て異思あ... らんを疑ひ職を罷めて駒込の邸に幽せしむ時に年四十...

非ず慶喜は則ち徳政家茂に越え且つ年齢に當り當に以... 爾とすべしと慶喜慶永等傍より之を贊す直爾猶抗...

藩士有村治左衛門等と謀り同志十八人老若井直朝を... 櫻田門外に要し雪に乘じて不意に其の典を襲ふ衛士...

トクカ

トクカ

トクカ

り何ぞ異志のあるあらんや唯は唯は唯は唯は唯は唯は... のみ之に反して井伊中將は唯は唯は唯は唯は唯は唯は...

又嘗て蝦夷の海防を慮り書を幕府に獻じて曰く蝦夷の... 地北は魯西に接し西は濠洲に隣す我國北門の鎖鑰...

トクカ

の時に當り群雄出でて各一方に割據して互に相呑み相奪ひて殆んど寧ろなれし信光亦た時勢に乗じて疆土を...

トクガハ

長子にして秀忠の兄なり小字は竹千代永祿二年三月駿府に生る母は清池夫人今川氏後今川氏直家康の織田氏に...

トクカ

盛を享す信盛曰く此の比寒疾あり願くは頭巾を御免あれと信盛取を更て之を見る禮畢て信盛復病と稱し頭巾...

トクガハ

城主なり本名は頼初め支族頼昌の養子なり西條の城主となり從四位下に叙し左近衛權少將に任じ修理大夫...

トクカ

名清齋則建、香殿院と號す貞治慈仁衆を愛して節儉なりトクガハハルズミ 徳川治濟「ヒトツ

トクガハ

府に積蓄する所の寶貨を頃々弟頼直頼宣頼房に授け又た金銀を久能の寶庫に納む三月四月秀忠日光に詣り...

トクカ

して見ず秀忠派を拂て出づ康政以下八人の秀忠に從ふ者謂を請へども聽かれず皆其畏懼して退く本多正純家康に...

トクカ

斥函を開き市原となし京都大阪堺浦の豪戸を徒して之に充つ十九年二月四日慧星東方に出づ朝野驚愕以て不祥となす秀忠夷然として侍臣に謂て曰く客星天にあら...

トクカ

府に積蓄する所の寶貨を頃々弟頼直頼宣頼房に授け又た金銀を久能の寶庫に納む三月四月秀忠日光に詣り...

津氏を伐つ秀康羽秀勝と師に従ひ日向を向ふ蒲生氏... 津氏を伐つ秀康羽秀勝と師に従ひ日向を向ふ蒲生氏...

トクカ

トクカ

トクカ

徳川政親 政親の第二子なり小字は基徳丸、後藏人と稱す一に世貞田を...

徳川光圀 水戸の城主なり頼房の第三子、寛永五年六月十日を以て水戸...

守信孝に告げ潜かに廣忠を迎へて岡崎に入らしむ五月... 守信孝に告げ潜かに廣忠を迎へて岡崎に入らしむ五月...

トクカ

トクカ

トクカ

徳川政親 政親の第二子なり小字は基徳丸、後藏人と稱す一に世貞田を...

徳川光圀 水戸の城主なり頼房の第三子、寛永五年六月十日を以て水戸...

からざるを以て修史の志あり明曆三年始めて大日本史を撰び影考館を置きて俊才の士を招き編輯討其の體裁筆削の如き必ず親ら史臣と反覆商議し神功皇后を后妃に列し大友皇子を本紀に掲げ正朔を南朝に據けて神器の京都に入るに及び始めて後小松天皇に歸するが如き皆其の卓見なり然れども朝廷を懼りて敢て名を命せず之を視て史稿となす子孫能く其の志を繼ぎて校訂補遺意を承ず玄孫治武に至り關白鷹司朝成に依りて大日本史の名を公にせんことを請ふ朝議を允す是に於て鐫刻し上表して之を獻す光格天皇殊に數を傳へて之を褒す萬治二年六月光圀藩に於て明年六月府に遷す後寛文元年七月父頼房の病を報するや光圀晝夜兼て國に就く其の卒するに及び哀毀して三日食はず屏儀に禮制に遵ひ藩士の皆て靈貴を蒙り門を杜ち屏居するものいかに皆之を憐れむに及ぶ路傍に拜せしむ時に頼房の近臣山野邊義忠眞木景繁田代吉等之に殉せんと欲す光圀自ら其の家に向き開きて之を止む當時藩國の歌を承け其の殉死の多きを較して相誇るに至る幕府尋て天下に令して之を禁ず實に光圀之れが首唱なすこと云ふ是の月光圀府に遷じて封二十萬石を蒙り時年三十一なり其の前一日兄頼重及び諸弟を頼房神主の前に會し謂て曰く某弟を以て兄に越ゆ心に負くや久しし而して隱忍今に至る者は先君の世に在るを以てなり明日幕便の來るに至るを得て其の嗣となさん然らずんば則ち明日の事某敢て命を拜せざるべしと諸弟其の不測の事あらんを慮り頼重に勸めて之を諾せしむ九月光圀藩に封内田の頼田各二萬石を弟頼元頼隆に割與し其の餘諸弟頼順頼泰頼以房時等に又各三萬石を給す十一月所生谷氏卒す是歳光圀孝子に大憂に丁りて哀毀殊に甚だし而して忌辰毎に盛に法會を設けて能く母の志に従ふと云ふ三年七月藩に就き九月を以て藩士二十七人の職掌を定むし頼房卒して是に至り三年を經るを以て其の賢否を熟知し之を處するなり光圀既に特を修史に勵まし影考館を開き以て天下の俊才を招致す初め藤原齋の徒備を以て幕府に聘せらるゝに方り尙髪を削り頭を髡にし法印の官を受け以て風習と爲す光圀之非

トクカ

トクカ

トクカ

とし儒臣をして皆髪を蓄へしむ是より後復た儒臣を置かず其の史臣及び侍講の如き皆な士を以て之を兼ねしむ幕府嘗て新令を布く光圀之を讀みて儒者醫者樂者を許すと曰ふに至り議して曰く儒は管に書冊を扶むの稱に非ずして道を學ぶもの皆之を儒と謂ふ吾亦た儒なり今之を方伎の流と並稱す恐くは職を後世に貽さんと幕府乃ち其の議に従ひ改て醫陰二道と爲す蓋し儒者に命じ本朝通鑑を修めしむ既に成りて將に之を刊行せんとす時に光圀江戸に遷じて尾張紀伊の二侯と爲すに至り駭きて曰く此の説は異邦附會の妄に出で曾て我が正史に無き所なり然く按ずるに昔後醍醐帝の時當り一妖僧の此の説を唱ふるや詔して其の書を焚かししむ方今文明の世豈に斯の如き怪事をして世に存せしむべけんや宜しく命じて之を削るべしと二侯の左祖を得て遂に其の刊行を停む是の年十二月幕府刷方即ち松平代官を立てて世子と爲す許す光圀又頼重の次子綱條を請ひて之を養ふ是の時に方り支那明朝の遺臣朱舜水清の渠を食ふを耻ぢ日本國の授を乞ひて明室を恢復せんと欲し我が長崎に渡航す光圀其の賢を聞き聴し其の言を割つて之を納る舜水嘗て陳蓮之に與ふる書の畧に曰く上古公孫龍仁武聰明博雅從諫明辨古今皆有弟處其族之位不能有所辨

之を賀し其の後賀壽盛に世に行くと云ふ是の歳光圀五月雨の記を朝廷に獻す并に高梁の救諭を賜る光圀伯父信吉の所生秋山夫人の碑を下總平嘉本木主教寺に建て田園を置き香火を賣し其の墓を祭る元禄三年三月命じて疲癯殘疾貧困單衣及び八十以上の民を養はしむ光圀曰く民にして凍餒するあらば我何の用をか出だして民を賑濟す其難寡孤獨老廢にして告ぐる即ち者には歳々雑穀を給與す後世の制に遵ふ而して病馬を有し養ふと能はざるものは獨逸を給與す十月光圀致仕す時年六十三封土を世子綱條に讓る初め故將軍家綱の不豫に方り光圀尾侯紀侯と入りて之を綱吉を薦めて請ひて決し侯立ちて待選殊に厚し其の後將軍子綱條を立て頼と爲さんと欲し亦之を讓せしむ光圀乃ち讓りて曰く故の甲斐侯綱重當きに立つべくり然らば今宜しく侯の子綱重を立てて徳松を以て之が嗣と爲さば恩義並に行はれんとし將軍聽かず遂に徳松を立つ因て光圀將軍の旨に背ひ意相得ずして身を終ると云ふ十二月光圀國に歸る發するに臨み詩を留め綱條を戒む其詩曰く嗚呼汝欲致治國必依仁福始自開門慎勿亂五倫光圀既に歸り諸臣に諭して曰く吾れ弟を以て封土を觀さ久く惶懼たりしが今や國を少將に讓りて志願畢れり卿等能く吾に事ふる所の者な以て少將に事へば吾れ更に憂る所なし抑も君は舟にして臣は水なり水能く舟を浮べ又水能く舟を覆へす之を最めよ又藩士の子弟に對して死を處するの難きを陳べ道を學びて倫理を明にし以て實行を勵むと戒む四年五月光圀居を久慈郡太田郡の西山に卜し榛莽を開き巖谷に倚り垣牆を設け茅屋衝門僅に風日を蔽ひ日々懷み詩酒に耽り瀟然として自ら樂む而して侍臣數人を蓄へ婢妾は織に漚掃に給し粗食澆衣意甚だ安んじたり自ら西山隱士又た徳里先生と號す其の意皆泰伯伯夷の風を取る嘗て村民に其の養ふ所の鶴を殺す者あり獄已に決し一日光圀那珂の別館に至り自ら囚を斬らん

トクカ

トクカ

トクカ

とす而して忽ち殺めて曰く禽の爲に人を殺すは吾れ忍びずと乃ち監司を召し諭して曰く宜しく囚を解外に放つべし然れども彼れ若し朝口の資なくんば恐くは去りて後盜を爲さんと乃ち資を給與して之を放つと云ふ光圀幕府より金帛を賜はる毎に之を親族侍臣に分給し絶て贏餘なし又日常常數封内を巡行して孝節を賞し學問を奨め或は社寺の縁由を正し或は民に種藝を勸し毒藥を禁絶し造り石を建て親ら題して徳里先生墓と曰ひ銘を其の陰に書す時人これを稱して實録と謂ふ光圀又源頼朝父子の祠堂を郡の旌徳寺に建て下毛那須園造の碑を修す五月又た碑を海津の淡川に建て親ら題して嗚呼忠臣補子之墓と曰ひ朱舜水の贊を碑背に刻し田を買ひて之を廣敷寺の僧に屬し以て永く香火料に充つ光圀嘗て謂ふ道服と云ふものは王公燕居の服なり然るに今世用する所のものは直服に似して其を有栖川乃ち深衣を隱括して新に道服を製し以て之を有栖川孝仁親王及び攝司房輔に贈る而して親王其の制を以て善と爲し房輔書を給りて嘉慶八年朱舜水の碑を瑞龍山の麓に建て親ら題して明徹居士朱子墓と曰ひ碑を備へて之を祭る初め舜水を以て光圀其の祠堂を瑞龍山の別荘に造り初め舜水を以て祭又遺文三十卷を蒐めて門人源光圀題と曰ふ十年十月光圀命じて書巻久慈郡馬場村に講じ小民を以て撫所を知らしむ十三年夏光圀瘠を患ひて食減じ時を論て癯羸十月將に薨を加ふ是に於て綱條國に就て疾に侍し幕府使して疾を視せしめ尋て醫をして來り診せしむ光圀乃ち疾を力めて城に入り以て之を待ち婦人を屏斥して巾櫛に侍せしめ終に其歳十二月六日を以て西山に卒す時に年七十三瑞龍山梅里先生の碑後に葬り葬祭禮に遵ひ蓋して義公と曰ふ光圀天資英敏にして仁恕兼之御する早晩疎遠の者と雖ども腹心を推し辭色を假す故を以て人々其の用を爲すを樂む光圀天泉地理行兵の要より制度典故擊劍發銃算數鳥獸草木の微に至るまで盡く其の書を綜べ而して之を貫くに學術を以てす著す所の書常山文集二十卷、歌草五卷あり而して編く名山巨室の書を纂り史館を開き文士を招きて大成せる者大日本史と曰ひ禮儀類典と曰ふ其の餘浮文贅筆を去る病ひて保元平治盛衰太平記参考を作り神道の垂繆を恐れて集成を著し古賢の親筆なるが爲に萬葉集を解き英雄事跡の

だ之れを事に靡さずして遊せり光圀其の志を稍述し是に至りて吉田、靜の二祠を修造し其の他正祠の封内に在るもの亦命じて修造し一村毎に必ず一祠を奉じ以て民心を一に歸せしむ是の年十二月藩士七十以上の者及び致仕せる者府城に遷して金帛を賜ふ十年正月世子綱方卒す十一月六月綱條を請ひて世子となす光圀謂て曰く凡そ父子各々其の臣を臣とすれば黨を立つ黨を立てばはば父子相承を生ぜんと故に臣僚を分たず初め光圀二姪を養ふ是に至りて人其の志を堅くして盧の遠きに服す後延寶元年五月大成殿を水戸に造らんとし假に殿堂を江戸駒籠の別荘に設け藩士をして朱舜水に就きて釋奠及び祀堂祭の儀節を習はしむ又匠夫に命じて舜水の説を受けて關里の制に模倣し殿堂廊廡より門轎器什に至るまで悉くして之を刻し府庫に藏めて以て制作に志ある者をして法を取らしむ三年正月光圀後四院天皇の制に應じ雪朝遠望の詩を賦して之を上る六年正月和文三十卷を修す天皇乃ち名を扶桑拾葉集と賜ひ以て勅撰に準す天和二年八月朝鮮の聘使尹壯完等江戸に來りて將軍徳川綱吉の職を紹ぐを賀し物事を光圀に贈る而して其の儀及ぼざる所あり光圀乃ち中村頼言をして頌を掲げて之を詰責せしむ其の一に曰く贈る所の土宜唯々物數を錄して姓名を具せず三に曰く楮尾一印を押して三侯の贈る所となす三に曰く印文曰く尾字に似たり凡そ古人の交際は自ら名を稱して字を稱せず今是の如き者抑も是れ貴國の法かと三侯之に答ふる能はず既にして光圀書を載して三侯に寄せ白金三百兩を贈る而れども三侯敢て受けず書を復して禮か備へんことを陳じ列事を遣はし來りて前過を謝す然れども光圀更侯の例に非ざるを以て之を止む是に於て三侯初め天泉の遺物風足硯の銘を作り序文を并せて之を上る三年正月參議平時政詔を光圀に傳へて類例を折衷し舊記を考案し以て立坊立后の儀節を上らしむ二月復舊を光圀に賜ふ中に「傳文筆武親代名士」と云ふ語あり貞享元年正月光圀尙齒會の詩一卷を朝廷に獻す初め關東の風俗尙齒のことを知らず光圀嘗て中山風軒、人見下齋の七十餘を賀し壽詩及び几杖を賜ひ親ら其の盛に臨む其の他侯伯將士の壽域に請る者ある毎に詩歌を賦して

澤誠を慨して鎌倉志を撰み英華の萎靡を嘆じて詩文を纂め氏族の混淆を恐れて系譜を補ひ幕府の功臣を別ちて將士傳を作り又た花押歌、草履實珠、水府系業、常陸國志及び洪武葉分考と雖ども出る毎に歩行せざれば警備の事を忘れず老すとも出る毎に歩行せざれば必ず馬に騎して輿を用ひ又た毎歳元旦に際するや晨に起きて西向禁闕を拜し老年に至るも廢せず大風地震毎に必ず書光日光に馳せ使を寬水、増上之二寺に遣はし神廟の恙なきや如何を問はしむ光圀又た藥局を邸第に設け醫を置き以て病者ある毎に藥を給與す而して僻遠の地窮民の醫藥に乏きを憫れみて藩醫を民間に頒行せしむ光圀殿に府下の奢靡を禁じて最も民心民事に盡す既にして老を告げたるの後と雖ども時々封内を巡行して民の疾苦を問ひ寛宥を察す聽斷明審にして參互反覆を加へ務めて輕減に從ひ殊に死囚に至りては曲けて生路を求め有司に命じて曰く凡そ獄を斷するや響りては案既に決するも必ず復た之を告げよと光圀又た殖産工業に意を注ぎ漆箔を問職の地に植て紙織の利を廣く牧場を大能村の野に開きて馬を養ひ或は白小舎給を磯濱湖に放ちて其の増殖を謀り石を前海に取取り之を大津濱に移し以て昆布を生ぜしむ又下總の小金及ひ鎌倉の騾路原野池邊にして行人路を失し易きを以て登を殺して路を標すと云ふ其の計皆幕府に達するや幕府天下に令して七日間音曲を停止す天保三年五月詔して從二位權大納言を贈り明治二年十二月詔して光圀が兵革始めて息む文教未だ明ならざるに方りて尊王を唱へ名分を正し心を修史に盡して以て千古の慶典を興すを追賞し時に従一位を贈る卅三年十一月又追贈して正一位に陞叙す(野史、續愛國偉跡)

トクガハ、ミツサダ、徳川光貞 紀伊の國主なり小字は長福家康の孫頼宣の子寛永八年從五位上に叙し十年元服將軍家光諱字を賜ひ從四位下に叙し常陸介に任す十七年參議に任じ右近衛權中將を兼ね從三位に叙す承應二年權中納言を歷、尋て正三位に進む元禄三年權大納言に轉じ從二位に至り十一年四月老を告げ薨して對山と號す寶永二年八月八日薨す年八十一、法名源泉清溪院と號す光貞高を狩野探幽に

トクガハ ミツトモ 徳川光友 尾張の國主なり本の名は光義小字を五郎太と曰ふ家康の孫... トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初...

十月和歌山學校資金三萬圓寄附の賞として金盃一箇を賜はり十年特旨を以て從二位に進められ十七年七月侯爵を授けらる此年皇城炎上の時金三萬圓を義捐し...

を以て生る八年正月初て甲斐に封ぜらる尙幼なるを以て國に就かず平岩親吉をして假父となし甲斐に居て以て國事を執らしむ十一月東條松平家忠の嗣となす...

トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初... トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初...

トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初... トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初...

トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初... トクガハ ムネタケ 徳川宗武 田安殿と稱す家康の弟にして吉宗の第二子なり母は竹本氏初...

トクガハ

トクガハ ヨリフサ 徳川頼房 家康の十一子にして頼宣の同母弟なり母は養珠院隆山氏、慶長八年八月生る英勝院太田氏請て之を養ふ小字は鶴松

トクガハ

トクガハ ヨリフサ 徳川頼房 家康の十一子にして頼宣の同母弟なり母は養珠院隆山氏、慶長八年八月生る英勝院太田氏請て之を養ふ小字は鶴松

トクケ

母之を鎌倉の路傍に棄つ或ひと之を収めて福山の側に育ぶ爾長じて群衆と寺に入りて慶勝大僧となす此より

トクケ

母之を鎌倉の路傍に棄つ或ひと之を収めて福山の側に育ぶ爾長じて群衆と寺に入りて慶勝大僧となす此より

トクゲ

真和五年なり副將軍足利直義請じて洛の東山に居らしむ慶長五年に南無天龍の二刹を蓋さしむ徳慶共之高

トクゲ

真和五年なり副將軍足利直義請じて洛の東山に居らしむ慶長五年に南無天龍の二刹を蓋さしむ徳慶共之高

トクサ

トクサ 徳齋 梁人司馬達等の子なり崇神帝三年漢人善聰等八人と同じく出家す(元亨釋書)

トクサ

トクサ 徳齋 梁人司馬達等の子なり崇神帝三年漢人善聰等八人と同じく出家す(元亨釋書)

トクシ

トクシ ヲカマラカシヤウ 篤所(カタマラカシヤウ) 村の人性は藤原氏母奇夢を感じて生む四歳安か失ふ忌

トクシ

トクシ ヲカマラカシヤウ 篤所(カタマラカシヤウ) 村の人性は藤原氏母奇夢を感じて生む四歳安か失ふ忌

トクセ

トクセ イウコウサイ 徳田邑興齋 軍學者なり薩摩の藩士、壯年にして山縣大貳の門に入る

トクセ

トクセ イウコウサイ 徳田邑興齋 軍學者なり薩摩の藩士、壯年にして山縣大貳の門に入る

トクダ

トクダ

トクダ

言を奉らんとす會一、夜禁中飲酒あり、與者に醋ならん...

臣「フヂハラサササダ」トクダイシ、サネヒサ、徳大寺實久...

餘人を從へ、尼子氏に頼らんと、夜に粉れて濱田の浦より...

トクダイシ、サネムラ、徳大寺公城、權大納言實徳の庶子なり...

トクダイシ、サネミチ、徳大寺實通、本名實規、左大臣公胤の子にして...

トクダ、キンカウ、徳田錦江、字は子晴、錦江と號し...

トクテ

トクテ

トクテ

トクテ、サンカウ、徳亭三孝、戯作者にして式亭三馬の門人...

トクテ、マサシゲ、徳永昌重、或は豊重又ト昌昌に作る...

トクテ、ミチトキ、得能通言、彌三郎と稱す...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、セキシラフ、得能關四郎、劍術師なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、テイゴラウ、徳永貞五郎、陸軍歩兵少尉なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、ニノスケ、徳永二之助、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、トシマサ、徳永壽昌、昌利の子なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、トシマサ、徳永壽昌、昌利の子なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、トシマサ、徳永壽昌、昌利の子なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクナガ、トシマサ、徳永壽昌、昌利の子なり...

トクナガ、タケシ、徳永武志、陸軍歩兵中尉なり...

トクナガ、リヤウスケ、得能良介、印刷局長なり...

トクブ

事を管理せしむ而して製造其の方を得ず... 疑を懐く延議更に紙幣を造りて...

トクブ

トクブ 得無 俳人なり福芝齋と號す... トクボウ 獨峯 獨峯トクボウ...

トクホ

師に從ひて僅に經史の句讀を習ふのみ... 味業成就して自然智を得し...

トクマン

トクマン 徳本「ハタケヤマモチ」ニ... トクヤウ 徳陽 禪僧なり...

トクモ

トクモ 徳本「ハタケヤマモチ」ニ... トクモト 徳力有隣...

トクヤ

トクヤ 高僧なり... トクヤウ 徳陽 禪僧なり...

トクヤ

トクヤ カンペイ 徳山勘平 陸軍歩... トクヤマ デウヤウ 徳山重陽...

トクヤ

トクヤ トクヤウ 徳山重陽... トクヤウ 徳山重陽...

トクヤ

トクヤ トクヤウ 徳山重陽... トクヤウ 徳山重陽...

トクホ

トクホ トクホ

トクホ

トクホ トクホ

トクホ

トクホ トクホ

トコク

十四歳夏慶印寺に葬る法名驚峰院、家書或時百韻、墨太句集あり(俳諧年表、俳諧人物便覽)

トコク 杜國 尾張の俳人なり、萬葉丸と號す元金銀彫工を業とし、兵衛と稱す中、若菜に從て俳諧を學ぶ後、關人に密貿易せし罪ありて殺されんとす瑞龍公聞て曰く、彼等蓬萊の俳諧を詠みし者、非ずやと杜國の俳に曰く蓬萊や御園の飾樹山と俟其の詠の國を祝する者なるか喜び命じて死一等を赦さしむ乃ち三河伊賀古崎に流され此に没す時に元祿三年五月五日なり(俳諧年表、俳諧人物便覽)

トコヨ ショウイ 常世昌以 狩野派の畫家なり、初新八と稱す岩本昌運の甥、畫法を狩野安信に學べり(扶桑譜人傳)

トコロ アイタラウ 所都太郎 勤王家なり、元治元年、美濃國北方郡の人、窮民にして醫術を能くし諸國を周遊して窮民の病を療治せり遂に長州藩士の列に入り食祿を受く後遊撃隊の參謀に擧げられ元治甲子の京變にも興りしが軍取れたる謀に歸る幾許もなく藩に内亂起りしかば、都太郎に周旋する所ありしが速に病て吉敷にて没す時に年二十七明治十三年七月朝廷其忠志を追賞して特に従四位を贈らる(殉難錄)

トコロイ サイテラウ 所佐一郎 勤王の志士なり、世々水戸藩目附同心組下佐一郎文久三年藩地を去り同志を集めて常野の間に徘徊せしが元治元年甲子の變に松平頼徳に屬し屢々奸諂と戦ふ利を失ふに及び部下と共に捕へられ獄に下され翌慶應元年三月五日長岡原に於て磔刑に處せらる(殉難錄)

トコロヤ マゴキチラウ 所山五吉郎 勤王家なり、名は輝則士州藩山田藩藩士の次男にして

トサ

寺緣起、春日曼多羅(殘缺)、加茂祭、縁起物語(殘缺)なり(扶桑譜人傳)

トサ タカカネ 土佐隆兼 藩家士佐佐木の支族にして長隆の二男なり、別一家を成す從四位下に叙し刑部大輔に任ぜらるる書に父に傳りたる家法を守る正和年中の人、遺蹟著名の品は男舎三郎重子、新名所關卷、千代能圖切、諸佛畫とす(扶桑譜人傳)

トサ タカカネ 土佐隆兼 藩家士佐佐木の支族にして長隆の二男なり、別一家を成す從四位下に叙し刑部大輔に任ぜらるる書に父に傳りたる家法を守る正和年中の人、遺蹟著名の品は男舎三郎重子、新名所關卷、千代能圖切、諸佛畫とす(扶桑譜人傳)

トコキ

任て藩の輕士となる後、命ぜられて京都河原町の藩邸を警衛す而して傍ら諸藩の俊傑と交る元治甲子の歳六月六日同志と三條街小橋池田屋某の家に出くばし時事を論議す、藩士の士氣十人か以て屋敷の警衛を謀るるを爲し刃を閃し槍を揮ひ忽ち五吉郎等を圍む衆憤然起り、關ふ五吉郎撃て數人を斃し一條の血路を開き逃て長藩の邸に入り終に重傷の爲めに死す時に年十九東山正法寺に葬る(南海義烈傳)

トコキ サウザウ 牀井莊三 水戸藩士なり、名を親徳といふ小十人組となる才學あり家塾を開きて門人を教授す安政己未の變に同志と江戸邸に赴き藩論を陳べ齊昭の宛を解くに勉む元治元年甲子の亂に際し松平頼徳に隨ひ那珂湊に戦ひ事敗れて後忍藩に預けらる慶應元年四月四日斬らるる時に年二十八(殉難錄稿)

トコキ ブンザエモン 床井文左衛門 「ナカニシマヤシ」 茶道に學び能く、齋宗師の人(茶人系傳全集)

トコキ タンエン 戸崎淡園 守山侯の儒臣なり、名は允明字は百夫、初の名は計、淡園は其の號、五郎大夫と稱す常陸の人、世々守山侯に仕は其國體を平金華の門に受く、十八にして歩兵隊に列し果進して亞大夫用事に至る易説以下著す所二十部計、百五十八卷、萬行碩儒を以て世に傳たり、年七十を以て骸骨を乞ふ隠居す、是に於て外事皆な免れ、隨心に朝せしむ寛政己未大大夫に拜せらる事、年七十を以て致仕し更に淡園と稱す、世に傳り、六十餘年、致仕せしむと淡園の學風が爲めに一變す當時に在りて市鳴鶴東蘆田及び淡園のみ始終物氏の説を奉じて改むるとし、且著述も皆物氏の學を保持するに功あり、文化三年十一月没す、年八十三(一説に七八とあり)淡園初め家貧然れども心を榮利に嬰けず詩を賦し文を屬し以て樂と爲す且つ書を能くす人と爲り朴實恭謙にして

トサ ナガハル 土佐永春 藩家士佐佐木の支族なり、長男、太夫法眼と稱す父支族より出で、宗室吉光の後嗣故に亦父吉光の子を養ひて嗣とす、因て永春と稱す、別一家を起す父の教を受け其の書に所著家法を守る貞治中の人、遺蹟著名の品は來迎佛下の善導法然人、鷹犬、鶴、雞、地蔵尊、土蜘蛛童子、住吉物語、生寫卷物弘安年號、紫陽花屏風片、法然上人四十八卷傳の內數段、及び蒙古襲來とす(扶桑譜人傳)

トサ ツボネ 土佐局 後陽成帝の宮人なり、春日神社從三位大中臣時廣の女なり、書を善くして待賢門院に仕へ命を受け、後陽成帝の地圖を門院離宮の障子に畫く其筆勢妙手にて殊に寵せられ道周法親王幸勝親王を生む(野史、本朝書史)

トサ ハウ 土佐坊シヤウシユン 戸澤惟顯 津輕藩の儒等、號あり實は津輕信濃の藩人なり、年十三にして文武を勵み最も弓術に長せり後昌平坂學問所に出で、周易を講せり丹羽高寛召して之を重用せんとしたりしが、恬然とありて強て之を辭し江戸に歸りて池の端に住し講帷を垂れ、後常陸筑波山麓に隠る江戸の門人之を呼び迎へて湯島に居らしむ後本藩に事へ、明和四年本知百石役料五十石を給せられ、嗣君信明の傳となり、安永二年正月九日没す、年六十四元吉喜を江戸谷中妙祐山宗林寺に建つ

トサ マサモリ 戸澤政盛 盛安の子なり、盛安の卒するや弟光安嗣て、年長に卒す政盛乃ち嗣ぐ、九郎五郎と稱す慶長中、徳川家康上杉景勝を會津に討す

て奴婢家僕と雖も未だ嘗て惡聲を出さず其温厚物に接する率これに類す著はす所周易約說、周易占斷、聚辭傳、辯解、書經考、詩經考、左傳考、國語考、國策考、論語微論、首、學庸證、讀荀子補、讀韓非子補、讀呂春秋補、老子正訓、莊子考、申子考、淡園詩集、淡園文集其他十餘種あり(墓表、檀譜家人物志)

トサ テルヨシ 戸崎輝芳 神道無念流の劍客なり、熊太郎と稱す福井藩の門人(武術流祖録)

トサ ヤウブ 土佐刑部 藩家なり、經光の子家風を守りて善くせり(慶應傳)

トサ ニタカ 土佐邦隆 土佐宗家の藩人にして、經隆の長男なり、藩所預となり、從五位下に叙し豊前守に任ぜらるる父の業を受けて偏に藩事を勉む、唯、佛畫ありて、雜書少し能く、家法を守る文永中の人、遺蹟著名の品は三十六歌仙巻物、法然上人四十八卷傳の內數段、天神縁起殘缺、十六善神、釋迦、文珠、普賢、孔子の像、人、磨香家孔子の三影、及五節の圖とす(扶桑譜人傳)

トサ シヤクサイ 土佐寂濟 藩家士佐佐木の支族にして、光隆の次子なり、後六角氏と改む、繪所預となり、前兵部少輔と稱す、畫法を父に受けて、妙手に至る、永徳中の人、遺蹟著名の品は、惠心縁起法、花曼陀羅、氣違草子、山水屏風、三十六歌仙大色紙、雙龍通念佛内一段、天神、山王、寶鏡、頼義草紙とす(扶桑譜人傳)

トサ セウジウ 土佐少掾(補正) 淨瑠璃家なり、二代目薩摩次郎右衛門の門人、或は謂ふ、長門攝父伊勢掾の門人、一には外郎の別派をいふ、幼より淨瑠璃節に熱心し、寛文延寶の間遊に之を山し、土佐節と稱して、大に世に行はる、初め内匠佐一と稱し、後受領稱して、今の稱に改む、堺町に住し、同町に操座を設け、演戲を興行す、小大夫庄太夫等常に其脇を勤む、戲畢は則ち丸に十文字なり(聲曲類纂)

トサ タカカネ 土佐隆兼 藩家士佐佐木の支族なり、那隆の二男、後氏を高階と改め別一家を成す、從五位下に叙し、右近大夫に任ぜらるる書に父に傳りたる家法を守り、善く、延慶年中勅命を受けて春日靈驗記十六卷を畫く世人を榮とす、是より其の技大に進み、卒に妙手に至る遺蹟著名の品は馬醫の圖詞、五大明王、地蔵縁起、石山

通む父の教を受けて其の技妙手に至る因て別家より出... 宗家吉光の後に嗣ぐ公卿其の他有名の人と相往... 來し交り厚きを以て毎書必ず名家の賛あり貞和年中... の人、遺蹟著名の品は直幹申文章子、弘法縁起(殘缺)、...

て法眼に叙し永春と號し又た粟田口法眼と稱す應永年... 中の人、遺蹟著名の品は春日曼陀羅、求開時、嵯峨融通... 念佛の内四段とす(扶桑書人傳)

也本土佐家の門人(或は光起の父とするは誤なり)泉州... 堺に住す天正慶長年間の人(皇朝名畫拾遺)

筆を用ふ影畫は金碧を施し墨畫は輕筆を加ふ内に筆力... ありて外逸遊蕩の情を模出す其の穢麗雅致巧妙を窮... む遂に其の畫所の歌畫書の詞は宮院園房の玩とな...

せられ土佐權守中務丞に歴任す畫風家法を守りて巧な... り永享二年勅命に應じて兄行秀と共に大嘗會の屏風を... 畫り遺蹟著名の品は諏訪住吉神小圖、大黒天神、鈴...

トサ ユキミツ 土佐行光 土佐宗家の畫人なり光吉の二男、初の名は久吉又刑部と稱す畫所預... となり從五位下左近將監に任ぜらる畫を父に學びて善...

トサニ

トサニ

トサニ

トサニ

トサニ

トサニ

トシムトシヤ

光の門人正和年間の人或は云二世左近將監長光の門人にして正安比の人或は正和比の人にして刑部大輔と稱す同名二世に違ふと或は正和比の人なりと云ふ(古今銀治銘早見出、本朝銀治考)

トシヤトシム

文年間の人或は云天正比の人なりと(古今銀治銘早見出、古今銀治備考)

トシヨトタカ

ツ谷に住す(古今銀治銘早見出)

トダカ

正左衛門宗光、旗なり親父兵衛、掃右衛門と稱す享祿二年徳川清康に仕へて食邑分賜はる父兵衛、吉兵衛と稱す一四初字は新三郎更で左門と稱す元龜二年五月武田信玄の子勝頼、山縣昌景を撃つ秋武州八井田石原の役に従ひ命を受、諸軍を監す此の時武州八井田石原の隅に慶長庚子秀忠に由道に従ふ眞田昌幸上田に據り路を遮り秀忠期に後れて大津に抵る家康見後意稍解け相見て問て曰く吾等使を遣し期を約す今已に後解け相見て問て曰く吾等使を遣し期を約す今已に後解け相見て問て曰く吾等使を遣し期を約す今已に後

トダキトダシ

任へ名小越後と改め知行二千石を給ふ年七十五にして金澤に没す(家譜言行録、武徳流祖録)

トダストタタ

トダ スケユキ 戸田祐之 博物家なり安永八年動物類纂圖説二十八巻を著し本草綱目に載する品物を辯論し草木の根葉を寫眞し其の種類を分ち名を附し幕府に奉る(日本博物學年表)

トタタ

しからざれば則ち不孝之より大なるはなしと忠貞大に...

トダ

近尉政光の孫なり父光忠(或は忠政)に作る。近尉三郎右...

トタタ

ふ年老いて致仕し采邑に退居す文祿の初年征韓の軍起...

トダ

トダ タダマサ 戸田忠昌 尊次の孫にして...

トタノトタミ

政となり學校界の事を監督し食祿を増して八百石を...

トダ

トダ タダツグ 戸田忠次 豊河の人、左...

トタモトツカ

元智を攻む時に光定從ひて功あり(君臣略傳)

トダ

トダ モスチ 戸田茂時 歌人なり初め戸...

トツカ

閉ち客を謝し屋外に出でざること五年攻めとして業...

トツカ

トツカ デンタラウ 戸塚傳太郎 陸軍...

トツケトツキ

四月十五日年七十四歳にして卒す子彦九郎家を嗣ぐ...

トツキ

トツキ ツチヤトツサイ 訥齋(ツチヤトツサイ)...

トビサ 屋島に陣す平教経来り撃つ義経當きに自から之に當らんとす...

トビサートトビシ 廢せんと欲して未だ果せず實光時に知藩事を謀り爰し...

トビツートトフチ 候とも毛頭無御座候海へなりとも川へなりとも勝手...

トビアン 斗米庵「イトウジヤクチュウ」 横細村の奇士なり名は正直通稱權三郎又清左衛門と云...

トベナホモト 十部直元 陸軍歩兵少佐 なり宮城縣出身にして資性温厚誠實慮慮極めて周密なり...

トホヤマ カタマ 遠山 信濃の儒者 なり名は開陀又一輩、藤山人の號あり江戸四谷永住町...

トフン トハナ

トハナ トホナ

トホヒ トホヤ

トホヤ

天保十一年北町奉行に移り赤左衛門尉に除す此時に方
里老中水野越前守銳意新政を施す景元矢部左近將監島
居甲斐守等と前後比肩して江戸市中改革の事を司りし
が十四年三月に至りて罷めらる弘化二年甲斐守職を
及び復南町奉行に任ぜられ職に在ると前後十一年嘉
永五年に至りて致仕す薨逝して歸郷と號す傳へいふ最
元換錢に遊蕩せし頃無賴子弟に伍して腕に櫻花の文身
せり故に顯官に登ると及び常に緊く觀衣を着け盛夏と
雖も脱すとなしと然れども此故を以て顯る下情に通
じ明鑒を懸くるが如く人之を欺く能はず近代風指の
夏市尹たり曾て吉原某樓の娼妓の繁華を由り法廷
に召喚せらる恒例娼妓法廷に造る時は樓主娼妻之に介
す娼妻もと景元を識る其の器度を試みんと欲し景元の
座に就くを見て殊更驚きたる似し聲を揚げておや金
さんと呼ぶ景元泰然微笑して曰く久しく相見ず幸に
恙なきや今予既に天下三奉行の一人なり汝汝境に至り
て猶ほ未だ樓妻たるを免れざるかと娼妻然一語を答
ふる能はずして退くと云ふ安政二年二月二十九日病み
て卒す年五十餘丸山本妙寺に葬る(香雪手稿)

トホヤ

びて後命ぜられて備前康政に歸し館林城に在り長慶
子の亂起る友政望み請て曰く先づ美濃を伐ち以て公の
軍勢を迎へんと家康其志を嘉し之を許す友政國に歸り
兵を募る舊故の人々期せずして會する者數百是の時苗
木城主河尾直次は大坂に在り臣下城を守る友政地利を
請ふ元和二年十二月卒す法名心月宗傳、雲林寺と號
す子秀友嗣り刑部少輔と稱す子孫世々侯たり(野史)
トホヤマ ナホユキ 遠山直隨 彫工なり
トウヤマ ロザン 遠山廬山 京都の書家
なり十三歳の時より田邊玄菟を師として書を學び遂
に一家を成し諸體可ならざるなく殊に行書を能くした
り明治三十七年一月二十三日病歿す年八十二知恩院勢
至堂の傍に納骨す
トホヨ 遠世 大和の刀匠にして正元年間の人
或は云手院の派にして行信と同なり(古今鍛冶備
考) 遠世 備前の刀匠にして寛元年間の人
或は云手院の派にして行信と同なり(古今鍛冶備
考) 遠世 備前の刀匠にして寛元年間の人
或は云手院の派にして行信と同なり(古今鍛冶備
考)

トマリ

竹其の事實を知るにより即ち國に歸り佛を棄て文之
に從ひ書を學ぶと八年にして浪華に遊び有馬の温泉に
浴す此時藤堂高虎温泉に來り如竹を見て阿邊津に招く
(室直清の如竹傳に曰く慶長中藤堂高虎家實一在室東郡)
求仕泉州刺史藤堂侯問三編有學行遣使聘之翁始至
見之侯邸云々とあるは傳聞の誤なり) 如竹高虎に云
へらく吾平素愚昧を知らず今君の招に應ず言を盡さ
るべからず君を寛容せよ高虎之に答て侯の徒に至
りては吾其の人に乏しからず高虎の直言吾翁を聘する所
に異なりと云へりとぞ如竹一日高虎に云へらく人の禽獸
に異なるは能く人の道を行ふが故なり其道を行はざれ
ば人たる事を得ず禽獸を以て譬へんに君は虎狼なり人
實に畏る臣等は狐犬なり人侮る其畏ると侮るとは異な
れども其畏るは一なりと云へりと寛永七年高虎卒し
て嗣子學問を好まず辭して京都に上り釋耕庵著述の家
法和點(寛永元年梓行)文之點の四書新注(寛永二年梓
行)周易傳義(寛永四年梓行)及び文之著述の南浦文集
(寛永六年梓行)乾惠禁酒問答等の跋を伴いて梓行す皇
國四書新注周易傳義の板行は之を以て始めとす(天和
三年長尾某梓行の四書朱注遺卷の巻尾に曰く本朝釋
元江時諱三未注於御筵近代南浦創加訓點羅浮復潤色
云々と此元江とは僧玄惠を諱れる也南浦は釋文之にて
羅浮は林道春なり其後文政三年鹿島大龍寺第五世
文之が行狀を著し又此事を論じて曰く四書新注板行所
門著如羅山點書踏脚應云々此にて四書新注板行の始
は寛永二年なるも明かなり) 既にして屋久島に歸り佛
の餘を親族村民の貧しきに分ち與へ同九年琉球に渡
る翌年明國の使者來り明人陳深民に依て履か經書を討
論す深民如竹を敬重して其家藏を願天庵と名づけ琉球
國王如竹を師とす此の時琉球文教未開けず經書を讀む
と漢音にして和訓を知らず如竹文之點の四書を與へ始
めて和訓を知ると云ふ三年にして屋久島に歸り餘積を
施すと始の如し斯て寛永十七年島津光久如竹を城下に
呼ひ曉三石石を與へて常に講義を聞く(一説に曰く島
津光久江戸に在りける時水戸光圀に今儒道を學ばんに
誰をか師とせん問ひしに如竹を以て答へしによりや
がて侍讀とすと云) 鹿島島に留ると多年にして屋久島
に歸り明曆元年五月十五日八十八にして死す其墓安

トマル

房村藩本佛寺に在り(地理考)
トマル シユウラウ 都九重郎 陸軍歩少
尉なり群馬縣出身にして明治廿七年八月日露戰役に於
て第一師團歩兵第十五聯隊附として従軍中廿七年九月
二十日清國盛京奉天遼東地方高地に於て戦死す戦功
に依り勲六等功五級に叙せらる
トミカハ フサジ 富川房信 浮世繪
師にして又戯作者なり山本氏俗稱丸屋丸左衛門吟雪と
號し又百龜と號す貞享頃より大傳馬町二丁目に住し古
き繪紙問屋なりしが房信の時に至り浮世繪師となり
本邦に住せり西村重長の時に至り浮世繪師に似
たる所あり豆繪を請く多し戯作の才あり自畫作の黃
表紙を著す安永年間の人(浮世繪類考本、扶桑畫人
傳、小説戯曲通説)
トミザハ カセン 富澤歌仙 三枝家なり
大阪の人其の技に精し當時名手と稱す(聲曲類纂)
トミタ イツパウ 富田一放 富田流の劍
客なり富田越後の門人後世其の流を稱して一放流と曰
ふ(武術流祖録)
トミタ ウシフ 富田牛生 富田流槍術の
祖なり越前朝倉氏の臣槍法に精し中根、打身、佐分利の
諸流皆此人の門人より出づと(武術流祖録)
トミタ ウヂツグ 富田氏紹 仙臺藩の士
なり初め二左衛門と稱し後ち豊成と改む其の先は會津
義廣に仕へ後ち伊達侯に事ふ氏紹初め豊成にして百二
十石を領し名取郡令となりて郡守の指揮を受く萬治三
年藩侯綱宗武州品川に閑居す是時に方て副侯僅に二歳
藩方に其の傳たる可き者を選び氏紹選舉に達ひて之が
傳となり大松澤甚左衛門等と江戸に移居して朝夕副侯
を輔翼す氏紹風厚重にして威あり言寡なく行正し幼
主過おれば則ち徐るに之を諫む故を以て言聽かれざる
なし幼主最も之を敬懼し同僚又皆之を尊ぶ寛文十一年
伊達宗勝原田甲斐と謀て公族を害せんとする時宗勝の
黨多く幼主の左右に在り氏紹福の藩艦に起らんを慮
り同僚と日夜陪從奉衛して之を護る延寶三年從ひ
て國に歸る後内監長となり又進みて長老となり天和
國老に進み貞享三年柴田内蔵佐々木前等と一意身を忘

トミタ

れて菟匠を退く元談中護書を以て致仕し安徳と稱す尋
て歿す年七十是より先き藤二千石に至り小野色を領す
(事實文庫)
トミタ カゲマサ 富田景政 富田流銀法
の祖にして前田氏の士なり幼名は與六郎後ち初左衛
門と稱す其先は越前の入景家の子なり永祿の治利家
に尾張の荒子に事ふ天正中越中魚津藩に從ひ功あり
藤四千石を食む退老後公其孫を分て六百石を賜ひ七尾
城の守將となし餘を養子重政に賜ふ晚年銀法を關白豐
臣秀次に傳ふ時人老を稱して富田流と曰ふ文政中歿す
年七十(加賀藩史稿)
トミタ シゲマサ 富田重政 富田流銀法
の師にして加賀侯の士なり幼名は與六郎後ち初左衛門
大炊と改む景政の養子實は山崎景邦の子なり世々朝倉
氏に仕ふ年十二利家に仕へ近侍となり永祿八王子後越
後に従ふ慶長元年從五位下野守に叙せらるる後越後
守と更む因て世に名人越後と云ふ一萬三千六百石を食
む寛永二年四月歿す年六十二武術流の時利長出で、
技を柳生宗矩と傳はしめんとす重政將に發程せんとす
利長更に之を傳めて曰く之を會ひ二人並に無双の名人
と稱す今之を之を相角せしめば一人は敗せざるを得ず
是名人を中傷するなりと遂に廢む子宗高主計と稱す亦
技に妙なり子なし家絶す(加賀藩史稿、武術流祖録、武
藝小傳)
トミタ シゲヤス 富田重康 富田流銀法
の師なり世々加賀侯に仕ふ重政の子右京亮後甲斐又越
後と稱す兄重家歿するに及て家を嗣ぐ晚年中風に罹る
世に中風越後と稱す寛永廿年八月歿す年四十二子重次
トミタ セツサイ 富田節齋 名は禮彦、
稻大と通稱す字は和飛、節齋又自稱蘭、南興與可樓主人
と號す家世々藩領御地役人にして飛騨高山に住す
年十六歳にして父定儀を喪ひ家を嗣ぎ始めて益田郡下
原口の關所勤番を命ぜらる初め赤田章齋等に從ひて漢
學を修め二十歳始めて田中大秀につきて蘭學を學ぶ後
又橋守部の門に入りて三十二歳地役人の頭取となる弘
化嘉永の頃小野高堅の委囑により二子鐵太郎の教授を
なし藤岡の所厚かりき鐵太郎は乃ち山岡鐵舟の幼時
たり明治元年四月擯られて高山縣刑事に命ぜらる同二

トミタ

年國人の新政を喜はず腰巻を起すや節齋また災厄に遭
ひしが幸して身を免れたりといふ明治十年五月三日遂
に病歿す年六十七飛騨國分寺に葬る妻太後風土記を始
めとしその他著す所多し
トミタ キウスケ 富田久助 中村の藩臣
にして二宮尊徳の高弟なり名は高慶天明癸卯の飢饉甲
辰の疫癘に藩政萎靡す文化十三年藩政改革せられ家貧
なり而して學に志して江戸に出て屋代弘賢の門に入り
苦學十年後尊徳に野州芳賀郡物井村に謁し請て其の
門人となり尊徳の法を灌輸して行はんとす藩政改組草
尊徳の門下克く尊徳の道を了得するもの久助を以て最
となす累進して家老に至り明治四年十二月替前替七等
出仕に任じ管内開拓の法を行ふ後十年之内を結社組織と
し興復社を起し其の社長となり福島縣管内を殖殖とす
こと十一郡明治十三年朝廷を賞し正七位を賜ひ十四
年聖駕東遷の時特に調を賜ふ嘗て報徳記を著す而して
之を刊するを憚る萬曆主之を寫し上表文を添へ乙夜の
覽に供ふ勤あり印行して各府縣に頒ら賜ふ二十三年一
月五日年七十七にして歿す(富田高慶翁傳)
トミタ グケン 富田廣軒 岡山の儒者に
して名は玄真寛文五年池田光政に徵されて侍講となる
學校を創立するに及びて或は禮を講じ或は從に授く會
集討論し夜以て晷に繼ぐ天和二年朝辭聘使の過ぐるや
之を唱和す貞享四年六月歿す年六十四(日本教育史資
料)
トミタ クラウエモン 富田九郎右衛
門 越前朝倉氏の家人なり名は長家大橋勘解由左衛門
より中條流劍法の正統を受け其の宗を得て富田の一流
を立つ嗣子治部左衛門其の術尤も健捷採其其其其を繼
ぎ前田利家に事ふ豊臣秀次特命により其の術を受く治
部左衛門の弟子に富田越後あり初め山崎六左衛門と號
し朝倉の世臣なりしが後に前田家に仕ふ天正十二年佐
々成政越中木森城を攻むると槍の高名あり擡てられ
て一萬三千石を領す其の門下富田一放の派なり(本朝武藝小傳)
トミタ コラウエモン 富田五郎右衛
門 富田流劍法の達人なり九郎右衛門の長子其の術技

群交に譲らざれば眼を患ふるを以て家を弟治部左衛門に譲り自ら退隱し祝髪して勢源と號す永祿三年の夏...

精しく名聲著たり病家苟も勤王の志あれば最も意を方劑に盡し其人病癒え報謝する所あるも辭して受けず...

して終に城門に跪る利長歎惜す(野史) トミタ デブザエモン 富田治部左衛門トミタカゲマサ...

トミタ

トミタ

トミタ

の城を攻めんと欲して發途す知信の兵船數千艘阿波津の濱に入るを望み謂らく大崩已に至ると部下連に懸ぎ...

せられ元種も亦た連坐して封を奪はる左門謀に伏す次郎三三知信の弟佐野政綱も亦色除せらる...

方が谷に設す而して自ら威を雲ひ國中に政寇魚住景固父子を享して之を殺す景固の長子彦三郎羽の弟に...

トミタ

トミタ

トミタ

トミヤートンヤ

八病率まるに及び特旨を以て位一級を進められ従二位勳二等に叙せらる性情淡寡欲にして依氣に富み公共事業及び慈善的事業に盡心せし事極めて多しといふ

トミヤカ タカフミ 富岡亮文 陸軍歩兵大尉なり東京府出身にして近衛師團兵隊司令部に属し明治二十八年八月十一日臺灣島基隆兵站病院に於て腸胃扶新病に罹りて死す

トミヤ シセン 富尾似船 俳諧師なり名は重隆寛月庵又二世似空軒と號す安野の門人、寶永二年七月十六日歿す年七十七著述に當代水などあり(俳林小傳)

トシヤ 順阿 歌人なり梶井執事源全の子にして俗名を三階堂貞宗と云ふ二階堂行政の後にして下野守光貞の子なり初め泰等と曰ひ又た真阿と稱す順阿年二十四にして始て佛學を習ふに修め又た高野山に登り名を感空と改む後京師に歸り四條金蓮寺に入りて其の今の名に改む性相歌を好み藤原の爲世に從ひ其の奥に達す爲世歿するに及て順阿其の己を知る者なきを歎じ復た歌を作らず光嚴帝より順阿の歌才を知る頃年の順阿を改正せんと欲し貞治二年攝政藤原基基に勸し乃ち順阿と問答せしめ以後世の龜鏡となす名けて愚問賢註と曰ふ嘗て權大納言藤原爲新治遺業を撰し未だ果さずして歿するを以て順阿繼ぎて戀の部以下を成す又た井蛙抄著はす其の他家集あり草庵集と名く順阿は兼好淨觀慶運と名を齊うし和歌四天王と稱せざる嘗て續歌あり題多くして詠者少し順阿慶運の堪能者なるを以て各一首の題を取て坐るに詠ずるとなす順阿題を得て後座を起て他に往く慶運に其の題を譲して己が得たる題と相替へ已れば則ち順阿が得たる題六首を詠じて筆者に付しりしに詠りて順阿來りて時已に迫れり乞ふ亟かに詠せよと順阿唯唯に筆を執りて六首を記し之を筆者に付す其の詠する所巧麗人を

トシヤートンヤ

驚かず慶運亦た之を稱し且其の戲辭を附すと云ふ嘗て詠じて曰く「月宿る澤田の面に伏す鳴の水より立つ明方の空」と人呼ぶ澤田の順阿と云ふ元中元年三月十三日豊林寺に於て歿す時年八十四(野史)

トシヤン 逯庵 ヲホハラトシヤン 館と號す點者にあらず典歌を發して世に鳴る嘗て中川貞佐に隨て佛語を學ぶ然れども浮吟悉く佛體にあらず一日貞佐永に謂て曰く汝が句意全く別るゝ所あり狂歌を學ば、其の道に堪んよと永師命に感し謝して乃ち自然に而後雅俗を聞て其の風流日々に盛んに其の徒月々に加ふる蓋し上人丘乙巳の時より十日と因て俱に嗚呼を勵み或は詠曲を學ぶと雖も師を異にせず亦して俱に善し然れども十日は鈍才にして一に發せず永は多才にして觀世臨池の流を汲て傳へて他に及ぼす且つ割割の巧あり一歳官家の命に應じて額を彫る賞を蒙て名を讃歎と賜はる後筆流を換て雅雅なり明和四年八月九日歿す年四十五(野史)

トシヤウ 吞海翁 トウヂウキョウ 人なり天徳に大光寺に諷して頼り深きを得後陸州に遊び皆な許可を蒙る天徳の命に頼り龍泉寺に住し觀室に居り分説法に請に應じて法を總持寺に開き大光を主り越の宗生寺にうつり法を玉雲に傳へ(洞上聯燈錄)

トシヤウ 曇華 名は慧寂字は大歡樂を徂徠に受く寶曆十二年歿す江戸東門跡地中間成寺に住す曇華集を著す

トシヤウ 曇華 道人は僧なり豐後の人、幼にして白杵月桂寺に入り鐵帝和尚に學ぶ初め美濃に遊び處を結ぶ數年蘭邑並其の德量を仰ぐ去て熊野山に入る鐵帝以て數年蘭邑の住職となさんとし屢々之を召せども皆な應ぜず後偽を作りて曰く人生難一期七十年、病

トシヤートンヤ

身實不當多錢、紅塵堆裏拂衣去、眠熟江南白鳥前」と(續近世叢語)

トシヤウ 吞舟 オホハラトシヤウ 葉字は法忍、十五の時出家して滿分戒を受け天台の止觀を習ひ兼て三密の秘教を學ぶ痛く戒法の振はざるを歎き宋に遊び顯孝寺に赴き律學を受け理宗皇帝に謁す奏對詳明なり帝悅て忍律師の號を賜ふ歸るに及びて朝廷其の德を欲し爲めに伽藍を建てんとし地を擲みて未だ決せず一夕照九洛の南に一處あり丈六の青蓮花を産して光十方を照らし無量、聖衆前後圍繞すとも夢み覺めて後之を尋ねれば果して淨瑠璃を得たり乃ち之を奏聞し勅して其の地に就て營建せしむ功竣りて世尊丈六の像を安置し以て瑞雲に應ず瑞雲と曰ふ是より法門の廣闊觀ひ至りて東方の律學復た起る天福の初め再び中華に遊び歸り聖迹を尋ね多く佛像梵具を得て歸り太宰府に就て律院を造る號して四林寺と曰ふ律を講じ法を弘む嘗て如意輪觀音に事ふ靈應一に非ず四衆飯仰す先哲と雖も及ばざる所あり後洛の東山に於て亦た律學を創め東林寺と曰ふ戒光寺の子院として上首の弟子淨因をして住持たらしめ曇照靜室に退休して専ら念佛三昧を脩す終に臨終念止まず端坐して化す時に正元二年二月二十一日なり或は謂ふ正嘉二年なりと年七十三(元亨釋書、東國高僧傳)

トシヤウ 敦素 京都の僧者なり氏は大町名は實字は正淳伊藤仁齋の門人享保十四年十一月十日歿す年七十一(平安遺稿、書畫便覽)

トシヤウ 曇徽 高麗の僧なり推古帝の十八年三月高麗國之を貢す沙門法定之に食を給す曇徽外學に涉り五經に善く又伎藝あり始て極麗紙墨か造り彩

トシヤートンヤ

雷に工みなり(元亨釋書)

トシヤウ ヨサウベネ 鈍通與三兵衛 狂言作者なり津打兵衛の門人初め津打十郎(一)に治十郎に作る)と曰ひ更に與三兵衛と更め後師に襲て治兵衛と曰ふ狂言作者を以て其名世に知らる一河齋は其別號なり(聲曲類纂)

トシヤウ 曇眞 禪僧なり天徳と號す姓は橋氏江州の人なり八歳にして叡山上に上り出家して台教を習ふ數年の後捨て禪に歸す通知に青原寺に依り久うして法要を悟る明徳二年龍泉寺に住し正長二年丹の永澤寺に遷る後越の宗生寺に退居す歿する年九十有八(洞上聯燈錄)

トシヤウ ヲホハラトシヤウ 秋田佐竹家の支族にして横手城代たり諱は義通字は子達通稱十太夫東陵は其號なり別は草園と云ふ致任して瀧心齋と稱せり書畫を善くし適勤豐潤名聲四方に高し嘉永七年六月卒す年八十七

トシヤウ ヨシクニ 戸村義國 十太夫と稱す秋田佐竹家の支族なり慶長十九年佐竹義宣大坂の役に赴くや義國時年二十四一方の將として今福口に戦ひ奮闘して敵の軍將矢野和泉守を伐ち取り英名を轟せり徳川秀忠賞するに感狀及び青江次直の太刀を以てせらる寛文十年十二月卒す年八十

トシヤウ トウリヨウ 戸村東陵 秋田佐竹家の支族にして横手城代たり諱は義通字は子達通稱十太夫東陵は其號なり別は草園と云ふ致任して瀧心齋と稱せり書畫を善くし適勤豐潤名聲四方に高し嘉永七年六月卒す年八十七

トシヤウ ヨシクニ 戸村義國 十太夫と稱す秋田佐竹家の支族なり慶長十九年佐竹義宣大坂の役

トシヤートンヤ

私治二年四月武州岩槻の城主太田美濃守の家臣井上將監の家に入る龍壽丸と稱し幼より佛に志し十四歳にして平方村林西寺の爰辨和尚に入門し名を曇龍と改む翌年芝増上寺の中興親智圓師の許に遊びしが才識非凡勳精又衆に勝れしり幾多も乃ち林西寺の住職となり建大善寺に移る慶長十八年將軍秀忠大光院新田寺を創建し上人を迎へて開山とするや名を曇龍と改む元和二年殺生禁犯の土を隱匿せし事曝露し幕府の嚴責を受け行脚する事五年にして救免を得再び大光院に歸錫し同九年八月九日年六十八にして入寂す

トシヤウ 曇慧 百濟國の僧なり欽明帝の十五年二月道深と共に本國より實し來る(元亨釋書)

トシヤウ 倣園 イヒノドシヤウ 倣園イヒノドシヤウ 倣園イヒノドシヤウ

トシヤウ 留之方(一)に富の方に作る) 徳川家康の外祖母なり大河内元綱の養女にして實は青木一宗の女なり國色あり始め水野忠政に嫁して傳通夫人及び信元、重次を生み大歸寓居す清康秀成に遷り之を娶り信康及び一女を生む女子初め長澤康高に適す康高卒して再び酒井忠次に配す留方始め水野氏に適す康高む所の女を以て廣忠に配し家康を生む甫めて八歳父を喪ふ留方稱養すること八年天文四年十二月清康卒して寡となり星野秋國に適く秋國又た卒し菅沼定望に嫁す定望又歿し終に川口盛祐に嫁す凡そ五匹婚を換ゆ後避居して永祿三年五月六日大河内政房の家に卒す年七十餘法諡して華陽院玉桂慈仙と曰ふ富崎智源院に葬る(野史)

トシヤウ スキゲツ 登米水月 畫家なり墨色甚はた妙なり筆力に似たり文珠及び山水を能くす(鑿定便覽、本朝畫史)

トシヤウ トモイヘ 友家 古刀の鍛工にして甘露寺と稱す(古今鍛冶録早見出)

トシヤウ トモイヘ 友家 古刀の鍛工にして甘露寺と稱す(古今鍛冶録早見出)

トシヤートンヤ

トモイヘ 友家 加賀の刀匠或は云ふ文明年間の人にして藤島の派なりと(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友家 石見の刀匠寛永年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 朝家 豐前中津の刀匠にして延寶天永年間の人なり或は資貞の子なりと云(本朝鍛冶考)

トモイヘ 朝家 寛後大石の刀匠資永の子或は云ふ永正年間の人と云左の一派にして應仁比の人なり亦薩摩にて造るとあり又永正大永年間同名人者あり蓋し二世なるべし(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)

トモイヘ 友氏 京の刀匠にして朝尊の門人嘉永年間の人なり(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友氏 攝津天王寺の刀匠應永年間の人或は云淡路房の門人にして天王寺に住し亦大和に居なりと(古今鍛冶録早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

トモイヘ 友景 遠江の刀匠嘉吉年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友景 加賀の刀匠永正年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友景 備前古刀の鍛工なり或は云ふ應永年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友清 大和當麻の刀匠國行の子元應年間の人或は云文應比の人或は國行の門人なりと(古今鍛冶録早見出、本朝鍛冶考)

トモイヘ 友清 駿河の刀匠或は云ふ永正年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモイヘ 友清 陸奥舞草の刀匠元暦年間の人或は云延久比の人亦は永仁比の人なりと(古今鍛冶録

トモトモ の子にして文治比の人なり(古今鑑治録早見出 古今鑑治録考、本朝鑑治考)
 二世友利は建武年間の人或は友俊に作る貞治比の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
 三世友利は應安年間の人(古今鑑治録早見出)
トモトシ 友俊 大和の鑑治にして當麻俊行の子嘉慶年間の人或は云文永比の人なり又云俊行の流にして應安比の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考、古今鑑治備考)

トモナリ 友成 備前中島の刀匠來氏と稱す貞治年間の人或は云吉氏の二子にして至徳比の中島に住す或は天王寺に住す或は一名友成と云と(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友成 備前の刀匠實成の子にして永延正暦年間の人或は云永延中父實成と共に天皇の御剣を鍛作す又平政経源義經の太刀は友成の造る所なり又云長船の始にして刀銘或は君萬歳の三字を勒すと(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考、古今鑑治備考)
トモナリ 友成 備前の刀匠にして介光の子天喜延年間の人なり或は云友成の子にして友則と云と(本朝鑑治考)
トモナリ 友成 備前の刀匠嘉禎寛元年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友成 備前の刀匠建武年間の人(古今鑑治録早見出)

を便にするして國善寺の本營と往復す晝夜遣兵の事を督勵せり六月十九日黎明長兵大舉大野を襲ふ此時安其の長男友成馬は歩兵差圖後頭取を以て小隊長となり先鋒に在り進て長兵を遊へ撃つ長兵甚だ銳我兵動もすれば亂れんとす求馬大に怒り彈丸を肩し挺身奮闘爲に重傷を蒙り終に斃る我兵奮怒踏躐並に進み擊て大に長兵を破る是より先安其は上陸して營に在り戰爭の前日長男求馬偶然來訪せり折ふ安其は陸軍奉行の會議に赴くの際なりしを以て久々の對面も綴話するとを得ずして別る翌日安其廣島なる紀伊の營に赴き薄暮旅寓に歸る途に家士馳せ來りて告ぐるに遇ふ曰く隊長より命あり耶君重傷を負ふ主公道速に來營せよと安其曰く汝隊長に面し我言を傳へ謝せよ曰く戰場に於ては親子討たるも相顧るなし我職を擲り貴營に參ると能はず誠意の事は隊長の庇護に依ると安其奇計を出し長兵を破り心大に勇み黎明三船共に發せんとす偶々昨日苦戰して奪ひたる勇再ひ敵手に入り我軍大野村に退きたるの報あり安其大に怒り直ちに大野の陣營に赴き仔細を問ふ曰く後兵糧がずと安其切齒す慶應二年將軍家茂大阪城に薨じ尋て休兵の命あり此に於て安其は海路歸阪城とす而して他日の爲めに中國の地形を視察せん欲し請て部下四五人と共に陸路より歸る十一月二十五日江戸に歸る而して長藩の處分決せず天下の形勢變更に三月十月將軍辭職す安其慨然として以爲らく是れ臣子命を致すの秋なりと聞老稻葉兵部大輔に謁し建言書を呈し因て前將軍慶喜に謁し意見を親陳せんと言書待つと日あり會々陸路を燒く事あり安其云く大亂既に近づけり指令を候つ可らずと因て書を閣者に致し家士數名を從へ即夜小石川の邸を發す既にして桑名に到る道路傳へ云ふ鳥羽伏見の事あり至る途上藤堂藩の兵に逢ふ藤堂懇に問道を指教し去る已にして將軍既せり因て轉じて伊賀越前同國上野に至る途上藤堂藩に大坂を發せしと聞き急に江戸に歸る即日登營し參政立花出雲守に謁し途上見聞せし形況より其の抱持せる意見を具狀す一日營中に赴く大目付木暮安其及び下曾根甲斐の二人を招て曰く今般有忠の諸士東本願寺に相集り影響隊と稱するに未だ之を統御する人なし足下等宜しく其の司令となり指揮あるべしと二人未だ

之を諸世俱に本願寺に赴き頭取以下諸士に面し其の意見か聽くに安其等の意と諸は二人は事由を本多に告げ其の命を辭せり安其爲らく今日の計を爲すもの宜しく同志と上京し閣下に寓居し徳川氏の社稷を全うするに在り當時慶喜の遊謀を輔けしといふを以て諸藩中なる竹中丹後の邸に謁し意中を語る丹後喜比同す而して事已に破れ影護隊上野に暴擧して敗れ輪王寺宮根村の農家に匿ると聞き之に抵りて執事覺王院に謁し宮の將に會津に落ちんを聞き有志と道に分ちて會津に到り宮を迎へんとす安其に兩藩に到て脱徒に與し宮重之助と共に兵器彈藥の事を主幹す區々たる脱兵にして其の官軍に抗敵し終始彈藥の欠乏を告げざりしは安其の力多き居れりといふ明治三年二月赦令あり靜岡藩に入る後陸軍造兵司に出せし小樽に住居し子爵の所有地を管理し十月開拓に赴き小樽に在りし職を辭し榎本子爵の爲めに北海道に赴き明治二十四年インフルエザに罹り十月同地に於て歿せり年七十二資性剛直物に屈せず其の負傷癒るに及んで健步舊の如し嘗て車に乗りし事なく其の病に罹る數月前出京せし時汽車汽船の外は長履歩踏ど壯士も及ばざりしと云ふ息友成仲は職を北海道五等技師に奉

門人淺野梅堂之を訪ふに袖口に吟哦を絶たず筆を命じて之を寫さしめて曰く音猶多々益靜ずと梅堂曰く先生の時既に足れりよろしく一筆を留めて冥府の贈と爲せと體舟齋爾として歿すといふ
トモナリ 友信(カノバエイ)
トモナリ 友信(カノモノブ)
トモナリ 友信(ヨコヤゲンボ)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友信 加賀の刀匠元永享年間の人(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)

トモナリ 友則 大和の刀匠或は云嘉慶年間の人にして當麻利光の子なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 遠江の刀匠寛元年間の人或は云友友の子にして嘉禎比の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 美濃の刀匠にして關左衛門尉兼永十四世の孫なり鈴木清右衛門と稱す寛永中出羽山形に移り保科氏の刀匠と爲る同氏對を陸奥會津に遷すに及び隨ひ移る正保比の人なり二世は兼友と云(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 越中則重源の刀匠建武年間の人(古今鑑治録早見出)
トモナリ 友則 越中の刀匠貞治年間の人或は云ふ左近と稱す又云國光の門人にして延文比の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 越中宇津津派の刀匠にして永享年間の人或は云友友の子にして應永比の人或は貞宗の子なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 延徳比の人又加賀に住す(古今鑑治録早見出、古今鑑治備考)
トモナリ 友則 備前の刀匠元暦年間の人或は云友友の子にして應永寛正年間の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 備前の刀匠元暦年間の人或は云友友の子にして應永寛正年間の人なり(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ 友則 越中の刀匠永正年間の人(古今鑑治録早見出)
トモナリ 友則 豐後高田の刀匠にして有正の子文永年間の人後陸奥に住す(古今鑑治録早見出、本朝鑑治考)
トモナリ エンザラウ 友野圓三郎 陸軍歩兵大尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第六聯隊附として從軍中七年十一月卅日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

トモノ

トモノ

トモノ

トモノ カシウ 友野霞舟 名は環字は子玉雄助と稱す江戸の人なり七歳にして南隣の邊見氏に就きて甫めて句讀を受け次て川井東海先生の門に入り以後昌平校に入學し専ら野村蘭園の薫陶を受けたりといふ天保十三年十月昌平校の儒員に任ぜられ翌年正月甲府徳興館の學頭に擧げられ乙骨耐軒之に副たり是より各年耐軒と交代して弘化二年に至るまで職にあり其後復昌平校に教授し嘉永二年に至り同年六月二十四日卒す谷中宗林寺に葬る著はす所著詩書百十卷あり明の朱竹坊の明詩綜に倣ひ藤原惺窩以下名家の詩を蒐集せり此書世に乏しく僅に内閣文庫に一本を藏するのみ又霞舟文稿一卷あり其遺稿を集めたるものなり霞舟常に詩酒に托して自放にし拘虛迂儒の行を屑しとせず然れども人を教ふる諄々として倦まず當時の名士多く其門に遊ぶ霞舟の詩に於ける天材に出で筆を下せば直に錦繡の句をなす病んで將に死せんとするや

門人淺野梅堂之を訪ふに袖口に吟哦を絶たず筆を命じて之を寫さしめて曰く音猶多々益靜ずと梅堂曰く先生の時既に足れりよろしく一筆を留めて冥府の贈と爲せと體舟齋爾として歿すといふ
トモノ マタヘイ 吃又平「イハサマタベ」
トモノ ミヤ 倫宮「エイカウニワウ」
トモノ ミヤ 友宮「エイシウニワウ」
トモノ ノリ 知紀「ハチダトモノリ」

トモノ エンザラウ 友野圓三郎 陸軍歩兵大尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第六聯隊附として從軍中七年十一月卅日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

トモハフシ

友法師 大和の刀匠正和年間の人...

トモバヤシ

トモハフシ 友法師 大和の刀匠正和年間の人...

トモヒラ

トモハフシ 友法師 大和の刀匠正和年間の人...

トモハフシ

トモハフシ 友法師 大和の刀匠正和年間の人...

トモヒラ

トモヒラ 具衡 美濃關の刀匠寛文年間の人...

トモマツ

トモマツ 伴正 友道 友光 大和の刀匠...

トモミツ

トモミツ 友光 豊後高田の刀匠正和年間の人...

トモモトモヤ

トモモリ 友盛 古刀の鍛工にして備前の人或は云大宮の派なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)
トモモリ 友盛 姓は平氏豊後高田の刀匠天正年間の人(古今鍛冶録早見出)
トモヤス 友安 備前長船の刀匠にして兼重の子永治年間の人なり或は云後の長義の子なり又云貞治比の人にして長義の門人なりと(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

トモヤトモユ

トモヤス 友安 備前長船の刀匠にして兼重の子永治年間の人なり或は云後の長義の子なり又云貞治比の人にして長義の門人なりと(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)
トモユキ 友行 豊後高田の刀匠天仁年間の人なり或は云高田の初代正和或は延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)

トモユトモキ

トモユキ 友行 備前長船の刀匠明徳年間の人なり或は云高田の刀匠天仁年間の人なり或は云高田の初代正和或は延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)
トモユキ 友行 豊後高田の刀匠天仁年間の人なり或は云高田の初代正和或は延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)

トモシ

トモシ 友吉 大和の刀匠永年間の人(古今鍛冶録早見出)
トモシ 友吉 遠江の刀匠友光の子永享年間の人なり或は云友安の子にして貞比の人或は應保又は嘉元比の人なりと(古今鍛冶録早見出、本朝鍛冶考)
トモシ 友吉 近江の刀匠長徳の門人貞治年間の人或は云甘呂の一派にして延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)

トモトモヤシ

トモトモヤシ 友行 一に重永に作る遠江の人にして古刀の鍛工なり或は云天仁年間の人或は保元建久年間の人或は云友安比の人或は關東の門人なりと(古今鍛冶録早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)
トモトモヤシ 友行 越前中津津の刀匠建武年間の人(古今鍛冶録早見出)

トモトモヤシ

トモトモヤシ 友行 豊後高田の刀匠天仁年間の人なり或は云高田の初代正和或は延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)
トモトモヤシ 友行 備前長船の刀匠明徳年間の人なり或は云高田の刀匠天仁年間の人なり或は云高田の初代正和或は延文比の人なりと(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)

トヤマ

に仙桃王母及び桃林義を結ぶ等の故事を以てす桃品十餘巻を著す古今歴史百家旁搜列して巨細遺すことなし...

トヤマ マサカズ 外山正一 教育家なり...

トヨクニ 豊國(ウタガハトヨクニ) 豊國大明神(トヨトミヒコ)...

トヨウ

トヨウ

トヨウ カウジン 豊田孝元 道徳家なり...

トヨウ ヒカツヲウ 豊浦被褥翁トヨウラ...

トヨクニ

トヨクニ 豊國(ウタガハトヨクニ) 豊國大明神(トヨトミヒコ)...

トヨス

トヨス カウジン 豊田孝元 道徳家なり...

トヨタ

トヨタ カウジン 豊田謙次 勤王家なり...

トヨダ

既にして古童死す(幕は深川園寛堂本尊の裏手にあり...)

トヨダ タダチカ 豊田忠周 石州流の茶...

トヨダ タダムラ 豊田忠村 石州流の茶...

トヨダ テツザウ 豊田鐵藏 陸軍歩兵少...

トヨダ

トヨダ マサチカ 豊田政親 金工なり柳...

トヨダ マサヒメ 豊田海津見神の女なり...

トヨダ ムクワン 豊田無關 石州流の茶...

トヨダ ヤウケイ 豊田養慶 醫師なり周...

トヨダ

トヨダ リヤウサウ 豊田良作 陸軍大...

トヨトミ ヒツツジ 豊臣秀次 秀吉の...

トヨトミ ヒツツジ 豊臣秀吉 尾張國...

トヨト

間宮康俊が徳守將北條氏勝壁を越えて脱走す七月尾張...

トヨト

トヨトミ ヒツツジ 豊臣秀吉 尾張國...

トヨト

トヨトミ ヒツツジ 豊臣秀吉 尾張國...

を辨じ自ら姓名を造りて木下藤吉と曰ふ信長の出るを...

らん欲す女背せず淺野之を患ふ藤吉乃ち權りに利家...

元年九月兵を發して壘を築く數日にして成る處に於て...

吉桐を以て號となし命を馬表となす而して一捷毎に...

人々幸ふて備中に入り宮地を攻めて之を下し遂に冠...

長死し彼軍情沮廢し危疑前起す我是の時に乘じて之を...

トト

トト

トト

トト

トト

トト

瀧川一益は北條氏に當り羽柴秀吉は毛利氏に當り丹羽長秀は信孝を佐けて將に四國に赴かんとす我空虛の地に出で大事を成すを得ば天下圖るに足らずと是に至

諸州を畧定す是に至りて皆其の有となるを以て即ち復た分地を受けず時に勝家威望將に越え馳して鬼柴田と曰ふ宴に在りて設言を放ち以て秀吉に挑む後ち諸

を破る清秀戦死す盛政勝に懼れ留りて還らず勝家威望を以て之を召し還す盛政はは午時報秀吉に逃す

だ戦はず秀吉書み遣して戦を挑む徳川氏肯んぜず四月池田信輝自ら間道雲河を掃かんと請ふ秀吉答へず明日

季諷して其の官を辭せしめ秀吉を以て之に代ふ朝廷乃ち詔して之を許す秀吉馳從を具へ入朝して恩を謝し發

と乃ち越中尾張以西三十七國に命じて兵を發し明年二月を以て大阪に會せしむ三月朝秀吉自から諸軍を率

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

氏直と謀して敢て對へず秀吉尋て復た人を遣はし入朝を促がして曰く朝せざれば則ち爾らと氏政其の親族...

吉備軍を率て小田原に抵り牙を石垣山に建て夜万卒に命じて城を築かしめ紙を懸に糊す之を望むに壘の如し...

て曰く彼は畿内の軍なり彼海道の軍なりと政宗唯々敢て仰視するなし既に遣歸す政宗退きて入に謂て...

命じて書を傳らしめ以て之に答て曰く日本豊臣秀吉謹みて朝鮮國王陛下に答ふ吾が邦道遠く分國に屬し...

て大艦數十艘を遣らしむ時に大艦秀吉の海外に赴むを聞き憂懼して腹を腹するに至る乃ち謀して秀家を...

安等と偕に清正存ふる所の二王子大臣以下を放遣せり明主如安を疑ひ敢て納れずして之を遼東に會せしむ...

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

ト下ト

を察せず故に之を狐憑と謂ふのみ鄙語に曰く...

を乞ふを莫ふなり正則還りて秀次の首を獻す...

則ち貴國復た禍を被らぬ惟敬翁は其慮鳴を疑ふ已に...

トモト

トモト

トモト

ざる者無し其の嗣君を輔くるに於て何か有らんと是に...

以て往りて大阪に居る淀君之に従ふ五年石田三成秀頼...

重、眞野宗信(一)の名は頼治石田島氏種野々村吉安(一)...

トモト

トモト

トモト

トモトニヒジヨリ 豊臣秀頼 小字は...

トモトニヒジヨリ 豊臣秀頼 小字は...

トモトニヒジヨリ 豊臣秀頼 小字は...

籌らずして反て和を乞ふは天豊臣氏に許すなり且つ家康は老且夕の人也今且く軍を欲め兵を養ひて

秀頼答へず軍を分て三となす大野治長一軍に將たり七隊長及び後藤基次之に屬す大野治房一軍に將たり長曾

守久を召す二人許に退く諸軍内變ならんと思ひ皆城に圍る東軍之に乗じ遂に全軍敗退す秀頼牙門に據り胡

り並に庶出なり男名は國松前めて八歳其の傳田中氏之れを捕して城を出て伏見に匿くる國松容儀非常人或は

治を過ぎて凱旋す盛親に堪へず尙は大膽に藤の森に匿れて之を覗ふ然れども機巧き金并を賣て餅を

食事を調す寛永十年卒に秀頼谷村が家に養は年四十餘歳徳列府城の東門下を過る時薩摩侯城を出て柵を

トトト

トトト

トトト

トトト

トトト

トトト

トヨナガ ミキタイフ 豊名貨造酒太夫 元祖常楽津文字太夫の門下にして常楽津節を善す

寶曆中妙手を以て世に稱せらるる豊名實富士大夫同志摩... トヨノブ 豊信、カハエトヨノブ、イシカハト...

トヨハシ ヤスヒト 豊階安人 河内大... トヨハラ カネツキ 豊原兼秋 拾人...

トヨビロ 豊廣、ウタガハトヨビロ... トヨマサ 豊房、トリヤマセキエン...

九日卒年七十有三(豊原系圖) トヨハラ トキミツ 豊原時光 其先は天...

トヨハラ トキモト 豊原時元 拾人なり... トヨハラ ヒロツキ 豊原英秋 龍秋の孫...

トヨハラ タツアキ 豊原龍秋 京師の... トヨモト 豊原、弘長比の入備前の刀匠...

トラアートル

告げ紀念を交へて去る... 賴朝虎を召して...

トラアキ

虎明 駿州富士郡下方の刀匠にして...

トライハ

虎岩道説 醫家なり...

トラヤ

都樂 イケダトラク...

トラザハ

虎澤檢校 琵琶法師なり...

トラヤシ

虎林寅吉 大阪力士なり...

トラウミ

鳥海三郎 アベムネタツ...

トリノウミ

鳥海松亭 儒者なり...

トリノウミ

鳥海松亭 儒者なり...

トリノウミ

鳥海松亭 儒者なり...

トランートル

リ弟子となり明治二十二年頃...

トラン

土卵 京師の俳人なり...

トラン

和州の尼なり佛法を精修し...

トラン

鳥山香軒 儒者なり...

トラン

鳥山景清 字は義...

トラン

鳥山正作 不忘...

トラン

鳥山松岳 儒者なり...

トラン

鳥山石燕 儒人なり...

トラン

鳥山石燕 儒人なり...

トラン

鳥山石燕 儒人なり...

トラョートル

疾走し敵の鎗下を潜りて其の足を...

トラヨ

虎尾紋右衛門 虎尾流の槍術の祖なり...

トラヨ

鳥飼宗慶 書家なり...

トラヨ

鳥飼野人 播磨水谷の俳人なり...

トラヨ

鳥越等哉 俳人なり...

トラヨ

鳥之石楠 伊弉那岐神の第十六子なり...

トラヨ

鳥海玄達 醫者なり...

トラヨ

鳥海玄達 醫者なり...

トラヨ

鳥海玄達 醫者なり...

トラヨ

鳥海玄達 醫者なり...

トリキ

トリキ 夕夕ハル 鳥居忠春 忠政の第三子なり本名忠定初め主膳と稱す...

トリキ 夕夕ヒロ 鳥居忠廣 忠吉の第三子なり四郎左衛門と稱す...

トリキ 夕夕マサ 鳥居忠政 元忠の第二子なり新太郎と稱す...

トリキ

トリキ 夕夕ヨシ 鳥居忠吉 忠景九世の孫にして伊賀守と稱す...

トリキ 夕夕カラ 鳥居主税 陸軍歩兵少尉なり新編縣隊員として...

トリキ トシカタ 鳥居利剛 陸軍歩兵少佐なり東京府出身にして...

トリキ

トリキ ナリツグ 鳥居成次 元忠の第三子なり小字を久五郎と稱す...

トリキ モトタタ 鳥居元忠 忠吉の第二子なり小字は鶴之助...

トリキ ヒロシ 土居浩 陸軍歩兵少尉なり高知縣出身にして...

トリキ

村重を援けて上毛に入り又本多忠勝、平岩親吉と與に上総を向へ...

トリキ

日に鳥羽京師の買入佐野四郎右衛門と云ふもの元忠の首を竊みて之を智恵院中の長源院に葬る...

トリキ

進を命ぜられ明年二月出發す同十二月元老院議員に任じ十九年十月に叙せらる...

トキトキ

く所の墨竹の横巻を蔵す... 熟すと云ふ又筆札に工なり然れども...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

古河城に轉ず舊封を併せて十六萬二千石を領す... 六月連署を免じ大老職に補せらるる後...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

トキトキ

古河城に轉ず舊封を併せて十六萬二千石を領す... 六月連署を免じ大老職に補せらるる後...

トキトキ

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

ナ之部

トキトキ トシカツ 土井利勝 小字松千代姓... 源氏、土佐氏の庶流、土居貞秀の後小左衛門利昌の...

重任なり病に非ざれば不可なり... 重任なり病に非ざれば不可なり... 重任なり病に非ざれば不可なり...

ナカウチ ナカウチ ナカウチ... ナカウチ ナカウチ ナカウチ... ナカウチ ナカウチ ナカウチ...

ナカウチ ナカウチ ナカウチ... ナカウチ ナカウチ ナカウチ... ナカウチ ナカウチ ナカウチ...

ち獨り大洲に還り... ち獨り大洲に還り... ち獨り大洲に還り...

ナカエ ナカエ ナカエ... ナカエ ナカエ ナカエ... ナカエ ナカエ ナカエ...

ナカエ ナカエ ナカエ... ナカエ ナカエ ナカエ... ナカエ ナカエ ナカエ...

ナカカ

して孤孫百石を襲ふ世子の伴讀より監察に遷り先鋒隊長に轉じ大監察と爲る慶應三年冬大總督齋藤仁親王東征して江戸城に入る五月徳川氏の殘兵忠義兵三百餘人を率ゐて函嶺を侵襲す...

ナカカカヲウ 中嘉太郎 陸軍三等軍醫 鹿島島嶼出身にして明治三十七年日露戦役に於て豫備役より召集せられ第六師團補助輸卒隊附として従軍中...

包家の子建保承久年間の人なり(本朝鑑治考) ナカカネ 永包 備前福岡一文字派の刀匠にして文應年間の人なり...

ナカカ

進會等の備ある毎に審査官に撰ばれ或は賞を受くること數回三十二年八月十八日歿す年五十五 ナカカハ カツツグ 中川勝次 彫工なり...

隠れて俟つ果して彼軍騎にして來る因て不意を撃ち之を獲て歸ると村重其の膽の太きを感ず初め清秀名を書して其の故を妻に告ぐ...

住し文政十年地を深川扇橋に買ひ始めて和製の唐紙を造り又た從十間横五間の紙を製し寶業紙と曰ふ天保元年十月歿す年六十八(武江年表) ナカカハ カツツグ 中川勝次 彫工なり...

ナカカ

康秀忠に仕ふ子左平太直長父の業を繼ぎ家光に仕ふ會孫重興御衛を以て名あり(武術流祖録)
ナカガハ シトツ 中川子訥 甲斐の人なり名は訥、子訥は其の字なり子訥幼にして杉浦謙に從ひて學び記誦敏捷秀麗を以て愛せらる慶應二年歳甫て十九其の秋試に應じて及第四年慶應館學頭に任せらる明治元年青英寮長兼助教に轉じ朝日を生徒を率ふ而して教育方あり是の時に方りて政令日に新にして舊習を濯ふを務む子訥奮然として曰く精を句讀に糜し見聞開里に限るは丈夫の爲さざる所なり吾當に名儒巨匠に師事して以て我が業を淬磨すべしと乃ち決然職を辭して東京に遊び川田龜江の門に入りて精苦研勵し其の業大に進む子訥嘗て經濟學の要旨は實踐に在るを聞き遂に同學と總論辯論等諸國を歴遊し山川を跋渉して民俗を遍覽し文人學士と討論唱酬し大に得る所あり明治四年十一月六日陸の金華山に遊びて海を望觀し巖上忽ち狂瀾の爲めに捲き去られて歿す時に年二十四なり(招魂碑)

ナカカ

ナカガハ シュンダイ 中川駿臺 江戸の儒者なり名は忠英、字は士雄、飛騨守と稱す幕府に仕ふ寛政時代の人なり舶來書目、清俗紀聞、御系譜略、編政年表、樹庭記等の著あり
ナカガハ シラウ 中川二郎 海軍少尉なり石川縣出身にして明治廿七年八月日露戰役の際に軍艦平遠に乗組み従軍中廿七年九月十八日旅順口附近渤海沖に於て平遠沈没の際戦死す戦功に依り勳六等功五級に叙せらる
ナカガハ スキゲツ 中川醉月 詩人なり長崎の人、吉村廷齋の門人(詩山堂詩話)

ナカカ

ナカガハ ヒヂナリ 中川秀成 清秀の二男なり小兵衛と稱す兄秀政朝鮮の役に死す秀吉秀成をして家を嗣がしめ三木城邑七萬石を食む是歳大友義統軍ありて國除かる秀成封を豊後竹田に徙して七萬石を食む從五位下に叙し修長大夫と稱す文祿四年朝鮮に入り明兵と戦ひて傷り慶長庚子の亂を東歸して返りて隣敵と戦ふ十七年四十三にして卒す子久盛嗣ぐ(野史)
ナカガハ ヒデマサ 中川秀政 清秀の長子なり藤兵衛と稱す織田信長の女を娶り三木の城に居る右衛門大夫に任ぜらる豊後秀吉に從て根來の僧徒を討つ又從て島津北條氏を征す朝鮮の役王城を攻む秀政奮力あり勇を恃みて自ら警めず一日出て、狩す鷹の爲に射られ創癒えずして死す年二十五なり秀吉書を移して其の輕忽を責め封邑五萬石を削り弟秀成をして其の後を嗣がしむ(野史)
ナカガハ ヨイチ 中川與一 陸軍歩兵少尉なり石川縣出身にして明治廿七年八月日露戰役に於て豫備隊より召集せられ歩兵第七聯隊附として従軍中廿七年十月十日旅順要塞盤龍山戰團の際負傷し同十六日揚家屯第九師團第一野戰病院に於て死す戦功に依り勳六等功五級に叙せらる
ナカガハ ヨシカツ 中川義克 彫工なり俗稱は甚兵衛作州津山の人なり(藝館寄寶)

ナカカ

譽を患ふ百方致なし主僧之を學漢に託す學漢一日僧を誘ひ引て湖岸に至り執へて之を樹上にて縛り童僧呼哀を乞ふ主僧大に驚き走て之を救はんとす學漢笑て之を止めて曰く是れ賢物生て益なし死して魚腹に葬らるはと即ち腰刀を抜き進て之に擬す童僧固苦惱して一時氣絶す乃ち解き下し藥を授じ且之を按摩す是に於て筋脈通暢歩趨常に復す學漢嘗て曰く予は法を使ひて法の爲に使はれず故に能く仲景を臣とし仲景の臣とならず世の仲景を奉ずる者其の精細を管め甘じて之が奴僕となる宜べなり古人に超乘して之に加る能はざるあり學漢に謂て曰く寡君穢年の沈痾一朝洗ふが如し理誠に厚惠を荷ふ然れども腸胃新に劇薬を受く今より後宜しく調養を加ふべし願くは其の藥方を請かんと答て曰く學漢は醫なり唯々藥石を以て疾を治す可きを知る未だ其の能く人を養ふを知らず然りと雖も方あり試みに之を陳ぜん夫れ飲食を節にし起居を時にし而して氣鬱滯せず脾胃を養ふ所以に非ずや少艾を遠け淫佚を警しめ而して精慮耗せず心腎を養ふ所以に非ずや輿輪を厭はして才其旁に在り輔弱を納用して謙邪跡を絶つ耳目を養ふ所以に非ずや夫れ聰明外に蔽はれず心腎内に安んじ四體營長す調養の方此の如きは如何ん侯之を聞て善しと稱す著はす所生堂養生論、醫談あり又た生堂堂釋記あり門人保木和の輯録する所なり(皇國名醫傳、鑒定便覽)

ナカカ

ナカカニ 仲國 紀伊の刀匠にして古刀の作者なり或は云入鹿に住す永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)
ナカカニ 長國 越後村山の刀匠にして元祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)
ナカカニ 長國 初名安廣三好氏にして宗左衛門と稱し又藤四郎と稱す安藝廣島の刀匠常慶の子なり伊豫松山の城主加藤侯の刀匠と爲り文祿中主に隨ひ朝鮮に航し其業大に行はる寛永四年主家封地を奥州會津に徙すに及び亦隨ひ移り八年に歿す子孫其業を傳ふと云ふ(古今鍛冶銘早見出、寛政武鑑、古今鍛冶備考)
ナカカニ 長國 伊豫松山の鍛工なり後ち朝前中津に住す或は曰く會津の長國も同人なりと(本朝新刀一覽) 又曰く元祿州の人常慶の子初の名は安廣加藤嘉明に仕へて朝鮮の役に從ふ寛永中主會津に改領の時亦た從ひて往く中津の長國は別人なりと(古今鍛冶銘早見出)
ナカカニ 長國 豊前中津の刀匠にして寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)
ナカカニ 永國 豊前の刀匠にして建武比の人なり(古今鍛冶銘早見出)
ナカカニ 永國 播磨法城寺河内守と稱す武藏江戶の刀匠にして梅山勘左衛門と稱す國正の門人なり後出羽秋田に移る元祿年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ナカカ

ナカカニ 大國 大和の刀匠にして永延頃の人亦京に住す或は云天國の一畫欲損する者を誤認めて大國と爲すに非ざる乎と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)
ナカカニ セキスキ 長久保赤水 水戸藩の地理學者なり名は玄珠字は子玉、赤水は其の號源五兵衛と稱す水戸赤濱村の人、人ととなり坦易洒落言語諷刺、學極めて該博最も地理學に長ず和漢地圖及び地理志數種を著す皆我が國以前に有らざる所なり
又詩文を善くす磯原村の漁民漂流して安南に至り送られて回りし時其迎として長崎に往き來船の清人と往復せる清様唱あり又長崎行役日記あり其後那那行皆川教純の推察に依り召されて文公の侍讀となりて江戸の邸に在り曾て大能牧の撰れて野馬邊山し田禾を著することを言上し容れられて牧を廢せらる、事あり獻替の功亦少からずと云ふ常に好みて他の儒士に交る又善く後生を誘掖す藩の制交年老て致仕すれば其の子庶士に列せらる、法なるも辭して赤濱村の郡士となる文公嘗て駕を其の赤濱の松月亭に枉げ家屬子孫に至るまで諷を賜ふ赤水之を榮とし松月亭寄題の詩を四方に讀て多く之を集む晩年に至るまで文人才士と交る樂み久く江戶に在りしが其の後舊里に歸りて享和元年七月廿五日年八十五にして歿したり著はす所清様唱和長崎行役日記の外に日本地理誌、日本地理考、日本輿地路程全圖、王制地圖、唐山古今沿革圖、萬國地球圖說、清國輿地全圖、朝鮮全圖、琉球全圖、蝦夷松前全圖、關東海道考、關西海道考、東夷紀行、長崎紀行、安南國漂流記、清世雜語、續諸家人物志、善書紀聞)
ナカカニ シン 長倉訥 日向國楠原村の人なり鹿兒島縣の屬官に任じて宮崎に在り俄に大山綱良より四國陸運將に東京に事あらんとすと其の書を讀て即ち之を石川駿將に附して飲肥に遣りて士民を煽動し且つ大内職をして領りに之を促す伊東直記小崎新五郎皆應ず已にして綱良沿道の諸縣に專使を發するに方り亦命を受け山口兵庫の三縣に赴き晝夜兼行して久留米に抵り終に警察官の爲めに捕へらる(西南勇士傳)

ナカカ

ナカカニ キヤウ 仲子岐陽 儒者なり名は山崎字は士路通稱は文右衛門岐陽は其の號なり山崎周南の門人明和二年六月二十五日歿す年四十五(書畫便覽、名人忌辰錄)

ナカコ

高橋 其の號、初め江橋五郎と稱す。陸中の人、俊邁にして...

ナカサ

耕石に受け嘗て清國に遊び六法を研鑽して技大に進む...

ナカサ

ナガサキ タカシゲ 長崎高重 次郎と稱す。高貴の子なり。...

ナカサ

ナガサキ ブノスチ 長崎文之助 陸軍歩兵大尉なり。...

ナカサ

ナガサキ センケン 長澤潜軒 京都の儒者なり。...

ナカサ

ナガサキ ダウジユ 長澤道壽 醫者なり。...

ナカサ

ナカサ

ナカシ

中倉借りに此に露居し... ナカサハ トモヲ 長澤伴雄... ナカサハ ノリヨシ 長澤短景... ナカサハ マツタヒラ 長澤松平... ナカサハ ラウラウ 長澤樂浪... ナカサハ キヨフサ 中島清房... ナカサハ ケイイチヲウ 中島敬一郎... ナカサハ ケイキ 長島經維... ナカシマ クラウヂン 中島黃山... ナカシマ ケンキチ 中島謙吉...

士なり名は... ナカサハ ロセツ 長澤蘆雪... ナカシマ アンリヨウ 永島安龍... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門...

果して如何と佐渡乃ち之を首背し... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門...

ナカシ

ナカシ

ナカシ

に在ること數月... ナカシマ カンザエモン 中島勘左衛門... ナカシマ キヨフサ 中島清房... ナカシマ ケイイチヲウ 中島敬一郎... ナカシマ ケイキ 長島經維... ナカシマ クラウヂン 中島黃山... ナカシマ ケンキチ 中島謙吉...

兵少尉なり東京府出身にして明治廿七年日露戦役... ナカシマ ケンキチ 中島謙吉... ナカシマ ケンキチ 中島謙吉... ナカシマ ケンキチ 中島謙吉...

果して如何と佐渡乃ち之を首背し... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門... ナカシマ サブエモン 中島三甫右衛門...

ナカシ

ナカシ

ナカシ

ナカシ 中島名左衛門 中島信行 衆議院議員 第一の議長なり高知藩士にして弘化三年八月土佐に生る...

ナカシ 中島米華 豊後の備前守なり名は實字は子玉昌平豊に學び佐伯藩に仕ふ...

ナカシ 木鶴命を奉ぜず榎本武揚等と謀りて回陽回天諸般を率ゐ東奥に走る會津陷る等て函館に航し官軍と戦ひて之...

ナカシ

ナカシ

ナカシ

ナカシマ ライシヤウ 中島米章 畫家 なり字は子慶江と號す大津一人後京都に住す初め...

ナカシマ ヒコサブラウ 永島彦三郎 陸軍歩少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年八月...

ナカシマ ヒコサブラウ 永島彦三郎 陸軍歩少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年八月...

ナカタ

臨して文莊と曰ふ(近世發語、鑒定便覽)
ナガタ クワコフ 永田鶴國 播磨赤穂の俳人なり...

ナガタ クワンガ 永田觀鶯 平安の書家なり又詩を善くす名は忠原字は俊平...

ナガタ タクシ 中田慶治 コウナンテイ カラチチ

ナガタ タンセイ 永田健正 舊姫路藩士なり河合忠兵衛と同じく國事に奔走...

ナガタ コウセン 永田楊船 禪僧なり長崎の人名は道號字は萬門...

ナガタ タクシ 中田慶治 コウナンテイ カラチチ

ナカタ

推さる文久二年黄檗山に入て子弟を教導するも四年爾來近畿東海の間を往来して...

ナガタ サキチ 永田佐吉 德行家なり美濃竹鼻の人、幼にして父を喪ひ...

ナガタ ヒロシヲウ 中田博次郎 陸軍少佐なり...

ナガタ ヒロシヲウ 中田博次郎 陸軍少佐なり...

ナガタ ヒロシヲウ 中田博次郎 陸軍少佐なり...

ナガタ ヒロシヲウ 中田博次郎 陸軍少佐なり...

ナカタ

ナガタ セイカ 永田西河 書家なり名は忠成字は伯行...

ナガタ ゼンキチ 永田善吉 洋書家なり岩城國須賀川の人...

ナガタ ゼンサイ 永田善齋 和州侯の儒官なり...

ナガタ マサズミ 永田政純 長門藩の士なり...

ナガタ ヤウアン 永田養安 儒者なり山崎闇齋の門人...

ナガタ レンペイ 永田廉平 舊彦根藩士なり...

ナカタ

ナガタ チュウジ 永田忠治 陸軍歩兵中尉なり...

ナガタ ツネエモン 中田常右衛門 浪子兵介を復せんと欲して其の爲めに反撃せらる...

ナカタ

ナガタ ブジヲウ 永田武次郎 海軍大尉なり...

ナガタ キクイ 永田維馨 伊勢安濃津の人なり...

ナカタ

ナガタ ブゼン 長田武禪 大阪の畫師なり...

ナガタ マサズミ 永田政純 長門藩の士なり...

ナカチ

越師の門に小野田東と云ふものあり尤も其の妙に...

助寺島陶藏等の諸士皆親交あり維新の際延年東西に奔...

る會と池田輝政及び其の弟長吉兵を率ゐりて之を圍...

ナカツ

義の子延文年間の人なり或は云長義の門人にして康暦...

志士なり初め名を高橋孫太郎と稱し但馬出石の藩士吉...

間の人なり(古今鍛冶録早見出)

ナカチーナカツ

ナカト

ナカツーナカシ

ナカト

ナカネ

ナカネ ブンボウ 永根文峯 江戸の書家

ナカネ ホウカ 中根鳳河 名は龍、字は伯綱、近江の儒者にして物茂卿に學び膳所藩に仕ふ論語漢訳、論語圖説の著あり

ナカネ マサキチ 中根正吉 陸軍歩兵中尉なり千葉縣出身にして明治三十七年八月日露の戦役に於て歩兵第二聯隊附として従軍中三十八年三月九日清國遼東省田義屯附近に於て戦死す戦功に依り勲六等功五級に叙せらる

ナカネ ユキエ 中根雪江 越前家の臣なり名は師實通稱貞雪江は晩年號する所なり其の先従五位下讃岐守正忠より出づ曾祖兼光、祖父久、父兼光、雪江天資沈鬱寡言にして才を愛し之を容る其の身を處する節儉自守り粗衣粗袴のく非ざれば換へず性學を好む書に於て幾はざるなく尤も心を邦典に留む壯年友を以て遊び平田篤胤を師とし従遊年あり喜んで尊王の說を主張す後劇戰に在りとも鎧鎧色なし其の詞賦唱和は直ちに詩賦を吐き雖も鎧鎧事せず嘉永六年夏六月利加合衆國の使節浦賀港に至り通商を要求す邊境幕府列藩に命じて防衛を議せしむ時に雪江江内に在り當路の人にして諸藩に雪江利害得失を詳述して遺す所有の無く其の言皆實際に中る應に者歎服せざるなり其の名益々世に顯はる慶應の末年幕府遷政の議起る延談列侯及び志士諸藩に徴集し通見を問ふ時に雪江亦た徵されて參與に拜す明治元年正月雪江と爲り歴々京阪の間に往來し庶政を料理す尋て購置租稅等の事務を管し皆始めて端緒に就く其の職を罷めて二年還るや尋なく龍顏を拜し賞賜するに物を以て二年九月末に勤して祿四百石を賜ふ三月四月藩侯亦た賞典銀百五十石を頒給す是に於て田宅を城北坂井郡に買ひて投老の地と爲す暇あれば即ち山に弋し水に釣る優游自適復た世務の何物たるを知らざるが如し十年春上京して恩を謝し死す東京に來り留まるを經月十年春上京して恩を謝し死す事聞す内廷賞賜の餘金若干を賜ひて祭祭を助く雪江好て實學を講じ温養深遠明時に遭遇して之れを事業に施し終に其の功を成す死すとも餘榮ありと謂ふべし

ナカネ イチヂラウ 中野市治郎 陸軍歩兵少佐なり長野縣出身にして明治三十七年八月日露戦役に於て近衛後備歩兵第二聯隊附として従軍中三十七年十月十二日清國遼東省大嶺戰團の際負傷同日梨樹勾等功五級に叙せらる

ナカネ イチラウ 長野一郎 勤王家なり河内國錦部郡長野村の人家に生れ父は姓は吉井氏は實道義道と稱す後姓名を改めて長野一郎と呼び風光に勤王の志を懐き諸有志に結ぶ文久三年八月中山光兵衛大和に學ぶに先づ其の謀議に與り諸處に戦ひて功あり終に捕へられ京都の獄に下り元治元年七月十九日斬らる明治三十五年十一月朝廷其志を追賞し特に正五位を贈らる(甲子殉難士傳)

ナカノウチ 中内樓堂 儒者なり名は守子五郎伊勢津の人家に生れ父は姓は吉井氏あり國校有造館の教官なる維新後三縣中學校の漢學教師となる明治十三年三縣縣下御巡幸に際し其詩

著はす(諸家人名辭書) ナカノ クンクワン 中野君親 名は微矩、平馬と稱す近江の人にして彦根藩に仕ふ和漢歴史捷録撰者等の著あり

ナカノ ゴイチ 中野梧一 大阪の豪商なり本姓齋藤氏幼名達吉もと幕府旗下の士なり父を齋藤嘉兵衛と稱す天保十三年正月江戸馬喰町の家に生る長じて文武の道に通じ天文地理算術に通ず事五十五にして職を評定所留後に奉ず當時會々外國交通の事起り鎖國の説海内に驚たり梧一群議を排して外國通商の利を説く文久二年六月幕府兵を發して長州を征す梧一從て數々戦地に臨み身に數創を被る徳川の末途將軍に從て大阪に在り嘗て征長の役に呼ばる年輪二十六六六と謂るに氣慨愛すべし其名を問へば藤田傳三郎といふ長州の人なり幕府征長の役幕軍と戦ふて功あり賞せられず怒りて國を去る不幸にして眼疾を病み落魄此の如し梧一其志を憫み多く資を與へて眼疾を療せしむ明治元年伏見開關の時梧一激戦力を盡し又江戸に來り彰義隊に加はる五月十五日官軍上野を陥れ幕兵敗れて東奥羽の野に逃る梧一轉戦數月終に榎本釜次郎大島圭介等の軍に箱館に投ず二年五月主將榎本以下降て平定に歸す梧一榎本等と共に江戸に送らる獄に下り三年三年特典を以て其罪を免さる梧一の獄を出るや從弟中野勝の静岡に在るを尋ねて其籍を其家に歸す此に於て齋藤の姓を改めて中野と稱し達吉の名を改めて梧一と呼び日夜洋學を講ず且謂へらく亡國の遺臣力を當世に盡さんと欲せば須らく民間にありて實業に従ふに如かずと深く暗晦し群書を涉獵して海外の事情を窺ふに如かず風流自から樂しめ就して塵埃仙人と云ふ時に七年十一月朝廷梧一を徵して山口縣令に任す梧一事の意外に驚くといへども直ちに任所に赴く治道甚だ明かなり八年六月始めて地方官會議を東京に開く梧一上京議席に列し常に議論を上下し英名益々高し是より前山口にあるや一日街市を過ぐ路傍に一醉漢の露臥するを見る疑視すれば嘗て有馬の温泉に於て金を奪ひて將來を戒め

ナカノ

ナカノ

ナカノ

ナカノ ゴラウ 中野五郎 陸軍歩兵少尉

ナカノ シンヤウ 中野信陽 海軍大尉なり舊佐賀藩士原姓藤島氏名熊三郎と稱す後同藩中野次郎助の家を襲ぐ明治四年藩費學生七十名中より選抜せられ東京に遊學し近藤眞琴の塾に學び翌五年一月海軍砲術生徒を命ぜられ教師アシケラレに就て學ぶ滿五年明治十年二月海軍少尉補と爲り十一月五月初に艦隊に乗組み爾來渡邊富山山龍驪清葛城金剛天龍等の艦艇に乗し十二年三月花房代理公使護衛として韓國に回航し十二年九月海軍少尉に任ぜらる十六年十一月中尉に進む十七年朝鮮事起るや龍驪分隊長として派遣せられ十九年七月大尉となる後海軍兵學校教官及び海軍兵學校監事を兼務し廿五年五月勲六等に叙せらる二十六年四月金剛砲術長兼砲術教官となり二十七年四月生徒練習習遠洋航海の爲め布志ホル、港に着するや俄に歸朝の命あり蓋し日清事起るに就てなり横濱に歸するや直ちに西海艦隊旗艦金剛砲術長に補せられ第二軍皮子富及び築城等に上陸の際之を掩護し又た金州城金山寨の砲撃に殊功あり二十八年一月海陸軍相合して威海衛を攻撃するや劉公島砲臺殘燄數隻積頭強に抵抗し孤立死守容易に陥落せず苦戰甚だ力めたりこの役遂に敵艦に中り戦死す年四十時に二月十一日なり

ナカノ シウチウ 中野修竹 儒者なり名は安維漢路三原郡伊加利村の里正なり學和漢を兼れ餘技點茶園藝俳諧に至るまで通ぜざるなり又地理を好み竊かに朝鮮琉球に遊びて歸る安永七年十一月歿す年八十五淡路踏盤草等世に行はる(安富治 伊勢の儒) ナカノ シコウ 中野子興 伊勢の儒なり名は正興山本北山の門に入り儒を以て業とす藤堂出雲に仕ふ文政十二年九月十四日歿す年六十五津の天然寺に葬る著す所尊孟後辨業堂集あり其の交遊する所大窪民興池五山堂等皆其の詩の巧妙なるに推服すと云ふ

ナカネ

ナカネ

ナカネ

ナカネ ヨネシチ 中根米七 岩代會津の人なり始め前原一誠亂を起すに聞かぬや永岡久茂等と共に謀りて千葉縣廳を襲ひて逃かぬに應ずんとし事願て警視廳と東京の思案橋に戦ひ克たす逃れて海老原の家に匿る程は薩摩の人なり桐野利秋等と交り善し故に程の書を傳得て薩摩に奔り利秋に投ず翌年隆盛起るに及びて本營附の兵士となり屢々出でて戦ふ因て軍功あるを以て一隊の長に擧げられたり隆盛に從て再び鹿兒島に入り城山階るの前日桐野官軍の圍みを知り奮伏夜行して若代國福島に到り警察官の爲めに知られて遂に捕へらる亦た之れを脱して會津に奔り村松村に入らざるも知り遺書を作りて日く履き事謀るを謀る死を遺るは怯夫に似たりと雖も一隊死を決するは吾志に非ざらんれども今日其の効なくして事此に至ると終に割腹して死す實に明治十一年八月二十三日なり(西南勇士傳)

ナカネ カタアキ 中野賢明 金工なり田中清壽の門人(古今金工便覽) ナカネ キケン 中野篤謙 關宿侯の儒官なり名は繼善字は完謙操謙は其の誠善助と稱す長崎の人、母は大原氏、林道榮の妻と兄弟なり操謙幼にして父を喪ひ母と同居道榮が家に寓す道榮之を見る猶ほ子の如し自ら之に句讀を授け又た書法を教ふ七八歳にして誦讀既に遍く時、道榮に代りて四書小學等を講ず其の談論始んと老成人の如し三十二歳にして書を著す最も草隸に巧みなり人之を林氏の神童と呼び敢て名を呼ばず年弱冠始めて江戸に來り廣く諸名士と交りて益々習學す遂に儒居帷を垂れて教授す後關宿侯(牧野氏)聘して文學と詩を講ぜしむ是より諸侯及び貴人公子の門に遊びて教誨を受く寶永の初年關宿侯封に參州吉田に移す是の時操謙致仕して京都に徙り徒を聚めて教授す居ること二年餘にして再び江へ來りて江戸郡に居住し享保五年七月二十日歿す年五十四深川六軒堀津寺に葬る操謙程朱を墨守して堅く其の説を信ず嘗て山鹿素行が聖教錄を著して宋儒を排駁するを以て異端の巨魁と爲して一たび其の門に入るものは棄りて教を請ふと雖も峻拒して容さずと云ふ記述頗る多し未だ書を成さずして同様に罷る故に傳はらず(先賢叢書、鑿定便覽)

ナカネ キメイ 中野其明 畫工なり坊琳堂と號し晴々齋と號す鈴木其一の門人にして善く師法を守る明治二十五年五月歿す年五十九尾形流翠印譜を

ナカネ シンヤウ 中野信陽 海軍大尉なり舊佐賀藩士原姓藤島氏名熊三郎と稱す後同藩中野次郎助の家を襲ぐ明治四年藩費學生七十名中より選抜せられ東京に遊學し近藤眞琴の塾に學び翌五年一月海軍砲術生徒を命ぜられ教師アシケラレに就て學ぶ滿五年明治十年二月海軍少尉補と爲り十一月五月初に艦隊に乗組み爾來渡邊富山山龍驪清葛城金剛天龍等の艦艇に乗し十二年三月花房代理公使護衛として韓國に回航し十二年九月海軍少尉に任ぜらる十六年十一月中尉に進む十七年朝鮮事起るや龍驪分隊長として派遣せられ十九年七月大尉となる後海軍兵學校教官及び海軍兵學校監事を兼務し廿五年五月勲六等に叙せらる二十六年四月金剛砲術長兼砲術教官となり二十七年四月生徒練習習遠洋航海の爲め布志ホル、港に着するや俄に歸朝の命あり蓋し日清事起るに就てなり横濱に歸するや直ちに西海艦隊旗艦金剛砲術長に補せられ第二軍皮子富及び築城等に上陸の際之を掩護し又た金州城金山寨の砲撃に殊功あり二十八年一月海陸軍相合して威海衛を攻撃するや劉公島砲臺殘燄數隻積頭強に抵抗し孤立死守容易に陥落せず苦戰甚だ力めたりこの役遂に敵艦に中り戦死す年四十時に二月十一日なり

ナカノ

ナカノ

ナカノ

ナカノ シンワウ 仲野親王 桓武帝の第...

ナカノ スケミチ 長野祐通 唐鹿島藩...

ナカノ セキヲウ 中野領翁 播磨守と稱...

ナカノ シヤウキチ 中野英吉 陸軍歩兵...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ タマキチ 中野玉吉 陸軍歩兵少...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ シンゼン 長野主膳 佐幕家なり...

ナカノ

ナカノ

ナカノ

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ ナリマサ 長野業政 或は業向に...

ナカノ

其上書而言議者、侯之手管具在焉、可二種視也、既去...

ナガノリ 長則 備前の刀匠にして弘安中福岡...

ナカノ 備を以て業とす書を善く深く古人用筆の妙を得たり...

ナカノ

ナカノキーン ミチカツ 中院通勝 權大...

ナカノキーン ミチメ 中院通躬 通茂の...

ナカノ 初め篤助と稱す原は泉州一向宗の僧なり...

ナカノ

ナカノ

ナカハ

り少く貯蓄を得たり寅右衛門傳藏五右衛門は共に布哇にあり重助は死す萬次郎布哇に至り郷に歸らん事を三人に勸む寅右衛門曰く傳藏五右衛門去年歸國を企てて松前近傍に至り而して果さず余輩に歸るも亦意外の妨害あらんを保せず吾は此島に死せんと乃ち寅右衛門を止めて二人と歸國の便を待つ此の間歸國の資として米人の金穀物品を贈るもの多し乃ち米國船サラハイド號の船士より清國に航するを頼み之に便乗し短艇一隻を購ふて之を携ふ嘉永三年十一月下旬サラハイド號の船を下し三人之に駕して津浦のある處に向ふ船將ホイツトモル達かに之を望み若し岸に達する能はざるあらば爲に再び船に助け乘らしめんとし帆を駐めて待つ事數時其恙なきを見て去る三人辛うじて艇を麻文仁問の港に寄せ人家を尋ねて往く日本語を忘れて官語通ぜず那新より官人來るあり一民家に寄寓して之が糾問を受く七月十一日薩の官人の命あり三人を那新に送る琉球王の待遇頗る厚し琉球に在る事六月是の月三十日薩に召して海外の事情を問ふ萬次郎米國の慶遇を蒙る俟自ら至る八月朔鹿兒島に入り薩侯齊彬の平等主義を説き揮る所なし是より長崎に送られ給踏の式を行ひ了つて儀式的に三月間の入牢を命ぜられ五月六月二十五日土佐の使者に從り船に駕して長崎を發し三十一日高知に還り十五日家に還る様子相抱ひて流涕す已にして俟より縁を賜ひ徒士格に準じ翌年幕府に召され御普請役列し縁二十餘人扶持を賜ふ當時實に異數の事たり時に米國使節彼理浦賀に來る萬次郎江戸にあり使臣獻する所の書信を讀み又會て捕鯨業の海員養成に必要なるを述べ幕府に建議す安政六年幕府萬次郎と親月大泉甲斐直次郎とに命じ露國が獻する所の君澤形一審御船に駕して品川を發せしむ小笠原島に至る頃大風起り船を破り棄成らずして歸る又軍艦操練所の教授を司る萬延元年正月外國奉行新見豐前守等米國に使者萬次郎從り歸途布哇に寄港し九年前の舊知に會して嗜好を語る歸朝の後文二年再び幕府の命を受け一番丸の船長となり捕鯨に出づ小笠原島に於て二尾を漁し船業を進めんとするの際同島に於て雇入れたる外國人スミス陸上の黨と共謀し本船を掠奪せん

ナカハ

とするに會し直ちに之を捕へたが捕鯨を停めスミスを護送して浦賀に歸る元治元年薩侯齊彬に請ふて萬次郎を鹿兒島に聘し軍艦操習及英語の教授を委託す慶應三年歸り明治元年高知藩に召され新百石を賜ふ慶應寺と歐洲に赴き普佛交戦を見る途に病て英國より歸る歸途米國のホキトフィールドを省し又布哇に寄港して歸る明治五年以後病あり三十二年十一月十二日卒なり竹洞の子名は成業字は新交奇行多し慶應三年四月二十二日歿す年五十二

ナカハ

從者後より刺て之を殺す幸信達其の屋を毀ち其の弟刑房を縛し其の首を車前に置きて還る道路觀る者皆な快と稱す(大日本史)

ナカハ

衛きたりと云ふ(本朝書史)

京師に卒す年六十六(大日本史)

ナカハ

(工藝志)

ナカハ

ナカハ

享保年間の人なり(古今鍛冶録早見出、古今鍛冶備考)
ナガヒサ 長久 對馬の刀匠にして亦豊岐にも
ナガヒサ 永久 備中の刀匠にして貞應年間の
ナガヒサ 長久 備中の刀匠にして貞應年間の
ナガヒサ 永久 備中の刀匠にして貞應年間の
ナガヒサ 長久 備中の刀匠にして貞應年間の

年間の人なり(長久は即ち是なり或は云行助の子
ナガヒサ 長久 對馬の刀匠にして亦豊岐にも
ナガヒサ 永久 備中の刀匠にして貞應年間の
ナガヒサ 長久 備中の刀匠にして貞應年間の
ナガヒサ 永久 備中の刀匠にして貞應年間の

ナガマツ 長正 周防の刀匠にして二王を冒稱
ナガマツ 長正 周防の刀匠にして二王を冒稱
ナガマツ 長正 周防の刀匠にして二王を冒稱
ナガマツ 長正 周防の刀匠にして二王を冒稱
ナガマツ 長正 周防の刀匠にして二王を冒稱

ナカヒ

ナカヒ

ナカマ

三年元老院の廢止と共に錦旗間祇候を命ぜらる又勤功
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中

其法漸く亂れて直垂を用ふるに至り獨り宜風疎微な
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中

十九哩の大鐵道の經營に任ず一大抱負あるにあられ
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中
ナカマ トミシマ 中摩富能 陸軍歩兵中

ナカマ

ナカマ

ナカマ

ナガミチ 二世長道は庄右衛門と稱し會津に住す延寶年間の人なり...

ナガミチ 王の子也寛政九年三月生れ享和元年五月勤修寺を繼ぐ...

ナガミチ 長谷部氏にして三郎と稱す新藤五郎光の門人元應年間...

ナガミツ 長光 薩摩古刀の鍛工なり或は云ふ...

ナガミツ 式部民部二者の少録少内記を歴る資を以て外任を請ふ...

ナガミツ 光の門人にして建武比の人なりと(古今鍛冶録早見出)...

ナカミ

ナカミ

ナカミ

ナカミ

ナカミ

ナカミ

ナカム

間罪の師を起し列藩を率ゐ長藩に迫る無二乃ち月形洗...

ナカムラ イツツウ 中村一噌 一噌流

三代目中村歌右衛門の門人家名は淡路屋...

ナカムラ ウタジフヲウ 中村歌十郎

元祖 家名を加賀屋と稱し俳名を一先と云ふ加賀金...

ナカムラ ウタエモン 中村歌右衛門

大で入の處此の狂言中に贋物の類々に引籠り惜...

ナカム

納む誠に希代の稀人なりといふ寛政三年十月二十九...

ナカムラ ウタエモン 中村歌右衛門

三代 梅玉と號す初代の實子なり家名を加賀屋と稱...

ナカムラ ウタエモン 中村歌右衛門

大で入の處此の狂言中に贋物の類々に引籠り惜...

ナカムラ カウセキ 中村歌石 武州境

玉郡谷原村の里正にして俳諧連歌を善くす太左衛門と...

ナカム

なりて三日目より大入の札を掲げたり此の時梅玉より...

ナカムラ カズヒコ 中村一彦 陸軍歩

兵少佐なり福島縣出身にして明治三十七年八月...

ナカムラ カズヒコ 中村一彦 陸軍歩

固より敢て疎説を拂ふるの意なしや身病に罹りて嗣...

ナカム

前號魁香俳名を號せと云ふ實は江戸下谷孔雀茶屋の...

ナカム

大で入の處此の狂言中に贋物の類々に引籠り惜...

ナカム

固より敢て疎説を拂ふるの意なしや身病に罹りて嗣...

ナカム

ナカム

ナカム

ナカムラ カツエ 中村勝衛 陸軍歩兵大尉なり山形縣出身にして明治三十七年八月十九日清國遼東省青泥窪にて病に罹り同日九月六日同所兵站病院に於て死去す

ナカムラ カンザブラウ 中村勘三郎 (三代) 江戸の俳優にして且つ中村座主なり二代の三男なり幼名を長三郎と稱す延寶六年歿す(作者小傳、中村氏系譜)

名明石(作者小傳、中村氏系譜) ナカガワ カネサブラウ 中川龜三郎 棋客として名あり十二世本因坊の子なり天保八年江戸下谷車坂に生る幼名を長三郎と云ふ後龜三郎と改め尋いで中川氏を肩す本因坊秀和を師として二十歳の頃既に二三段の技あり安政四年和師として二十歳の頃既に五段慶應二年には六段に進む明治十二年地方選中の村瀬秀甫を招きて方面社を起し秀甫を推して社長と爲し櫻井龍雄を發行して毎月二回の手合を替りて之を圖棋新報と稱す十四年七月段に進み十九年秀甫の後を襲ひて社長となり門下多く俊秀を出せり三十一歳自ら老境に入るの故を以て社長を巖崎健造に譲りて退隠し八段に進む三十六年十月十三日神田區五軒町の自宅に逝く年六十七谷中墓地に葬る

ナカム

ナカム

ナカム

ナカムラ キチザウ 中村吉藏 陸軍歩兵中尉なり新潟縣刈羽郡柏崎町の人慶應元年二月十八日郡里同郡高田村字上方に生る明治十八年二月教導團に入り卒業後日清戦役に従軍して三十七年二月歩兵少尉に任ぜられ三十七年日露戦役を経て後備役より召集せられ第二師團後備歩兵第十六聯隊附として出征し旅順攻圍軍に従軍せしが同年九月二十一日二〇三高地攻撃に際し決死隊を組織し猛火を以て高地を攀登し敵壘に達したるも敵砲に抵抗して被弾を蒙り一時後方に退き岩石の間を潜りて敵陣を避けしが既にして先任中隊長相尋で負傷せしかば自ら中隊の指揮を執りて更に激しく敵壘に突撃す第一壘を取り第二壘を占領せんとす太平洋東方高地に勇進する中敵砲が飛来して其前額を貫通せしが少尉に更に見舞はるるに昇國萬歳を三唱して後翌日午四時戦功に依り中尉に昇任し勳五等功五級に叙せらる

所作事大出来なりすべし所作事の名なり安永二年中の應にて女思信を名義として江戸へ下る其後京都へ戻り削髮して東山豊林寺の傍に住む書は能筆にして御家流なり安永六年七月終る(俳優世々の接木)

博洽多聞善く風流を操り温厚謙訪にして物と競ふことなし酷だ山水を愛し澹然自ら逸す尤も時に長ず江戸淺草八軒町妙寶寺に葬む(碑文、善善得聞、江戸名家墓所一覽)

ナカム

ナカム

ナカム

日英吉利國より歸朝す同年八月靜岡へ移住し静岡學問所一等教授となり同五月六月東京に上り大藏省翻譯御用を命ぜらるる同八月十一月東京女子師範學校攝理囑託...

三年正七位に叙せらるるより諸官を歴て内閣書記官長となり十三年元老院議員に任じ從四位に進む十七年工部少輔に任じまた議官に轉ず二十年七月三日特旨を以て從三位に叙せらるる是日病を以て逝けり

初め優人皆市井に雜居す官處く之を城南雜波新地に移す芝野に謂ふ是猶ほ吾輩の宜く居るべき所に非ざるなりと乃ち居を長街に移す長街は乞野の湖邊なり官之を義とし若くは干縵を賜ひて之を旌す芝野人と爲り高體巨眼其の演技酷だ父に背たり人にて梅玉の再生と爲す...

ナカム

ナカム

ナカム

彦三郎稱々芝野に及ばず以後新富座に出て又名古屋に遊び或は市村島越等の諸座に出づ廿二年十二月歌舞伎座の開くるや團十郎菊五郎は之に兼動す芝野は獨り新富座に専勤す廿六年岐阜多治見に於て法界坊を演じ...

江戶の俳優なり少長と號す元祖七三郎は二代目助三郎の親戚にして初め女形なりしが立役となり始めて淫技を演ず世に之を瀟事と稱す寛永中の名優なり二代目若す(俳優小傳)

助五郎と改む人の名を繼がずして大立者となりし事外に類なし俳優は魚樂實曆中歿す(燕石十種) ナカムラ スケゴラウ 中村助五郎(二代) 初代魚樂の男、初母方の姓を繼ぎ仙國助次と曰ひ...

ナカム

て雲和窓と曰ふ父名は喜本母は鈴木氏其先は勢州の人なり六世の祖民部國房相州梅澤新井の二城に據有し...

ナカム

の太夫元中村歌之助の弟子となりて名を中村歌女殿と呼ばれる愛に初め俳優の数に入り益々其技を勤む尾上...

ナカム

に八兵衛と改め約齋と號し漆敵と號す幾年詳かならず(中村系圖、工藝鏡)

ナカム

て宗治を召して自ら之を斬る宗治傷き走る近藤善右衛門撃ちて之を斃す宗治の侍童其の佩刀を把り進みて忠...

ナカム

専ら歴史を修む常に王家の式微を嘆き興復の志あり一日驟然家を出て姓名を不二一と號す元治元年松平頼...

ナカム

故來芝門人にて初風三吉といふ風五郎の弟なり安永天明の頃三枚目殿役に賣出し寛政二年終る(俳優世々の接木)

にして遊遊を好まず長ずるに及びて唯、篤實な務め淨
 隙を喜まず先世市中に住す然れども、獨善其の嗜を厭
 ひ幽地に遷居す常に門を杜ぢ心を學業に潜め文を讀
 書を論ずるの外放て泛交を爲さず性廉貞寡欲功名財利
 に於ては泊然たり買堅の間に生長すと雖も物微を知ら
 ず其の家世を豪富たり嘗て管領其の財を私を以て人の
 官に訴へんと欲す獨善不可として曰く私財を以て人の
 性命を損ふは不慈之より大なるはなしと是より家道日
 に衰ふ然れども亦た以て意とせず嘗て博學治聞天文地
 理尺度量衡の類皆能く通曉す而して尤も禮學に精し
 言語荷くもせず起所法に合ふ又た音律に審かなり其の
 發明する所當世の達者も雖も之に欽服す専ら性理の學
 を奉じ謙敬を以て本とす深く時輩の異説に渉るを非と
 す其の人を教ふる小學近思錄を以て之を開發し倦々老
 に至りて倦まざるに曰ふ吾れ厚く朱子の經説を信ず設
 ひ其をして講説あらしむるも朱子の爲めに誤らるゝ
 は敢て辭せざる所なりと又曰く經義を解説するは寧
 ろ低きも高くする勿れ寧ろ拙きも巧みなる勿れ研究訓
 拆務めて本旨を得るを以て要諦とす當時伊藤仁齋と
 名を齊す世人語て曰く楊齊兄たり難く仁齋弟たり難
 しと元禄十五年七月廿六日歿す年七十四歳はす四書
 鈔説、近思錄鈔説、周易程傳鈔説、西銘鈔説、性理字義鈔
 説、孝經示蒙句解、四書示蒙句解、詩經示蒙句解、小學
 蒙句解、近思錄示蒙句解、筆記周易本義、周易學啓蒙、同
 讀易要領、同書經集傳、同詩經集傳、同春秋胡傳、同禮
 集傳、同四書集注、同大學或問、同通書解、同四名解、同
 大極圖說解、同律呂新書、同欽定儀禮、易學啓蒙、同
 追遠統節、親尊服義、入學綱記、講學筆記、朱子爲學要
 旨、增補訓蒙圖彙、古今州郡圖、學制考、本朝學制考、百
 官稱呼、韻學和言、文集、日鈔、天文考、五緯行度、圖
 譜、三番通考、三器考略、醫方三器通制、律尺考、經、
 律呂新書、孝經集傳等あり(近世世語、先哲叢語、事實文
 編、近代名家著述目録、鑒定便覽)

在勤し續て各藩應接役となる同三年京師動搖す常に斥
 候或は使節を命ぜられ藩藩に通過す元治元年七月の變
 早く歸り報告す慶應元年六月藩事混雜に付藩情同九月
 獄に下るる條條を沒收し九月三十日死刑に處せらる後
 旌忠祠に祭り祭祀料を賜ふ(筑前殉難志士傳)

ナカムラ **デハノカミ** 中村出羽守初爲
 備と稱し後石見守と稱す安政四年四月期定時味役より
 下田奉行に移り米國總領事ハリスと應接し萬延元年
 閏三月尊請奉行となる元治元年五月佐渡奉行に轉じ慶
 應元年十月免ぜらる

ナカムラ **デンザウ** 中村傳藏(イチカ
 ハヤチザウ)元祖

ナカムラ **トシヤウ** 仲村斗鶴 豊後開藩
 の市人なり名は正道、字は文仲、田原屋彦七と稱す幼
 名梅之助、斗鶴幼にして其の父母を喪ふ伯父斗鶴を子
 とし養ひ家監をして先業を承けしむ稍長ずるに及び
 て別に産を割きて之に與へ妻はすに其の女を以てす斗
 鶴志氣高邁度量あり能く衆を容る未だ愠れる色あらず
 人の爲めに事を謀るを盡して區區成其の宜きを待
 て是を以て細曲の信任する所となり藩の有司斗鶴の才幹
 あるを知り公帑の積貯を假し封内の産物を買ひ之を大
 阪に賣り金銀に兌換して以て公帑に輸納せしむ斗鶴人
 と爲り數奇物を買へば價貴く賣れば價賤し故を以て交
 易する毎に損失甚だ多し累年負債數千金に至る故に還
 限盡くと市中の交易を擯せんと欲し還限を繰くするを
 設け以て斗鶴の交を擯せんと欲し還限を繰くするを
 連債を賣む親戚子弟之を如何とすも能はず既に於
 て斗鶴の資金大敗より斗鶴の獄に在るや時に狂歌に
 作りて自ら慰め神色泰然毫も憂色なし姓酒を嗜む飲む
 こと數升と雖も言笑平常の如し更に醉態なし人皆な
 之に服す文政六年歿す年六十病間親ら古人の語若くは
 詩を書して遊す斗鶴に數子あり長を善均と曰ふ少うの
 斗鶴を好まず喜びて野史を讀む手に巻を釋かす其の妻
 をせん若かず算を學ばしむるにはと斗鶴嘔ひて曰く唯

ナカム

ナカム

ナカム

南京編平次いづれも大當りなり其の外手代正八番頭傳
 八流川藤高暨坂内番頭善六の類は、お家の當時
 道化がたにては開山なりといふ(俳優世々の接木)

ナカムラ **トラジ** 中村虎二 陸軍歩少
 尉なり鳥取縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於
 し豫備役より召集せられ歩兵第四十聯隊附として從軍
 中三十七年八月三十日清國遼寧省早飯屯東南方高地に
 於て戰死す

ナカムラ **トラヲ** 中村虎雄 陸軍歩少
 尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於
 て歩兵第四十聯隊附として從軍中三十七年八月廿四日
 旅順要塞望臺に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に
 叙せらる

ナカムラ **ナカザウ** 中村仲藏(初代)
 俳優なり二世中村傳九郎の門人長唄の家中山小十郎の
 養子なり後俳優となる初代中藏と云ひ寶曆十年仲藏と改
 む安永九年座頭となり天明五年中山小十郎萬作と改め
 六年再び仲藏となる大阪に往き歸りて後寛政元年座
 居寛政より文化迄の浪芝居の座頭に於て大立者なり榮
 屋と稱す此人の通名を中藏とも又た白萬ともいふ或は
 曰く寛政二年四月二十三日歿す年五十五歳は之を以て
 六世仲藏となす後年いなりにて尾上徳三郎と云ふ役者
 あり仇名をつんば市といふ此の者仲藏の筋なりといひ
 て中村仲藏と名乗りいなり宮芝居ばかり勤めて終
 る(俳優世々の接木、俗耳鼓吹)

ナカムラ **ナカザウ** 中村仲藏(二代)
 前名大谷春次又た鬼治寛政六年初世秀鶴の養子となり
 二代目を相續して中村仲藏と改む八年十一月歿す年三
 十八(俳優小傳、役者大全)

ナカムラ **ナカザウ** 中村仲藏(三代)
 初代仲藏と曰ふも越後高田柳原侯の臣別所氏の子にし
 て十四歳の時五代目傳九郎の門人とて俳名秀雀と云
 ふ傳九郎の女を娶りて妻とす妻志賀山流の舞踏を善く
 す仲藏之を習ふに依り舞踏に妙なり文政元年初て場
 に出て安政元年名題に上り慶應二年三代目仲藏となる明
 治十九年十一月歿す年七十八

ナカムラ **ナホザウ** 中村直三 老農
 り大和國山邊郡永原村の人家素と貧なり直三少にして

心學を修め勤儉力作して敢て怠らず困りて家産漸く興
 る文久三年直三試みに其の種五斗餘を郡村に頒つ明
 乃ち同志者と相謀りて伊の種五斗餘を郡村に頒つ明
 治四年郡山藩の老農を會するや直三之に與かる時に藩
 密命あり藩に仕へて農師たらしむ直三辭して曰く父祖
 以來永原村の恩を受くる大なり而して未だ之に報ひず
 且つ夫れ身を藩に任せば功亦た藩に止らるる東西南
 北諸國の應に應じて廣く農業を勤むるに若かざるや
 と終に應ぜず蓋し其の村民の恩に浴すと云ふ者は直三
 の家世々行役の職にして村民の爲めに養はれ以て火
 盜を警むるを以てなり七年三月教部省直三を擯て少
 講義に任ず直三泰長縣令四條藩直三を擯て農務を
 任ず是より直三桑苗數萬株各郡に頒ちて養蠶を勤め
 又樹木を繁殖し或は道路を繕ふ十年東京に内國勸業博
 覽會の開設あり直三三種を出だして龍紋賞牌を賜は
 る十四年再び其の開設あり直三復た三種七百餘種種
 二十七種を出だす實に二十餘年の経験に係ると云ふ賞
 を行ふ及び有功二等賞牌を賜はる十五年東京に於て
 米麥大豆烟草菜種共進會を設く直三三種を精撰して之
 を出し悉く天覽を賜はりて御前に於て特別名譽賞牌
 及び金百圓を賜はる直三既に賜ものを祭る是より先
 歸り其の金を以て先哲の農功賜ものを祭る是より先
 き秋田、宮城、石川、大分等の諸縣直三を招聘して農話
 會を開き益を得ると云ふ十五年八月直三外より歸り病
 に罹り其十三日歿す時に年六十三旬田善福先登の次に
 葬る大阪府知事建野郡三計を以て農商務省に聞す聞
 くの悼惜せざるなし大日本農會頭北白川宮親王殿下賜
 を贈りて申慰す直三狀貌魁梧方面紫赤眼光人を射殺然
 として挽まざるの風あり音吐現々談論率れ人の意表に
 出づ平生書を讀まざりとも能く大義に通曉す人となり
 滑稽に巧にして能く人の頤を解く嘗て造物主、造物者
 作る成な勤儉忠厚の意を寓すと云ふ子直平嗣(評文)

ナカムラ **ナホシ** 中村直 陸軍歩少佐
 なり茨城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て
 近衛歩兵第一聯隊附として從軍中三十七年十月十三日
 清國遼寧省馬耳山附近戰闘の際負傷同十月十五日高力
 勾第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級

見の好む所に從ひて可なり壯なるに及びて會計に任
 ぜば己れ自ら之を學ばん今其の好まざる所を強るは勞
 して功なし且つ書を讀むは愚業に非ず措て問はざるべ
 しと善均是に由りて縱まゝに群籍を讀むを得幸に吾が
 邦の學を治むるに至ると云ふ(續近世世語)

ナカムラ **トミジフヲウ** 中村富十郎
 (初代) 元祖芳澤あやめの四男なり初め中村新五郎と
 曰ふ大阪女形の名なり延寶中の人(役者大全)

ナカムラ **トミジフヲウ** 中村富十郎
 (二代) 二代目富十郎の男にして京大阪江戸に開いた
 る女形の名なり俳號は慶子明和中歿す(役者大全)

ナカムラ **トミジフヲウ** 中村富十郎
 (三代) 三代目中村新五郎の門弟にして初名を熊太
 郎又三光又松江と曰ふ天保十年十四代富十郎の名跡を繼
 き慶子と改む甚だ長壽なり八十餘歳にして猶ほ場に登
 る世に難波の太夫と稱し文政天保中大阪にて女形の巨
 擘と稱せらる安政二年歿す年九十(俳優小傳)

ナカムラ **トモザウ** 中村友三(三代)
 二代目次郎三の門人なり文化の初め浪芝居へ出て坂藩
 が竹田芝居にて政岡と三田平にて大當りをせし時二九
 屋源右衛門を勤め見物に腹を抱えさせや角座にても此
 の役を勤めて大出来なり其頃北丸座といふ大西芝居に
 て故谷村八が桂川の長右衛門を演ぜし時つち長吉
 役大出来にて其後度々勤めしも常に好評を受けつち文
 化十一年角座にて朝鏡の狂言に萩の祐仙役末代家
 の狂言となる引つゞきい屋善吉にひきつり毛の喜太
 大あたりなり其外番頭善六、藤屋利兵衛の役はお家の
 株中興道化形の巨擘なり文政二年正月十四日を以て
 歿す年五十八(俳優世々の接木、俳優小傳)

ナカムラ **トモザウ** 中村友三(四代)
 三代目の實子なり幼名は直吉といふ後に桃三と改め大
 阪宮芝居へ出て夫より浪芝居にて賣出し天保卯年春目
 徳徳寛の引立にて角座へ出て坊主の役者にて祐仙の
 眞似して評判よく次に手代正八型辰年春は坊主の若松
 巳年春は中の座にて小ぐりの在原屋なり平何れも大出
 來是より名を上げ未年ば中の座にて種森兵内四年には

に叙せらる

ナカムラ **ナリチカ** 中村成近 紀州船
 所村の人なり源左衛門と稱す土功を以て名あり捕見、
 雜賀、貴志三莊の地たる鴨瀧川の西に在り東は船所
 より西は松江に至る南は伊海に瀕し北は市小路次郎丸
 に墾ふ村たる凡そ七ヶ村田にして旱すれば水車結繩
 以て田に灌ぐ罷露雨路身無難く雨生を頼んば水潦結繩
 浸して幾す所なし年率荒歉にして民生を聊んばず成
 近之を憂へ衆に謂て曰く斯の地に灌を穿て以て田に灌
 ぎ灌漑時を以てし夏秋雨を得て之を收めば旱に枯槁の
 勞なく雨に水潦の患を免る此れ萬世の利なり今有る所
 の六堰築口は若手に發して船所に止るに續て渠を穿
 たば力勞せずして功成り易し用者きて利を得ず事此より
 便なる者あらずと衆感喜す然れども其の役の大なると
 官許の得難きを以て遂に許さず成近獨り奮て願ふず
 單身府に趨て其の利害を陳じ其の施設の方を述べ能は
 ず掌を指すが如し然れども未だ敷く許可を得るは
 ず頼りに苦請すること三歳終に官許を得是に於て成近
 をして役を奮せしむ其の高下の度曲直の勢多く其の指
 揮に出づ文化二年四月役を創め月を逾る灌ぐ所五
 村なり後十一年又た役を創し八年を歴文政五年に至
 りて畢る灌ぐ所十有七村前に通じて十有七村渠の長さ
 凡そ五千三百丈田の渠水を受くること凡そ二百餘町
 民其の利に頼るもの多し文政十年病みて家に歿す(紀
 伊國風土記)

ナカムラ **ノブイチ** 中村延市 陸軍歩
 兵中尉なり福岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役
 に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中三十七年十月
 十三日清國遼寧省高力勾北方高地附近に於て戰死す戰
 功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナカムラ **ハンシチ** 中村半七 陸軍歩
 兵少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役
 に於て豫備役より召集せられ歩兵第七聯隊附として從
 軍中三十七年十一月二十六日旅順要塞盤龍山西砲臺に
 於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナカムラ **ハンシチ** 中村半次郎(キ
 リノトシアンキ)

ナカム

ナカム

ナカム

ナカム

ナカム

ナカム

ナカムラ ヒコベエ 中村彦兵衛 笛吹

ナカムラ ヒサマサ 中村尚政 劍客

ナカムラ ヒヤウキチ 中村兵吉 陸軍

ナカムラ ヒロシ 中村廣 陸軍歩兵中尉

ナカムラ フクスケ 中村福助 ナカム

ナカムラ ツツアン 中村佛庵 書家

ナカムラ マサハル 中村政輔 慷慨家

ナカムラ マツエ 中村松江 三代目 中村

ナカムラ ミツノリ 中村光議 陸軍歩

ナカムラ リツゼン 中村栗園 儒者

む岡田眞吾に從ひて漢學を修め樂大に進む十八歳で...

長として六月出征し旅順攻圍軍に参加せしが七月二十...

ナカム

ナカム

ナカム

丹の歌人なり通稱孫四郎掃磨赤穂侯に仕へ歌學を以て...

ナカムラ ヨシカタ 中村義方 陸軍砲

ナカムラ ヨシタネ 中村嘉種 高知藩

ナカムラ ランケイ 中村蘭溪 大瀧藩

一覽) ナカムラ リカウ 中村里好 中村歌右衛...

ナカムラ ヨシオミ 中村良臣 攝津伊...

ナカム

る明治已に列藩封土を奉還す藩主知事となり...

ナカムラ エンタ 中村圓太 勤王家なり...

ナカム

兵助の次男なり天性英邁にして...

ナガモト 長元 備前長船の刀匠にして...

ナカモ

めたりと雖も遂に得ず圓太乃ち筑紫門...

ナカヤサ エンタ 永保 山城三條の刀匠にして...

ナカモ

二世長元は長船に住す永仁乾元年間の人なり...

ナカモ

にして永和比の人或は元亨比の人と...

ナカヤ

ナカヤサ エンタ 永保 山城三條の刀匠にして...

ナカヤ 一ノ之に薄る城中兵隊しと雖も能く拒ぐ助死し長次亦戦死す家最も強勇馬術に達す努力風を才數十人...

ナカヤマ カナメ 中山要人 舊幕臣 なり家代々武州入間郡飯能字中山二千石を領せり...

ナカヤマ キンチ 中山錦治 陸軍歩兵少尉 第六師團歩兵第四十八聯隊附として従軍中三十七年...

ナカヤマ コウイチ 長山孔寅 四條風の畫家なり字は子亮、紅圖と號す又五嶽、牧齋の號あり...

ナカヤマ セツシヤウ 中山攝政「フヂナカヤマ」ハロモロイ 中山善吉 陸軍砲兵少佐...

ナカヤマ タケシラウ 永山武四郎 舊幕臣 陸軍大佐にして同九月開拓使八等出仕となり...

ナカヤ

には之に従ひ鞍馬二頭米百斛槍甲胃大小刀各百箇を納む曰く駿河守小藩にして薄力即時命を奉ずる能はず...

ナカヤマ タダヤス 中山忠能

中山忠能 明治天皇の外祖なり権大納言忠頼の二子文承六時十一月京都...

ナカヤマ テウダウ 中山湖堂

中山湖堂 俳人なり信濃の人壯年江戸に出て、樽海と號す撰集數部あり

ナカヤ

晩に歸國して明治廿六年十一月十日長野町に歿す(三森松江氏寄)

ナカヤマ トクヲ 永山徳夫

永山徳夫 名は眞武徳夫はその字一水と號す晩に迂亭と改め十兵衛と通稱す...

ナカヤ

僅かに四十四河上山先登の次に擧る(事實文編、日本教育史資料)

ナカヤマ ナイダイジン 中山内大臣

中山内大臣 中山直熊 明治十三年五月を以て熊本縣鹿町に生る家世々肥後藩士たり...

ナカヤ

曰く勲隆と雖も條理に遠ふの事は之を奉せざるへし五日後醍醐帝北條高時を誅す太平記に之を天皇御謀...

ナカヤ

愛親曰く善く其意を了せり歸京の後天子に奏すべし然らば則ち是に一個の問題あり徳川將軍二世秀忠は女東...

ナカヤ

となりたりき信名資性落頭を酒を嗜み條録皆これが資となりたり或時は麗々花柳に遊びて云に從はず林家の...

ナカキ

名大に轟く聞く者嘆伏せざるなし時に年二十六享和三年八月四日歿す年三十七人皆其の早世を惜む私諡して文明と曰ふ著はす所一夜十賦の外仙波遺稿あり(續近世遺蹟) 納言家人物志(鑒定便覽)

ナカキ

志、詩書先私諡、竹山文鈔等あり二子を譽く長は曾弘次は曾孫(續近世遺蹟) 納言家人物志) ナカキ トウゲン 長井東原 儒者も名は英賢字は俊剛武兵衛と稱す長門の人なり業を山縣周南に受け兼て和歌を善くす

ナカキ

十二織田信雄之を賞して勝入の佩刀を賜ふ家康亦其及田一千石を賜ふ十八年武相二州の地五千石を賜はる文祿元年直勝那古耶の行營に從ふ秀吉親ら營に至りて軍事を議す直勝其の側に在り見て之を問ふ家康曰く永井直勝なり秀吉曰く池田勝入の首を獲るもの非ずや公の帳下に騎勇絶無比の士あり我をして欲樂に勝へざらむと四年三月(逸史)に天正十四年十一月に作(從五位下)に叙し右近大夫に任ぜらる豊臣秀吉姓豊臣氏を賜ふ慶長庚子の亂直勝家康に屬し事平ぐに及びて近江の田二千石を賜はる是の役や將士皆奮戦して殊功あり功を論じ賞を賜ふに及びて井伊直政、本多忠勝之を少しと爲して未だ命を拜せず各々密かに所懐を述ぶ直勝之を挫きて曰く卿等が我公一二の世臣にして謀を貪り賞を拜せず其の言の鄙陋なるや是れ所謂の匹夫の論ずる處にして將帥たるもの、勝ふべき所に非らざるなりと其後二人過を改め非を悔ひ直勝に謝して曰く過言甚だ悔ゆ卿は實に我が信友なりと來りて交誼を修め直政の家を傳ふる所の茶器文球と號する者有贈る大阪冬の役直勝軍奉行を以て師に從ひ夏の役又從ひて功あり事平ぐに及て家康の命を受け諸部を領法を糾明す元和二年上野小幡の田一萬石を加賜せらる三年當陸の笠間に移り邑三萬石を食む五年掃部、土浦等の地二萬石を加へ八年移りて下總の古河城に封ぜられ先後併せて邑七萬石を領す寛永二年十二月卒す時に年六十三法名を長嶺高珍と號す時に細川玄直と云ふものあり足利氏に仕へて幕府の故事に明かなり直勝家康の命を受け玄直に就て悉く其の説を得是に由りて家康諸勳臣と稱ひ足利の舊典に因て取捨を加へて一代の法を立つ制法嚴密規模宏遠前古未だあらざる所なり而して此に至るに直勝興りて力ありと云ふ四男あり尙政、直清、直貞、直重而して尙政直勝の後を嗣ぐ(野史、名臣言行錄)

ナカキ

遺老なり介堂と號す岩之丞と稱し支那頭に任ず文化十三年十一月三河國東原邑に生る父は從平主水正(大給恒の曾祖父)母は家女三歳にして父母共に歿し江戸に來り廿九歳旗本永井能登守の養子となる弘化四年春學問學藝館を以て部屋住より番士年俸三百俵を受く翌年春學問所吟味を受け甲科に登る嘉永六年八月徒士頭布衣に任ず同年十月日付に轉じ海防掛砲臺建築大砲製鑄の事を司る安政元年長崎に在勤一ヶ月關西に照會し同國の海軍士官を長崎に招き旗本の士に海軍技術を傳習す依て海軍傳習の事を擔當し傳習生を統轄す此年和蘭國傳習師軍艦スームビヤ號に搭け來航す傳習師は船將一人士官三人下等士官井水夫船長等若干人軍艦は傳習艦として關王より幕府に贈る所觀光九と改號す旗下の士傳習生として來崎するもの勝藤太郎、矢田堀景藏、木下謙吾、榎本登次郎、榎本恒輔、浦實與力中島三郎助、佐々倉桐太郎、同心六七人、菟山代官江川太郎左衛門手附長澤剛吉、肥田濱五郎等八人其他他天文方出役、鐵砲組同心、船手組同心、鹽田島水夫等若干人傳習生各々業を分ち船將の心得前用番番番汽機關船砲術測量砲術を受けたり同二年九月尙志諸大夫に班し玄蕃頭と改名し十一月徒五位下に叙せらる安政四年海軍の業務を成り三月徒三分の二を率ゐる觀光丸にて東歸し新島を築地に設け操練所と名く其の局事を擔任し歸崎の生徒をして在府旗下の士に其術を再傳せしむ海軍已に興れば造船所の設必要なり在崎の日長崎奉行に談し聯合はす依て職權を以て關西に託し造船器械を關西に購買す東歸の後其の器械船來し長崎に造船製鐵所を置く同年十二月勘定奉行に轉じ海軍事務を擔任す同年七月外國奉行の職を置く關西正岩瀨肥後守等三四輩と共に外國奉行に拜す其の後英佛露の使節來る同僚三四輩と應接の委任を受く三國各異議あれども終に普米國條約に準じて約成る横濱を以て貿易地と爲さんとす而して其の地頗る荒蕪米國使節初め肯ぜず談判數回経て詰して貿易地と定む安政六年軍艦奉行に轉ず八月職罷せられ免職居す文久二年復起して軍艦役頭東京部奉行を申付らる元治元年二月大日付に轉じ猶京師に在り十月尾張老公に從ひ藤州廣島

ナカキ

に至る尾公毛利家の處分幕府に申述して幕議に請じず東歸して職を免じ再び大目付となる慶應元年昭徳公大阪に至り召されて再び大目付となる同年土佐の後藤象次郎藩主容堂の意見書を得て旅館に來り幕府に執達せしむ之を見るに王政復古の書なり象次郎に諭し直に在京の關老に出さしむ慶喜其書を採用し表奏を作らしめ上奏して政權を奉還し後大阪に至る同四年正月慶喜大阪に入り入朝せんとして戒心あり志を率ゐ先驅四ヶ塚に至りて變起終に海路東歸す尙志一時紀州に退き東歸す八月箱館に渡る翌年五月梅嶺伏誅し紀州所獄に入る明治五年正月六日特赦を蒙り十二日開復御用掛を命ぜられ九月左衛門少輔に任じ同八年元老院權大書記官となる九年十月免職二十四年七月一日歿す年七十七先にて特旨を以て從五位下に叙せらる

ナカキ

子なり子中と稱す幼時時將軍徳川家康に仕ふ父致仕する時尙庸其の采封を分領して從五位下に叙せられ伊賀守と稱す養者番及び少老職を歴て京師所司代に補し侍從となり諸邑を加へらる尙庸幼より學を好み願職に居て其の蓄を遺れず號して壁陰軒又た閑通子或は逸藻庵と曰ふ子直敬嗣(野史)

ナカキ

ナカキ トモユキ 中井友之 藝師彫工なり善兵衛と稱す長州の人萩府細工町に住す其の名世に著はる(藝師寄寶)

ナカキ

ナカキ トモユキ 中井友之 藝師彫工なり善兵衛と稱す長州の人萩府細工町に住す其の名世に著はる(藝師寄寶)

ナカキ

ナカキ ヒサマサ 永井尙政 直勝の第一子なり小字は傳八郎年甫めて十四徳川家康に小山及び關ヶ原の役に從ふ二年を歴て秀忠に仕へ常州貝原孫の地一千石を領す慶長十年從五位下に叙せられ信濃守と稱す大阪夏の軍に從ひ先驅して功あり明年食邑を加賜せられ元和八年老職に列し書院番頭を兼ね父卒して家を継ぎ封邑を割きて諸弟に與へ各々幕府に仕へしむ寛永十年職を免じ轉じて山城の淀城に封ぜられ邑十萬石を食ふ京師徳川の鎮護と爲る正保二年從四位下に進む萬治元年仕を致し變を削りて信濃と號す寛文八年九月十一日(或は云ふ十三日なり)卒す時に年八十二尙政願年にして井伊直孝に面し請ひて平常持節の旨を問ふ直孝其の志を嘉みし日を期して之に教へて曰く寛文は即ち大敵なり子且此の語を忘る勿れと尙政謹みて之を享くと尙政兼て茶道を好み織部氏に就て之を能くし信齋と號す五男あり尙征、尙保、尙康、尙成、尙冬而して尙征後を繼ぐ(野史、茶人系傳全集)

に感ずる所あり慨然書劔を負ふて江戸に至り名を馳せ
て殿島城と云ひ大に爲す所あらんとす己にして忽ち
藩邸の捕ふる所となり鹿島に遷せらる弘時に年十
八然れども憂國の志を挫かず一夜同藩士安立某等
と藩を脱して京都に入る然れども藩邸の吏(時に鹿
島藩の邸京都に在り)類りに物色するを以て遂に土佐
に奔り後藤象次郎に倚る象次郎に語つて大に其才を
奇とし吉田元吉、坂本龍馬等と相謀りて資を給して英
國に留學せしむ數年にして歸る宇和島藩主伊達宗城其
名を聞き感之を招く弘時に宇和島に遊ぎ改て中井弘
三と稱し宇和島藩周旋方として京都に避き廣く藩藩有
志の士と交を結ぶ時に鹿島島の人中村半三郎(桐野利
秋)も亦周旋方を以て京都にあり弘時に之と往來して
計畫する所あり既に遂に維新の風雲に際會し明治
元年正月外務事務各公使應接掛を命ぜられ兼て佛人
暴殺の事を按檢す二月各國公使東京に朝す途次兼て佛人
直に英國公使パークスに遇る是時弘時は後藤象次郎と
俱に同行の列にありしを以て身を挺して之と格闘し終
に之を捕斬し公使を以て無事なるを得せしめたり是
由て大に其勇を賞し金裝刀を贈る後神奈川縣列事に
任じ東京府列事に轉じ専ら軍資調達事に任ず當時御
親征の趣意未だ明ならず加ふるに府民猶ほ徳川幕府の
政治に倦々として獻金の如きは之を促す所あり終に
者なし弘乃ち數名の豪商を召して勸誘する所あり終に
數十萬圓の獻金を見るに至り奥羽出征の官軍を以て糧
餉缺乏の難境に陥らしめざり二年七月職を辭す官其
精勤を賞し布及び金千兩賜ふ三年官官職改正の令を
發し従來職階の者は悉く本國に歸らしめ無職の在府
を禁じ弘は職を以て辭す以來高知宇和島等に轉居す
と雖も素より公然其の精を有せしにあらざりて無籍
者なり乃ち鹿島島の舊藩に歸り閑居然風月を弄する
一年桐野利秋、野津鎮雄、高島綱之助等と日々往來し
論を上下す四年四月鹿島藩大參事西郷隆盛兵四大隊
を率ゐて東上せんとす其の意將に參謀西郷隆盛兵四大隊
せんとするにあり弘乃ち隆盛を助て同行を請ふも許さ
れず桐野利秋の斡旋により調役(會計官)となり軍隊に
屬し上京するを得たり七月兵部大員に任じ幾くもなく

ナカキ

ナカキ

ナカキ

して大藏生に遷る五年五月左院四等議員に昇り米國に
航し七年十月公使館書記生に轉じ英國公使館に在留す
る三年遂に佛、獨、伊、露等の各國を巡視して九年三月
歸朝す其間渡遊記程の著あり汎く世に行はる後果進し
て工部大書記官より十七年滋賀縣知事に任じ正五位に
叙せらる奉職七年商工業を奨励し教育を振興し縣民に
裨益を興ふる計からず廿一年五月勳三等に叙せらる廿
二年八月元老院議員に轉じ從三位に進む九月貴族院議
員に勳選せらる十月錦旗勳章を命ぜられ爾來鳴涯に
應を給ひ山水明媚の間吟賞優遊以て餘年を靜養せんと
するも如くなりしに府民の希望と閣員の勸誘は辭
年開會の博覽會事件には非常の熱心なを以て拮据經營せ
り二十七年十月特旨を以て正三位勳二等に叙せられ瑞
寶章を賜る同月十日京都荒神の邸に卒す年五十七洛東
東福寺に葬る弘人及び淡泊瀟瀟酒人に對する城市を設
けず高談放言敢て憚ることなし少壯より流離困窮の裡
にありて儒に浮世の辛酸を嘗み盡さざるなし和漢洋の
學に涉獵し詩文書を能くす詩書は最も其得意とする所
にして書は鹿島島の大家駿島藩に學ぶ藩の書名は九州
に喧傳し人知らざるものなし故に弘の藩を脱するや途
上駿島の子と許稱し至る處揮毫料を得て費を辨せしと
云ふ弘は天下の名士に於て知らざる者なし殊に伊藤井上
後藤の三伯は三十年の政友として又一個の朋友として
水魚の交あり其病卒するや井上伯はヘルツ國手を派し
て執せしめたるも及ばざり

原の役に故ありて國を去り蒲生氏郷に事ふ氏郷卒して
又た上杉景勝の謀を食む奥州福島に戦軍騎出で敵陣
を候ひて伊達政宗の伏兵に圍まる道存六騎と戦て首四
級を得たり之に類せる武功新聞あり嘗て少壯の時三州
長篠の役に戦て右指を墮され爲めに刀を脱す敵之を奪
ひ去る道存道及して其刀を取り撃て其敵を倒す人其の
指の關たるを問ふに毫も羞功を語らず曰く是れ馬に嗜
れし疾なりと(豪傑言行錄)

ナカキ ムラサダ 長井村定 九郎と稱す
身の長け八尺七寸力關八州に比する者なし魁の長き二
尺坐する時は膝に垂る故に世人號して尻九郎と曰ふ上
杉朝成に仕ふ朝成北條家と武藏野に戦て敗北す村定曰
く我れ斯る時に死せずんば何れの時をか期せんとい
長け四尺三寸の長槍を揮ひ敵數十騎を殲す後其の終る
所を知らず(本朝武功正傳)

ナカキ ヨシノスケ 中井仰樓 大阪の儒者
なり名は曾祖字は子反仰樓は其の號竹山の第二子藤園
の弟、蕉園死して後嗣を繼ぐ藤園の院長となる天保
十一年歿す年六十九(鑑定便覽、近世叢書)

ナカキ ヨシノスケ 永井芳之介 勤王
家なり水戸藩士なり詩は道正安政年中彰考館に召出さ
れ國史の編輯に與る元治元年甲子の亂に當り那珂湊の
郷校に在り藤、近郷の民を集めて尊攘の說を鼓吹せり
松平頼徳が那珂湊に屯するに及び道正は別に兵を募ら
んとて鹿島の地方へ赴くや途中敵軍に逢遭し包圍され
し幸ふじて之を脱し下郷小堤村まで遁れたるも遂に
捕へられ十月十六日に斬らるる年三十二(殉難錄)

ナカキ ランカウ 中井藍江 書人なり名
は直字は伯業藍江は其號、又師古と號す通稱書清、大
阪の人書を藩閩月に學び一格を以て門人多し詩文
を中井竹山に學びて能くす又茶道を嗜り天保元年七
月二十三日歿す年六十五(扶桑叢書、鑒定便覽、書乘
要略)

ナカキ リケン 中井履軒 近世の碩儒な
り名は履軒字は長叔、徳三と稱す履軒は其の名、寔庵の
二子、竹山の弟なり竹山と宋學を、井蘭州に學ぶ然れ
ども好みて群書を折衷し意に合はざる處あれば名賢鑑
儒と雖も辨駁避けず故に經義に於て別に一格を稱へ必

し宋學を學守せず又文章詞話をして甚だ奇致あり
近代の巨匠と稱せざる兼て草創を善くす然れども容易
に書せず人と爲り姿貌魁梧秀異字輩雄一世を睥睨す平
安りに戸外に出ず自ら蘭人と號し吃字經旨を考索し
て手に卷を釋て始め七經難題略を著して經旨を發
明す晩に七經達原を著して益々精微を致す竹山の死
後毎月數回尙書、儀禮書院に講じて弟子に聽かしむ文
化十四年二月十五日歿す年八十六著書七經難題略、七
經達原の外通語、傳疑小史、慎刑考、儀禮考、繁集
等あり(續近世叢書、續諸家人物志、鑑定便覽)

ナカキ アキナガ 長尾顯長 白井長尾の
屬なり其先長尾の弟景茂尾張守と稱す其の子景長修
亮と稱す景長の子政長亦た修亮尾張守と稱し景長の
城主たり制臺して景朴と號す子なし顯長を養ひて嗣と
なり顯長は實は由良成業の二男なり(軍談に成業を宗
嗣に作る)初字は新五郎父歿するに及び足利氏に屬し
館林足利の兩城を兼れ領北條氏に隸す天正十一年
佐野宗綱と戦ひて之に克ち宗綱を獲り乃ち親族從者を召
し悦て曰く我佐野宗綱と戦ふこと多年今終に且仇の首
を獲我心甚だ樂しと乃ち宴を張て衆を饗す皆萬歳と
稱す江戸高橋岡り黙す顯長怪か問て曰く子何をか獲ふ
對て曰く臣の憂ふる所以は君今宗綱を獲て喜ぶ所な
り之に之に謙して未だ其禮を盡さず一なり彦四郎藤坂の
兩城未だ守備を設けず是二なり並に臣の憂と爲す所な
り顯長曰く善しと乃ち兵を分て彦四郎、藤坂の授を爲
し久米伊賀守等を遣して遣小田原に報す及政長見弟
を使者に賜ふ二月政長使遣由良國繁及び顯長見弟
を招く即ち小田原に往く政長命じて之を勵し兵を遣し
て金山館林足利を攻む顯長の留守大畑、久下等館林に
據り白石、淵名等足利城に據り三月より五月に至り皆
下らず里見氏兵を率ゐる鎌倉に入り相兵引き去る
七月顯長見弟歸郷して城に歸る天正十六年八月政長
直顯長等脱歸し聘禮疎濶にして且つ令する所に戻るを
悲り子無氏忠、氏勝等をして館林を圍ましむ旬餘にし
て披いず茂林寺の僧をして和を乞はしむ顯長悦び白石
豊前守、大畑治部少輔、加藤刑部少輔をして小田原に往
き幣を送らしむ氏直使者を拘留し入をして來り謂はし

ナカヲ

ナカヲ

ナカヲ

めて曰く若し我に屬せんと欲せば宜しく城を致して去
るべし他日地を擧ぐりて以て代へんと顯長憤然と雖も
三使者の死に就くを憐み避けて足利和野井の城に居る
氏直館林城を同族兵規に附す十八年關白秀吉小田原を
征伐す顯長由良國繁と小田原に往て北條氏を援く北條
氏滅するに及び城邑を沒收せらる(野史)

ナカヲ イクサブラウ 長尾郁三郎 勤
王の志士なり諱は武藏京都三條西洞院隱居の商人に
して店號を緒屋といふ夙に井澤長秀山崎闇齋本居宣長
等が著書を讀み遂に復古の道を欣慕し野々口正正が弟
子となり又江戸に往て平田篤胤の門に入り専ら國典を
研究し一室皇室の式微を歎き同志と共に國事を周旋奔
走する所少からず文久三年二月二十三日國門正胤等數
人と等持院に入りて尊氏以下足利將軍の木像を擲り之
を三條河原に梟し、が幾もなく事露はれ幕吏の手に捕
へられ翌年七月二十四日京都變動の際六角の獄中に斬
る年二十八明治二十四年十月朝廷其忠志を追賞して
特に正五位を贈らる(甲子殉難士傳)

ナカヲ ウキヤウノスケ 長尾右京亮
上杉謙信の族弟謙忠の第二子なり永祿五年五月謙信、
謙忠の罪を數へ河田親章、加治景英をして之に死を賜
はしむ時に右京亮にして兄右馬と與に母に從ひて邑里
に潛匿す上杉氏の諸老相繼して曰く謙忠の孤兒殺すべ
し謙信聽かずして曰く其の孤何ぞ我に仇を爲さんや
若し爲さば則ち是天命なり今之れを殺す抑も孤兒何の
罪かあると適々金と與へて之を放つ後年右京亮と與に
謙信の嗣景勝に仕へ加賀の市橋城に死す(野史)

ナカヲ ウマノスケ 長尾右馬助 上杉
謙信の族弟謙忠の長子なり永祿五年五月謙忠死あり上
杉謙信之に死を賜ふ時に右馬助にして弟と共に母に從
ひて邑里に潛む時に諸老曰く謙忠の子殺すべしと謙信
曰く孤子何ぞ我に仇を爲さんや若し爲さば是れ天命な
り其の孤何の罪あると適々金と與へて之を放つ後年上
杉景勝に仕へ加賀の市橋城に死す(野史)

ナカヲ カウウン 長雄耕雲 江戸の書家
なり牛左衛門と稱し柏葉堂と號す初め細井廣澤に學び
後一家を爲す世に長雄流と云ふ有馬氏に仕ふ寛延二
年正月二十三日歿す麻布新町淨淨寺に葬る(書畫便覽、

江戸名家墓所一覽)

ナカヲ カイヂウ 永岡一三 陸軍歩
兵少佐なり和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰
役に於て第十師團歩兵第十聯隊附として從軍中廿八年
三月五日清國盛京省柳屯に於て戦死す戦功に依り勳
四等功五級に叙せらる

ナカヲ オトド 長岡大臣 フヂハラウ
チマロ

ナカヲ オトド 長岡大臣 フヂハラウ
ガテ

ナカヲ キウム 長岡休夢 茶人なり利
休と同時の人茶道を以て世に名あり(茶人傳全集)

ナカヲ カゲイ 長尾景家 八條流の馬
術家なり八條房繁の門人享祿二年十一月六日歿す(武
術流祖錄)

ナカヲ カゲトラ 長尾景虎 ウヘスギテ
ルトラ

ナカヲ カゲナガ 長尾景長 但馬守貞景
の男なり但馬守と稱し泉齋(一)に享祿齋(一作)と
號す享祿元年正月十五日卒す嘗て高を狩野松榮に學び
て能くす其の白畫の像今猶ほ下野國長林寺に在りと云
ふ(皇朝名畫拾遺)

ナカヲ カゲノブ 長尾景信 姓は平、鎮
守府將軍貞文より出づ其の曾孫景政鎌倉権五郎と稱す
景政の後ち景弘(藩領譜、北條五代記)に景政の孫景弘
に作る○字は美記に云く村岡將軍忠道の三子鎌倉四郎
景村、景村の子景明、其長子大庭景宗次は長尾景弘と
○夏目安房記に云く其文の五世村岡太郎景通の嫡子鎌
倉権五郎景政、景政の五世景弘と)初め相模長尾郷を
領す長尾次郎と稱し關東八平氏の一たり景弘の六世敏
景上杉憲顯と是利直義に薩埵の戦に屬す軍敗れて信濃
越後の間に潛匿す正平七年春新田義山東に起るに途
び往て之に隸す遂に新田義一に依りて足利基氏に屬す
正平十八年上杉憲顯子憲春を以て越後の守護と爲し敏
景之が守護代と爲り割髪入道して教阿と號す敏景の子
景晴五子あり長は昌景(或は景清に作る)山内の内督領
たり入道して芳傳と號す次は景雄應永二十三年上杉禪
秀の亂に拒戦傷を被りて自殺す次は景忠扇谷の内督領

ナカヲ

ナカヲ

ナカヲ

なり字は子固正兵衛と稱し友山と號す人となり長身に... 母に事へて孝善く子弟を教ふ常に慷慨口を極め鎌倉...

の書なり何ぞ我國の教なからんやと井澤長秀、山崎闇... 寶、本居宣長等の著書を讀み終に復古の道に欣慕し野...

て出でず永正六年二月房能兵を率ゐて來り伐つ爲景拒... ぎ戦ふ房能敗死す國人來り屬する者多し宇佐美定行孤...

ナカヲ

ナカヲ

ナカヲ

忠勤努力勝て論ず可からず(日本古今人物史) ナカヲ ムボク 長尾無墨 南無家なり名... 田能村竹田の門人にして明治中清國に遊び書法...

久の弟にして隨越と號す俗稱彌五郎寛永の初年門人大... 西清清淵淨甫を從へ江戶に來る同六年京都に於て歿す...

ひて提督す恒に敵衣を眼す語に臨機を稱して暮、曰... 人因て號して暮露十歳と曰ふ南溪之を開き毅然自傳...

オシモ

オシモ

オシモ

然る後、醫事始めて道ふべきのみと世方に李朱を奉ず丹水務めて之を排す...

光院と曰ふ著書ありといへず家に蔵して世に流布せざ故に此に之を擧げず...

數月百廢俱に興り紀綱大に張る晴雲既に石狩より本郷に還り居ること數歳...

オサ シヤウカウ 奈佐勝 隅東と號す徳川幕府の士なり...

オシモト セイセツ 梨本晴雪 名は靜守字は公密...

オス シヤウカウ 奈須恒昌 醫者なり玄竹と稱す...

オシノキ スケタメ 梨木祐之 京都下鴨の神宮なり...

オシノキ スケタメ 梨木祐之 京都下鴨の神宮なり...

オス シヤウカウ 奈須恒昌 醫者なり玄竹と稱す...

オシモ

オシモ

オシモ

那が月殿より鉢を以て狙撃するに遇ひ重傷を負ふと雖も其三郎を追ひ其外に...

して藩主山内氏に仕ふ俊平文化四年正月二日坂本氏の家に生れ十年正月二十日伯祖父...

未だ明けず保太郎龍之助歸り來り深藏菊次郎を脱し去ると告ぐ...

オス シゲツネ 奈須重恒 醫者なり圓清と稱す...

オス シゲツネ 奈須重恒 醫者なり圓清と稱す...

オス シゲツネ 奈須重恒 醫者なり圓清と稱す...

ナス

舞し亞て進む誤り中... 舞し亞て進む誤り中... 舞し亞て進む誤り中...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス

山城に攻めしむ義富等の兵... 山城に攻めしむ義富等の兵...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス

鹿堅く制止す宇都宮の兵... 鹿堅く制止す宇都宮の兵...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス スケタネ 那須資胤... 高資の弟なり小字は次郎初め...

ナス

住し須藤權守と稱す貞信の六世... 住し須藤權守と稱す貞信の六世...

ナス

資實を生む資實は伊豫守と稱す... 資實を生む資實は伊豫守と稱す...

ナス

正保四年慶長三千五百を賜ひ... 正保四年慶長三千五百を賜ひ...

學びし時専ら漢魏の古學を始め師説を確信す後悉く
舊學を棄て程朱の説を奉じて専ら理學を唱へ古學を排
撃するを以て己が任とす遂に之を以て當世に名あり蓋
し此の時に當りて洛陽の間宋學を講ずるもの少なし故
に其の業大に行はる晩年阿波侯に仕へて儒官となり鶴
島に移居す世人呼びて四國の正學とす寛政元年九月十
一日没す年六十三著はす所左傳標例、學問源流、道統問
答、東遊齋、魯堂文集あり校定の書に校定左傳集解あり
(先哲叢書後編)

日致仕して閑居と稱す近年攘夷開港の騰起り朝野擾然
公武の間確執を生じ自然内國の安危に關はらんを憂
へ調和のとを盡力す朝廷また海防の件并に公武一和の
ため周旋すべきの旨を勅す元治元年四月宰相に任す
れを辭す慶應三年正月幕府大監察永井宗直を以て將
軍の直書を覽らし國務補助の内命あり且つ上京を促す
幕府大政返上に當て公武のため大に竭す所あり明治元
年二月六日職定職を命ぜらるる間四月二十二日從二位に
叙し權中納言に任す封土版籍奉還の事を長薩土の諸藩
主に謀り同二年二月長薩肥土の四藩連署し表を上る四
月行政官の職務に參事尋て職定に任す六月長薩開拓督
務を兼ね因て職定の職を辭す七月三日官其の請を尤す
七月更めて開拓使長官に任す八月大納言に任す九月老
血の症を發し四年正月十八日薨す年五十八、勳使五辻
少辨を以て特に之を弔し正二位を贈る舊管土民其の德
を追慕し私祠を建て崇祀すこれを松原神社といふ同八
年官准を得て之を縣社に定む三年三月又從一位を贈
る閑居せしむるに當り内閣空位に期に隨て發遣
封土に入らんとせしむるに當り内閣空位に期に隨て發遣
するを得ず是に於て大に奮激し入閣の後藩政を改革し
凡そ老臣の政務に與る者はこれを免じ代るに少壯の
者をして寺領を削り淫風を毀る商を抑へ農を勸め封
内に商品運輸するものは免許を與へ之に重視を課し
米穀酒類の輸出入には爲替料を貸與し以て内稅を罷し
自から奉ずるに節約を以て別荘五六ヶ所ありしも大
なるものは之を學校に納め小なるものは之を設け私學
を禁じ朱子學を以て藩學となし凡そ七歳以上は小
學に入れ十六歳以上は大學に入れに爲す所あらんとす
のほ其の餘十分の一を削る蓋し大に爲す所あらんとす
るなり安政の初大に熱病に罹り殆ど死せんとす藥師功
を奏して身體健康に復す是に於て専ら力を圖すに盡し
幕府より頗る敬愛あれども出でず然れども其主論益開
藩にありて島津重豪と最親善す水戸齊昭に至りては
議論を異にするが如し始終節約を以て一藩を維持し廢
藩置縣の際に當り黄金七十一萬兩を政府に獻じ別に軍
艦汽船七艘を納むといふ初め藩政を改革する時の内意
書取といふもの一條中に曰く一天の人君を生ずるは一

世の民を治るを實とす故に人君は必力を盡して天下國
家を治るは職分なり我等不才ながら公祖の業を嗣ぐ事
甚以恐怖至極の事に候然し勸勵努力力にある限り國家
中興致す事我等が所存候入國以來仕組等相立候へ共
未だ一步の明りも見え不申其の上近年之凶作にて百姓
共其だ難儀のよし承及ふ古人も民は國の本と言はく民
なくば實に國家一日も立行不申事眼前に候然者外向
も仕與相立候儀には候へ共猶又於側向仕與相立候儀衣食
より段々儉約致し軍國天災之備は勿論窮民を救ひ蘇養
孤獨之憂無之機專一之事一前條申候我等衣服之職去
春一通申候へ共未氣に合不申漢之孝文は天子にてさへ
上杉鷹山なども如斯まして我等が如き者幾度洗ひても
能事なり故に已來國許にては木綿ばかり着用可致さ
一飲食の事は我等幼少より奢美に致候へ共此節は朝食
は汁香の物二品限り晝食は平と香の物二品限平無之節
は血魚夜食は味噌鹽にて宜敷右之趣は其の方どもより
は申候儀に付我等より申開候云々嘗て嘉瀬の地に
死刑者あり因て近臣に命じて曰く明日將に罪人を刑せ
んとすと而して國中の民は皆我が子なり罪人を刑せ
んとすべし孤獨らく明日の魚肉を除かん抑へ罪人の
生ずるは政事の届らざるに由る實に國の耻といふべき
なりと少壯よりその民政國事に心をを用ひしを知るべ
し(鶴島家記録、大隈伯直話)

ナベシマ キヨフサ 鍋島清房 肥前本
庄の人姓は藤原其の先は太宰少貳政頼の三男經直、經
直の子經房相繼て太宰少貳と稱す經房の子茂尙(龍造
寺記、陰徳太平記並に清正左近と稱す)は清正の長子清房
鍋島と稱す子あり長は清正左近と稱す(三年に作る)龍造
寺家少貳時尙を授け杉筑紫、朝日等と田島邑に戦ふ
軍殆んど危し茂尙父子清房多年時職を擧ふ是に於て父
子三人及び士卒成く紅櫻を肩に掛け其の孫女を以て清
房を救ひ終に敵を破る家業大に振揚り其の孫女を以て清
房に妻はし本庄の田八十町を賞授す清房後駿河守と稱
す時に龍造寺周家蚤く卒して其の子長法嗣年尙幼
清房妻亦た死して驛なり周家の寡婦清房に謂て曰く卿
室氏を喪て孤居す憂謀して以て箕箒の業を怠らんと其

の入興に迫りて相見れば則ち寡婦なり清房驚愕す寡婦
清房に謂て曰く嗣子幼にして孤、依撫するものなし卿
の父子は非常の人なり希くは妾を育して嗣子の昆
弟となさん請ふ訝る勿れと遂に相偶り後清房入道して
剛意と稱し二子を生む長は信房豊前守と稱す次は直茂
俱に龍造寺の出なり(野史)

田三成新關を構へ東行の者を留め且之を欺き秀頼の命
を以て西に下村左馬介遺津の諸城を攻て之を抜く直
茂茂梅て死せんとす諸老達して止むして之を家康の陣
に便して罪を謝し哀免を請ひ且曰く聞く立花宗茂其の
城に據るを願くは宗茂を獲て其の罪を贖はんと家康之
命許す十月直茂兵を率て立花に向ふ宗茂之を拒ぐ直
茂撃て之を都に宗茂歸順し城を明け去る元和四年六月
月卒す年八十三法名日隆崇和、高傳寺と號す子勝茂信
濃守と稱す寛永十四年島原の役一族と共に大功あり
明曆三年卒す年七十八子多あり長子忠茂嗣(野史)

竊かに之を謀らんと欲す因りて以謂らる方今徳川氏に
相對するものは惟り上杉景勝あるのみ而して其の心を
誦らんには兼頼に若くものなしと乃ち兼頼に音問を求
め微雨凄涼の日を以て兼頼を迎へ密かに語りて曰く匹
夫にして四海を巻舒し微賤にして背雲に攀登する蓋し
大丈夫の志所なり我れ太閤秀吉の恩を蒙るも深く且
厚し故に其の在世の間は無論臣たるに試みんか欲す雖
ども千歳の後兵を擧げて運を一時に試みんか欲す雖
して惟も擧る所のもの徳川家業あり抑も之を如何せば
則ち可ならんかと兼頼亦嘗て此の意あり心竊かに悦
びて謂らる善哉其の策や三成家康を倒して四海を掌握
せば我亦景勝を殺して東州に管領たらん然りと雖も且
杉氏は二百年来越後を領し士民其の德に浴するといふ
し恐くは景勝を殺す士民怨みて從はざるべし是れ景
勝をして封を他に遷さしめしめて後事を擧ぐるに如
かざるなり是に於て答て曰く事恐くは成らざるに如
夫れ家康は深智の英雄にして山東九州を領せり且蒲生
氏郷黨勇にして會津を領し家康と姻戚の好あり卿若し
家康を謀らんと欲せば先づ氏郷を燈すべし氏郷已に燈
るれば其の嗣子獨幼難なるを以て罪に託し之を逐ひ景
勝をして移て其の地を鎮せしめ而して後嗣兵を起して
東伐し我れ景勝を誘ひて爽も撃たは必ず之を獲んと三
成之を可とし文祿四年終に瀬田正忠を勸めて氏郷を
殺し導て其の老蒲生郷治を誘ひ浦に印書を作りて國政
を専らにせしむ因て郷治國に歸りて益々跋扈し士卒怨
望百姓離散す慶長三年終に之を以て會津の子秀行を貶
して封土を宇都宮に遷し景勝をして會津に子秀行を貶
る所の如くす是歳八月太閤秀吉薨す是に於て三成兼頼
と相謀りて姦策を企て列侯の印章を偽造し盟書を假し
而して兼頼密に上杉景勝を勸め盟書を伺て離れ書を假し
極めて倚重の意を言ひ以て景勝の背を獲後景勝の封
に就くや兼頼巧に言を構へて己に老職の許狀を得たり
と稱し専ら陰謀を列侯道を修め獨權を庇ひ器械を鳩
め多く金帛を散じて以て土客を招致し又浦に四隣を刺
煽す是に於て東州黨然として聲聞日々に大坂に達す家
康其謀叛を疑ひ會津を以て書を兼頼に致さしむ承蒙
乃ち書を送て曰く景勝の四上掩蔽するを以て巷説紛紜

ナベシマ ナホシゲ 鍋島直茂 本名は
信生肥前本庄の人姓は藤原氏、其の先太宰少貳政頼の
三男經直經房を生む經房茂尙(龍造寺記、陰徳太平記並
に清正左近と稱す)を生む茂尙尙族鍋島と稱す子あり信
房豊前守と稱す弟は即ち直茂なり直茂小字彦彦法師、左
衛門大夫と稱す元慶元年大友宗麟帥を帥て大友討つ龍
造寺隆信直茂力戦功あり八月大友親貞と戦ひて
之を斬る初直茂人に謂て曰く我後暮の香茶を記號と
なさんと果して之に勝つ由て飯茶を改て香茶となすと
云ふ二年直茂小早川隆景と謀り隆景の爲に使者となり
て京師に行き四海の追討使を請ふ隆景之を許す隆景是
より征伐を恣にし威武益々張る直茂從ふ毎に功多し小
早川隆景初め直茂を見て肥前養父郡の田二百町を以て
之に贈りて曰く予嘗て卿が武勇を聞く今肥前和を請ふ
卿が以て信を致すと天正十年織田信長討つらるるや直
茂以爲らく天下必ず羽柴氏に歸せんとなら隆景に瀝り
使を遣し贈るに南蠻の帽子を以てす秀吉大に悦び書を
作りて之を謝す十二年二月隆信大擧して薩に入らんと
す直茂固く諫むれども聽かず遂に薩兵と戦ひ敗れて隆
信之に死す直茂僅に免れて薩隆信の子政家立て昏暗
なり直茂宗族を以て國家の事を攝す大に衆人の心を
得たり更て加賀守と號し隆信の仇を復せんと欲す秀吉の
薩を征するに會し政家に代りて嚮導となり先鋒を勸む
文祿元年十月朝鮮の役に士民を撫して安邊に次す十一
月兵三千を以て十倍の師と戦ひ之を破り首千餘を得たり
慶長二年再び軍監となりて渡海す三年秀吉薨じ伏見
大阪騒動す時に直茂馳て伏見に到り家康の第を守護す
且つ曰ふ臣若し難に死せば則ち子孫をして公と俱に盛
衰を同くせしめんの家康厚く謝す慶長庚子の秋家康東
征す直茂子勝茂をして軍に従はしむ師に後れて發す石

ナベシマ

ナベシマ ナホシ

ナベシマ

たり内府危疑して... 我れ足下と酒あり... 昌幸父子は甲信二州の兵を率へて八王寺より四面謀を合して夾み伐たば利を得るや一舉に在り請ふ疾く師を

ナホキヨ 直清 玉井長藏と稱す長門二王流の刀匠にして文政年間の人なり(古今鍛冶録早見出)

ナホツグ 直綱 藤原姓藤原氏の子にして忠綱の門人なり(古今鍛冶録早見出)

ナホキヨ 直清 玉井長藏と稱す長門二王流の刀匠にして文政年間の人なり(古今鍛冶録早見出)

ナホツグ 直綱 藤原姓藤原氏の子にして忠綱の門人なり(古今鍛冶録早見出)

ナホツナ 直綱 藤原姓藤原氏の子にして忠綱の門人なり(古今鍛冶録早見出)